第79表　西地区　範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表（4）

時期	土器様式	調査次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
後期	Ⅵ	79次	SK	103・105・120	105〔鼓柄横斧柄未成品（W3001）〕	105〔磨製石剣（SP3071）〕 120〔磨石（S3162）〕	120〔絵画土器（P5018）〕
			SD	117			
		80次	SK	－			
			SD	101・103・104		101〔石鏃（SP3024・3026・3040）、石錐（SP3048）、砥石（S3145・SP3093）〕	101〔絵画土器（P5056）、搬入土器（P5541（伊勢湾岸））、鋼鐸形土製品（D5005）、無孔土玉（D5045）、用途不明土製品（D5058）、大玉・軍材（A5001－1・2）、勾玉（A5021）、管玉（A5030）、骨針（BP5004）〕
		84次	SK	－			
			SD	－			
		89次	SK	－			
			SD	1114		1114〔石鏃（SP3036）、扁平片刃石斧（S3089・3091）、石錐（SP3079）〕	1114〔土器文様（P5109（木葉文））、矢羽状十斜線タタキ（P5153）、有軸横線文タタキ（P5154）、搬入土器（P5467（近江）・5484（伊賀・尾張）・5553（伊勢湾岸）・5576（?））、釣子形土製品（D5019）、土製投弾（D5024）、土器片切離軍（D5085）、彌（栓）（B5007）〕
		93次	SK	2102・2103・2108・2109・2111・2114	2111〔横鍬（W3006）、木錐（W3007）〕	2102〔石鏃（S3026）〕 2103〔石鹿丁未成品（S3074）〕 2111〔石剣（SP3018）〕	2111〔土器文様（P5117（横転流水文））、搬入土器（P5525（伊勢湾岸））、銅鐸形土製品（D5002）、用途不明土製品（D5056）、骨針（B5009・BP5005）、用途不明品（ヘラ状）（B5016）〕
			SD	1114		1114〔石鹿丁（S3062）〕	1114〔搬入土器（P5466）〕
古墳初頭	庄内・布留	79次	SK	108・109			108〔搬入土器（P5505（伊勢湾岸））、土器片切離軍（D5093）〕 109〔搬入土器（P5559（伊勢湾岸））〕
			SD	－			
		80次	SK	－			
			SD	－			
		84次	SK	110			
			SD	－			
		89次	SK	1122・1123			
			SD	－			
			SX	1102		1102〔石鏃（SP3030）〕	1102〔搬入土器（P5532（伊勢湾岸?））、銅鏃（M5404）〕
		93次	SK	2101・2124		2124〔石鏃素材（SP3089）〕	2124〔搬入土器（P5542（伊勢湾岸））〕
			SD	2102			
			SX	2101			2101〔土器文様（P5129（円形刺突文））、搬入土器（P5478（近江））〕

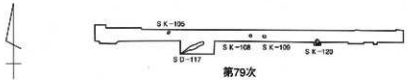
翡翠製勾玉２点（Ａ5018・5019）を入れた瑪石容器（Ａ5016）が出土している。再掘削溝であるＳＤ－101から弥生時代後期後葉の土器とともに出土したガラス製大玉片（Ａ5001）も、弥生時代後期初頭のＳＤ－105から同一片が出土したことにより、本来は弥生時代後期初頭の遺物と考えられる。さらに、第80次ＳＤ－101Ｂ・101には、銅鐸形土製品（Ｄ5005）や絵画土器（Ｐ5009・5024・5075）など特殊遺物が集中する傾向にある。こうした、第80次ＳＤ－101Ｂ・101の特殊性と対応するように、第93次ＳＤ－2101・2103は、第80次ＳＤ－101Ｂ・101と同一の溝である第93次ＳＤ－1114の手前で屈曲し、北東に延びる。これが、第80次調査区でＳＤ－101Ｂ・101に並行するＳＤ－102へと繋がっていた可能性は高い。つまり、第93次

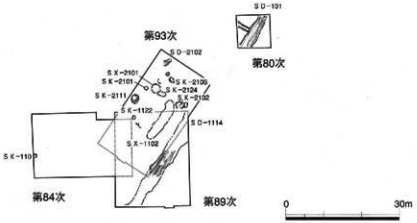
ＳＤ－2101・2103は、区画溝の手前で折れ、何かを画するかのようにめぐっていたとも考えられる。この点については、付近での調査を待って、慎重に判断すべきであろう。

西地区の墓に関連する遺構としては、第13次調査区で土器棺墓ＳＸ－01と人骨を検出している。ＳＸ－01は、弥生時代中期中葉の環濠であるＳＤ－01Ｅの埋没後に墓壙を掘り込んで、大型甕を身として壺胴部片を蓋としている。人骨は、大和第Ⅳ様式の完形高坏３個体が伴うＳＫ－07の南肩で検出した成人の鎖骨と尺骨である。この人骨と井戸とされるＳＫ－07の関係が今ひとつ不明である。人骨が土壙墓に伴うもので、それをＳＫ－07が切っているとするならば、大和第Ⅳ様式以前のものとなる。しかし、井戸の上層に完形高坏３個体を供献するというのは類例が無く、人骨との関係を考慮に入れておく必要もあろう。

（４）弥生時代後期前葉～古墳時代初頭（492図）

西地区では、大和第Ⅵ様式の遺構は点在する傾向にある。これは微高地にあって、遺物包含層や上面の浅い遺構が削平され、深い遺構である井戸のみが残存している為であり、本来の遺構分布状況を示すものとは考えがたい。ただし、第14次調査区では、完形品を多量に含んだ井戸と考えられる土坑を３基検出しており、集中する地点がいくつかあろうことは想定できる。なお、第14次調査区において、大和第Ⅵ－３様式の井戸であるＳＫ－106からは、送風管





第492図　西地区　範囲（内容）確認調査の弥生時代後期前葉～古墳時代初頭遺構分布図（Ｓ＝1/1,000）

片（M5160）が出土している。混入遺物とも考えられるが、第14次調査区からは他にも送風管小片（M5170）が出土しており、弥生時代後期後葉の青銅器生産がおこなわれていた可能性も否定できず、注意が必要である。この他、第11次調査区では、土坑の上層から多量の弥生時代後期後葉の土器とともに鶏頭形土製品が出土している。

唐古・鍵遺跡では弥生時代後期後葉に、多量の土器を含んで環濠が埋没する。それは、西地区でも第13次ＳＤ－04・06や第19次ＳＤ－102で認められる。この点については、区画溝である第80次ＳＤ－101・第89次ＳＤ－1114でも同様に多量の弥生時代後期後葉の土器を含み埋没している。環濠・区画溝ともに、意図的に埋没させられた可能性がある。

しかし、古墳時代初頭には西地区でも、環濠の再掘削がおこなわれる。第13次ＳＤ－05の上層からは、多量の布留０式土器が出土している。おそらく、北は第90次ＳＤ－101、南は第94次ＳＤ－101へと繋がり、西地区の居住域を画していたものと考えられる。

その居住域からは、西地区中央付近で第11次ＳＫ－21、第38次ＳＫ－101、第88次ＳＫ－2106の井戸と考えられる土坑から、完形の布留式土器が出土している。これに対し、西地区北側となる第84・89・93次調査区では、井戸と考えられる第84次ＳＫ－110を１基検出したにとどまり、他には明確な掘形をもつ遺構は確認できなかった。ただし、庄内・布留式の土器は輪郭が不明瞭な遺構、いわゆる落ち込みから出土し、量的にも少ないわけではない。あるいは、この落ち込みが住居跡である可能性も推測されるが、灰穴炉となるような炭灰土坑は確認できず、根拠に乏しい。居住域と指摘するにとどめておく。また、同じく北側の第79次調査区では、約2.8mの間隔をもって並列する径約0.8m、深さ約0.4mと同規模のＳＫ－108・109から、それぞれに伊勢湾沿岸の搬入土器が庄内式土器とともに出土している。ＳＫ－108は広口壺の上半部片（Ｐ5505）、ＳＫ－109はヒサゴ壺の完形品（Ｐ5559）である。遺構の性格としては、井戸のような深さはなく、柱の抜き取り坑とするにはほぼ正円であり、不明とせざるを得ない。しかし、同時期、同規模、伊勢湾沿岸の搬入土器という共通性から、両者が何らかの関連をもつことは疑いない。ヒサゴ壺の下半に施された穿孔から、祭祀関連の遺構とも想定されよう。

なお、古墳時代初頭の環濠内側では、墓に関連する遺構も確認している。第74次調査区では庄内期の方形周溝墓を検出した。その周溝内からは、内面に赤色顔料が付着した壺や庄内式甕が出土している。また、第19次調査区では、土器棺墓ＳＸ－101を検出し、ガラス製小玉３点及び破片３片、碧玉製管玉１点が出土した。これらのことは、西地区でも南地区における弥生時代後期後葉の方形周溝墓群と同様に、環濠の内側が居住域で外側を墓域とする意識が薄れていたことを示すものと考えられる。

この他、第93次調査区において中世素掘小溝から、砥石に転用された外縁付鉇２式と考えられる石製銅鐸鋳型片（M5002）が出土している。

第Ⅴ章　中央区の調査

第1節　既往の調査と成果

唐古・鍵遺跡の中央区については、第50・53次という2件の通学路整備に伴う調査によって、幅こそ狭いが遺跡範囲の中心部を縦断する南北200mのトレンチを入れた結果となり、その成果から設定された地区である。遺跡範囲の中央部については、国道24号線から東に田圃…町分入った水田地帯であり、市街化調整区域のため開発はなく発掘調査がおこなわれていないことから、その内容についてはまったくの不明であった。ただ、高橋学氏がおこなった唐古・鍵遺跡の微地形復原では、遺跡中央部に谷地形が読み取られており、北・西・南の3地区に比べ低いことが想定されていた。こうしたなか、平成4年度から平成5年度にかけて、田原本町建設課による唐古池から北小学校までの南北約200mの通学路整備事業に伴い、田原本町教育委員会が第50・53次調査をおこなった。

この2件の調査は、通学路整備事業に伴う発掘調査という性格上、200mという調査区の長さに対し幅は2m前後と狭いものである。調査時には湧水の激しい脆弱な地質により壁が崩壊し、深掘りは部分に止まっている。また、調査期間は水田地帯ということから、稲刈りが終わった11月初頭から年内中に限られていた。制約の大きい調査ではあったが、谷地形に伴うと考えられる弥生時代前期の河跡を2条検出し、本成果をもとに田原本町教育委員会では遺跡中央部における弥生時代前期のくぼ地を想定するようになった。また、弥生時代中期前葉以降は谷が埋没し居住域となるが、遺構は希薄であり弥生時代中期後葉の洪水砂と考えられる砂層堆積が確認できることから、依然として低地部であると考えられた。このため、遺跡中央部は、北・西地区が密な弥生時代前期遺構の分布から安定した微高地を想定して設定されているのに対し、低地部であることから切り離して中央区と位置付けられたのである。

平成11年度から平成12年度にかけては、第50次調査のおこなわれた道路から一本東側の南北農道での田原本町産業振興課による整備事業に伴い、第72・76次調査をおこなった。これは、南北100mの道路両側について、西側水路と東側擁壁部分で2年度に分けて調査をおこなったもので、隣接して並行する2本の細長い調査区を設定した形になった。調査区の幅が狭く、深掘りは不可能なため弥生時代中期前葉以前の遺構及びベースについては未調査であり、その旧地形を把握するまでには至らなかった。しかし、調査区南側と中央やや北寄りの2ヶ所で、溝の集中部分があり、これに挟まれた40mほどの範囲には柱穴や土坑などが散在している。柱穴や土坑などが散在する部分を微高地、溝部分を低地部と見なすことも可能であろう。また、調査区北端では前方後円墳と考えられる周溝と墳丘の一部を検出している。墳丘部について

第80表　中央区の調査一覧表

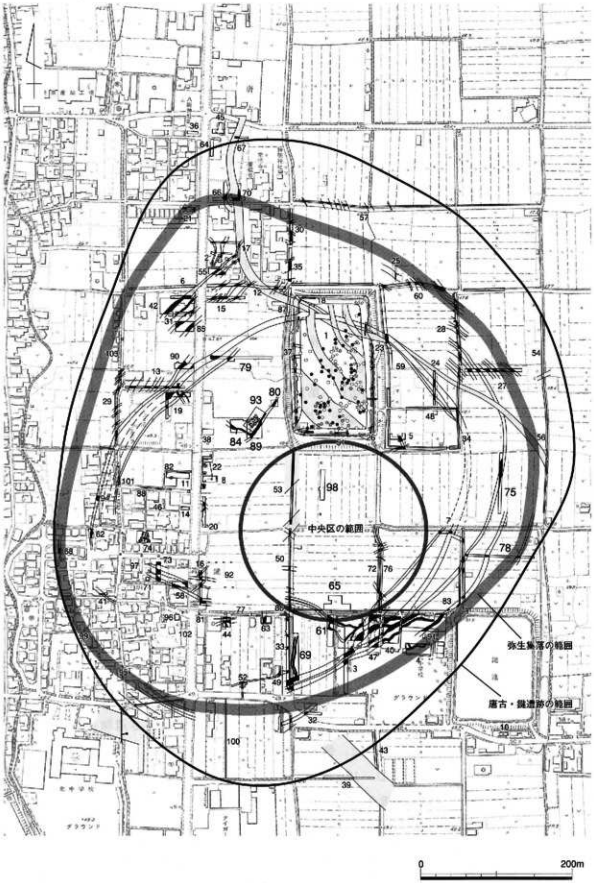
次数	調査地	原因	調査期間	調査面積	調査担当者	文献
第50次	鍵251～261東	通学路整備	1992. 11. 10～12. 27	215㎡	藤田 三郎	『田原本町埋蔵文化財調査年報』4　1994年
第53次	鍵242－2～249－1隣接地	通学路整備	1993. 11. 9～12. 28	235㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』4　1994年
第72次	鍵181－1他	用排水路改修	1999. 1. 7～3. 7	285㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』8　1999年
第76次	鍵181－1他	農道整備	2000. 1. 13～3. 21	236㎡	藤田・清水 琢哉	『田原本町埋蔵文化財調査年報』9　2000年
第98次	鍵238－1	範囲（内容）確認	2004. 7. 6～10. 23	253㎡	豆谷 和之 奥谷 知日朗	本報告

は、下層の調査をおこなっておらず、弥生時代遺構の分布については不明である。しかし、唐古・鍵遺跡における他の古墳の立地状況から推測するならば、微高地となる可能性が高い。このように第72・76次調査区は、かなり起伏に富んだ地形として復原されよう。

なお、第72・76次調査区の南端は、南地区とされる第47次調査区に接しており、中央区との境をいずこに求めるかが問題となる。先述したように第72・76次調査区には、南端と中央北寄りの2ヶ所に溝の集中する低地部があり、どちらかにその境が求められるのであろう。南端に求めれば、第61・65次調査区で検出された弥生時代中期前葉の大溝群の一部であることから、これらが南地区を画していたことになる。中央北寄りに求めれば弥生時代中期前葉の大溝群は南地区内に含められることになる。本報告では大溝群よりその北側を含んだ第65次調査区を南地区に含めて考えており、第72・76次調査区における中央北寄りの低地部に南地区と中央区の境を求めた方が位置的に矛盾はない。しかし、幅の狭い調査区だけでは、それを断定するだけの材料はない。なお、第61・65次調査で検出された弥生時代中期前葉の大溝群が弥生時代中期中葉の砂層で埋没した後は居住域となっており、地区というものが弥生時代全期間を通して固定的なものではなく、縮小・拡大していた可能性もある。周辺でより広い面積の調査による判断が必要となろう。

平成16年度に中央区でおこなった第98次は、範囲（内容）確認調査である。中央区の設定及びその地形復原が第50・53次という幅狭い調査区の成果に基づいており、それを検証するために第53次調査区から東へ約40mに調査区を設定した。調査の結果、第53次調査区南半のものとは異なる微高地を確認した。この微高地は幅狭く、調査区内で両側が落ち込み始めていた。つまり、中央区全体が落ち込みであるというような状況にはなく、網目状に走る谷と、それに挟まれた幅の狭い微高地が復原されよう。これは、先述の第72・76次調査区においても同様の状況であったと考えられる。

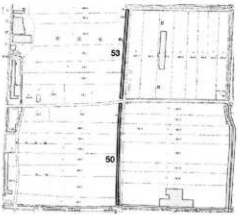
このように、中央区は調査の数及び面積が限られており、その評価は流動的である。しかし、今後の調査によっては、中央区のみならず遺跡全体の地形復原に影響を与えることが予測される。



第493図　中央区の位置（S＝1/5,000）

第50次調査

調査区　第50次調査区は、唐古池の西側を南北に走る道路のうち、池南西端から南約100mを起点とし北小学校の北側を走る東西道路までが対象であり、遺跡範囲の中央部でも南寄りにあたる。南延長上の道路では第69次調査、北延長上の道路では第53次調査がおこなわれている。田原本町建設課による通学路整備事業に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、西側水路の工事堀形に合わせて南北に長く、長さ107m、幅２mで設定した。



第494図　第50・53次調査区の位置（S＝1/4,000）

遺構検出面　本調査区では、弥生時代中期後葉～後期と弥生時代中期前葉の２面の遺構検出面を確認した。弥生時代中期後葉～後期の遺構検出面は、調査区南端では第Ⅶ層：暗灰黄色粘質土（ハード）の上面で標高47.50mであるが、徐々に低くなり調査区北端の35m手前の標高47.10mで途切れ、弥生時代中期前葉の遺構検出面と同一面となる。弥生時代中期前葉の遺構検出面は、調査区南端では第Ⅷ層：灰色粘土の上面で標高47.30mであるが、徐々に低くなり調査区北端の50m手前の標高47.10mで途切れ、第Ⅸ－ｂ層：灰黒色粘微砂の上面となる。

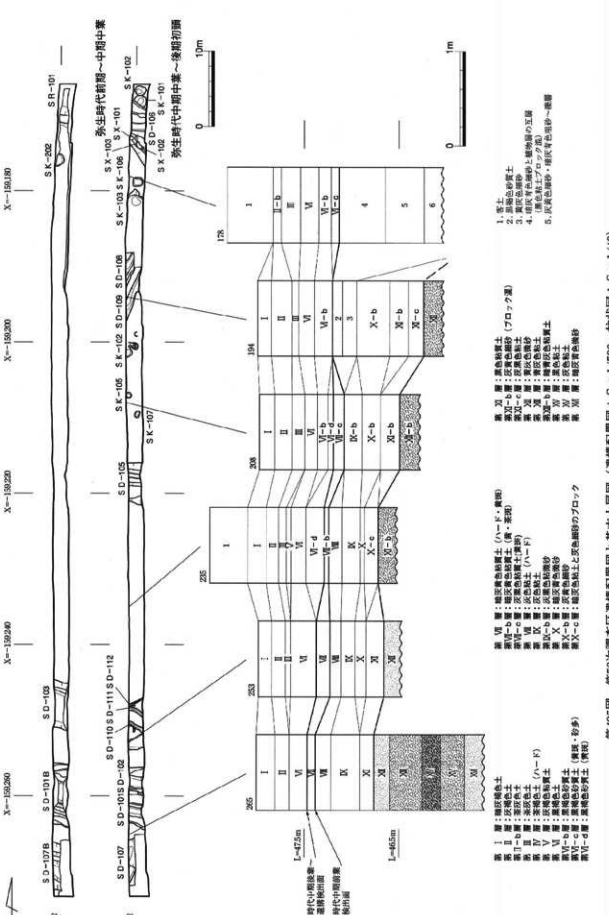
検出遺構　本調査区では、弥生時代前期～後期の遺構を検出した。本調査区は、遺跡中央部と南地区の境にあたり、各時期における遺構分布がその変遷を示している。

弥生時代前期　　：河跡１条
弥生時代中期前葉：土坑１基、大溝３条
弥生時代中期中葉：土坑５基、大溝２条、小溝３条、柱穴
弥生時代中期後葉：土坑２基、土器棺墓３基
弥生時代後期　　：土坑１基、大溝２条、小溝３条

備考　調査区中央から北で弥生時代前期の河跡を検出した。河跡は、弥生時代前期以前の谷地形に形成されたもので、その北肩は第53次調査区南端に及ぶ。

調査区南端で検出した弥生時代中期前葉の大溝３条は、東南東－西北西で並走する。このうち中央のＳＤ－101Ｂは、弥生時代中期中葉の洪水層と考えられる砂層で埋没するが、これを切って弥生時代後期初頭の並行する２条の溝が掘り込まれている。第61次調査区のＳＤ－101Ｂ・102Ｂの延長と考えられる。なお、ＳＤ－101Ｂからは特筆すべき遺物として、天竜川流域に分布する阿島式の壺が出土した。弥生時代中期中葉の大溝は、調査区の北・中央の２ヶ所で検出した。調査区中央のＳＤ－105は、ほぼ東－西に走行する。調査区北端のＳＤ－106は、南東－北西に走行する。本溝からは、銅戈を描いた絵画土器が出土している。

弥生時代中期中葉～後期にかけての土坑・小溝・柱穴も検出している。炭灰の詰まった土坑や小溝、柱穴は溝間の微高地上に分布し、居住域に関連する遺構と考えられる。また、土坑には土器を利用した集水施設が２基あり、弥生時代前期河跡の堆積土上に掘り込まれている。



第495図　第50次調査区遺構配置図と基本土層図（遺構配置図：S＝1/500、柱状図：S＝1/40）

この他、弥生時代中期後葉の土器棺墓３基は、調査区北端のＳＤ－106の堆積土上に掘り込まれ、一列に並ぶ。ＳＸ－101は口頸部を欠いた短頸壺に胴部を割った広口壺を蓋にしていた。ＳＸ－102・103は同一掘形内において、短頸壺の本体のみが残存していた。

第53次調査

調査区　第53次調査区は、前年度の第50次調査に続く唐古池の西側を南北に走る道路部分であり、唐古池の南端から第50次調査区の北端までの範囲を対象とし、遺跡範囲のほぼ中央にあたる。田原本町建設課による通学路整備事業に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、西側水路の工事掘形に合わせて南北に長く、長さ94m、幅2.5mで設定した。

遺構検出面　本調査区では、弥生時代中期後葉～後期と弥生時代中期前葉の２面の遺構検出面を確認した。谷地形の安定しない堆積土上面が遺構検出面となる。弥生時代中期後葉～後期の遺構検出面は、調査区南端は標高47.10mであるが北端では標高47.36mとなる。同様に弥生時代中期前葉の遺構検出面も、調査区南端は標高46.75mであるが北端では標高46.86mと高い。

検出遺構　本調査区の堆積層が脆弱なため、弥生時代前期の遺構は一部の調査にとどまった。検出された遺構は、弥生時代前期～後期のものがある。しかし、井戸や柱穴などの居住遺構の分布は、調査区南半の狭い微高地上に限られる。

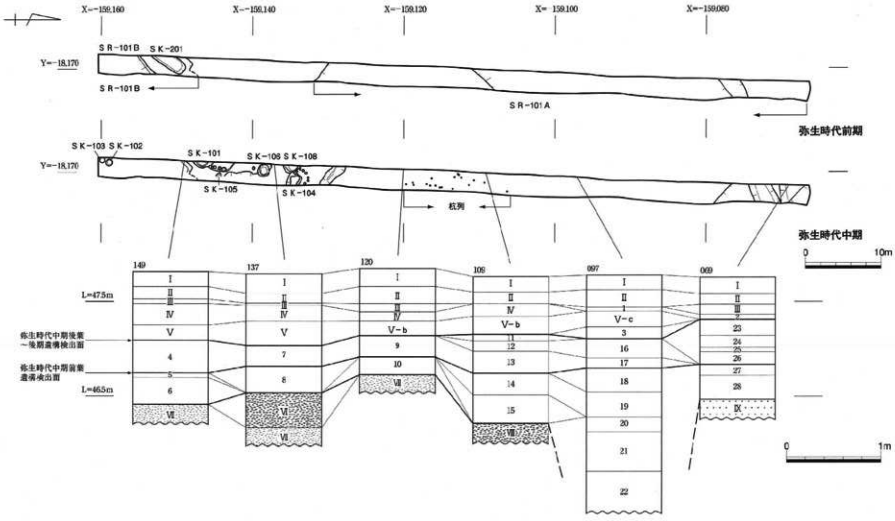
弥生時代前期　　：河跡２条
弥生時代中期前葉：土坑２基
弥生時代中期中葉：土坑８基、柱穴
弥生時代後期　　：落ち込み１条

備考　弥生時代前期の谷地形に形成された河跡を２条検出した。うち、１条は第50次調査区で検出した河跡の北肩にあたる。調査区南半では両谷地形に挟まれた、わずかな微高地が認められる。両河跡からは弥生時代前期中葉の土器が出土するが、南の河跡には動物遺存体（獣骨）、木製品、石器などの生活に密着する遺物が含まれており、居住域がちかいと考えられる。これら河跡は、弥生時代中期前葉に多量の土器を包含する灰黒色粘土・粘砂層によって埋没する。

弥生時代中期前葉の土坑２基のうち、調査区南端の１基は長方形プランの土坑で、中層から高杯・広鉢・鉢の各未成品、原材などが出土し木器貯蔵穴と考えられる。混入遺物として、浮線文土器が出土した。弥生時代中期中葉の土坑及び柱穴は、調査区南半の微高地を中心として検出している。炭灰層をもつ土坑については、これを中心として柱穴が直径2.50mの円形に囲むことから竪穴住居跡の可能性がある。このちかくからは、管玉の半裁品が１点出土した。

本調査区では、弥生時代後期の顕著な遺構はない。しかし、調査区南端の微高地の縁辺がややくぼ地（落ち込み）として残っており、土器の包含層がみられる。微高地の北側は土器層となっており、多量の土器に混じって翡翠製勾玉と銅鏃が１点出土している。

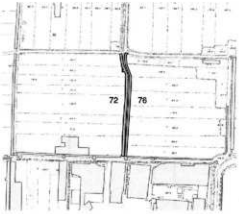
なお、調査区北端ではくぼ地を切るように砂層堆積がある。この堆積層は、第37次調査区の第２トレンチの南端で検出された弥生時代中期後葉の洪水層と考えられる。



第496図　第53次調査区遺構配置図と基本土層図（遺構配置図：S＝1/500、柱状図：S＝1/40）

第72次調査

調査区　第72次調査区は、遺跡範囲の中央部でも南寄りにあたり、東には第76次調査区が、南には第47次調査区が隣接する。田原本町産業振興課による用排水路整備事業に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、西側用水路の工事堀形に合わせて南北に長く、長さ110m、幅2.5mで設定した。



第497図　第72・76次調査区の位置（S＝1/4,000）

遺構検出面　本調査区では、近世、古墳時代～中世、弥生時代中期～後期の３面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、第Ⅳ層：灰褐色粘質土（砂礫含）の上面で、標高48.10mである。古墳時代～中世の遺構検出面は、第Ⅴ層：暗褐色土（砂礫多）の上面で、標高48.05mである。弥生時代中期～後期の遺構検出面は、第Ⅵ層：黒褐色土の上面で、標高48.00mである。

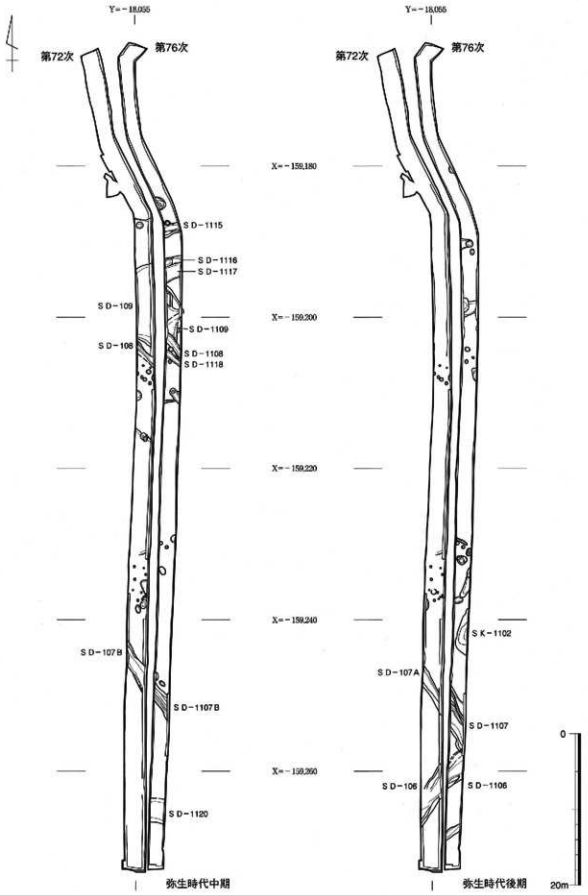
検出遺構　本調査区は、遺跡全体からみれば低地部分であり、弥生時代中期中葉では幅10mに及ぶ落ち込み状遺構を調査区の北半で検出している。しかし、弥生時代中期後葉以降は、土坑などが存在し、居住遺構の拡がりがみられる。

弥生時代中期中葉：落ち込み状遺構（大溝？）１条、大溝１条、溝１条
弥生時代中期後葉：土坑、柱穴
弥生時代後期　　：大溝１条、小溝１条
古墳時代後期　　：前方後円墳、円墳

備考　本調査区では、弥生時代中期中葉の遺構検出面で調査を終了しており、それ以前の遺構に関しては未検出である。調査区中央の北側で検出した弥生時代中期中葉の落ち込みＳＤ－109は東－西に走行し、幅11.50mに及ぶもので、深さは0.60m以上である。弥生時代中期後葉には埋没すると考えられるが、南端において弥生時代後期初頭の溝が再掘削されている可能性がある。この落ち込みの南肩を切って、南東－北西に走行する弥生時代中期中葉のＳＤ－108を検出している。調査区南半においても南東－北西に走行する弥生時代中期中葉のＳＤ－107を検出している。この溝は、弥生時代後期初頭の再掘削を受ける。

弥生時代後期には、西南－東北東に走行するＳＤ－106があり、幅2.50m、深さ0.80mを測る。第３・47次調査区で検出した溝と一連であり、弥生時代後期の居住域を区画した環濠の可能性がある。本溝の中層から上層にかけては、多量の完形品を含む土器片が出土した。なお、本溝の下層に重複する大溝を確認しているが調査はしていない。

古墳時代は、調査区中央で復原径25mの円墳と考えられる周溝と、その北で前方後円墳のくびれ部あたりの周溝を確認した。周溝から出土した埴輪などは墳丘から崩落した状態を良好に示していた。これまでにも本遺跡では、埴輪などが出土していたが今回の調査によって、後期古墳群の存在が明らかになった。



第498図　第72・76次調査区遺構配置図（S＝1/500）

第76次調査

調査区　第76次調査区は、遺跡範囲の中央部でも南寄りで、西に第72次調査区、南に第47次調査区が隣接する。田原本町産業振興課による農道整備事業に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、道路東側擁壁の工事堀形に合わせて南北に長く、長さ110m、幅２mで設定した。

遺構検出面　本調査区では、古墳時代～中世、弥生時代中期～後期の２面の遺構検出面を確認した。古墳時代～中世の遺構検出面は、第Ⅳ層：黒褐色土（砂礫多）の上面で、標高47.90mである。弥生時代中期～後期の遺構検出面は、第Ⅵ層：暗黄褐色土の上面で、標高47.70mである。

検出遺構　本調査区では、南端で弥生時代中期と後期の大溝を、中央やや北寄りで弥生時代中期の大溝を検出した。これらは西隣接地の第72次調査区の溝と一連となる。

弥生時代前期　　：土坑１基
弥生時代中期前葉：土坑５基、大溝４条
弥生時代中期後葉：溝６条
弥生時代後期　　：土坑１基、大溝３条
古墳時代前期　　：土坑２基
古墳時代後期　　：前方後円墳、円墳

備考　調査区南端において、弥生時代中期前葉の大溝であるＳＤ－1151を検出している。規模・走行方向等不明である。この大溝の堆積土を切って、南側には灰白色粗砂が堆積する。灰白色粗砂は、弥生時代中期中葉前半の土器が出土するＳＤ－1120に切られている。ＳＤ－1151は、第61・65次で検出した大溝群の一つであろう。ＳＤ－1107は、弥生時代中期中葉に掘削されるが、その後、弥生時代中期後葉、弥生時代後期初頭に再掘削を受けている。第72次調査区のＳＤ－107と繋がる。

調査区中央の北寄りでは、弥生時代中期前葉～中期中葉の溝が集中する。ＳＤ－1109は東北東－西南西に走行し、幅3.00m、深さ0.90mを測る。弥生時代中期前葉に遡る。弥生時代中期中葉前半にはＳＤ－1109を切って、南東－北西に走行する小溝のＳＤ－1108が掘削される。また、同時期の小溝として東北東－西南西に走行するＳＤ－1116が掘削される。弥生時代中期中葉後半には、ＳＤ－1116に沿ってその南肩を切ったＳＤ－1117が掘削される。規模は幅2.40m、深さ0.90mを測る。このＳＤ－1117から北へ４mに並行して小溝のＳＤ－1115が掘削される。また、ＳＤ－1108の南側に沿って同規模のＳＤ－1118が掘削される。

調査区南端で検出した弥生時代後期の大溝であるＳＤ－1106は南南西－北北東に走行し、幅2.70m、深さ0.50mを測る。上層からは多量の弥生時代後期後葉の土器が出土した。第72次調査区のＳＤ－106と繋がり、環濠の可能性がある。調査区全域で弥生時代中期～後期の土坑や小溝が散在し、密集度は低いが居住域の様相を呈している。また、布留期の井戸２基は南半で、古墳の周溝は北端と中央で検出した。中央の円墳と推定される周溝は重複している。

第２節　第98次調査報告

１．調査の経緯

平成16年度の第98次までに唐古・鍵遺跡では、８ヶ年に及ぶ範囲（内容）確認調査を実施してきた。調査は10ヶ年の計画でおこなわれてきたもので、最終年度は報告書作成にあてるため、今回が現地における最終調査となる。

これまで、遺跡の中央部となる唐古池の南側では、範囲（内容）確認のみならずほとんど調査がおこなわれたことはなく、その実態は不明であった。遺跡中央部については、第50・53次といった幅約2.5ｍの南北に細長い調査区の線的な調査成果から、地形は低く弥生時代前期の谷地形（微低地）があると想定されてきた。しかし、この谷地形（微低地）の状況や拡がりを明らかにするためには、十分な調査とは言えなかった。唐古・鍵遺跡における集落構造や変遷を考える上では、最終の調査を中央部でおこなっておく必要があった。

このため、田原本町教育委員会では平成16年度の範囲（内容）確認調査として唐古池南側の史跡地内で計画し、平成16年３月に開催した調査検討委員会において承認された。今回の調査は、遺跡中央部での面的な調査をおこない、遺構の分布を把握するとともに、旧地形復原にも重点をおくものであった。

第499図　第98次調査区の位置（Ｓ＝1/2,000）

2．調査の方法

調査は、庠古池の南に隣接する鍵238番１の南北に細長い休耕田でおこなった。調査区は、その水田の形状に合わせ長さ40m、幅６ｍの面積240㎡に設定した（第499図）。調査の過程において、調査区中央やや南寄りの西端で竪穴住居跡と考えられる円弧を描く柱穴列2/3を検出した。その全体を確認するために、調査区西側を3.5×1.3ｍで拡張した（拡張面積4.5㎡）。

範囲（内容）確認という調査の性格上、第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面で検出した弥生時代中期中葉から古墳時代初頭までの遺構の掘削にとどめた。柱穴についても、半裁した主要なものを除いては、上面確認だけにとどめている。ただし、旧地形把握のために調査区の南北両端では、調査区幅の６ｍはそのままで北端部から内側４ｍ、南端部から内側３ｍの四角い範囲について、ベースを確認するまで深掘りをおこなった。

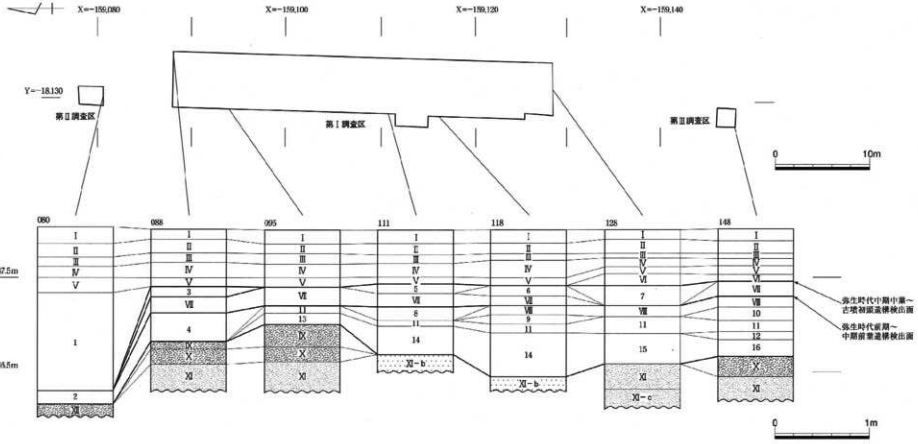
さらに、旧地形把握にはこの調査区のみでは不十分であると考えられたので、その北端から７ｍ、その南端から18ｍの位置にそれぞれ２×２ｍのグリッドを設置し補足調査をおこなった。南北に長い当初の調査区を第Ⅰ調査区とし、補足調査の北グリッドを第Ⅱ調査区（面積４㎡）、南グリッドを第Ⅲ調査区（面積４㎡）と呼ぶ。第Ⅱ調査区、第Ⅲ調査区については、旧地形把握を目的とするため、ベースを確認するまで深掘りをおこなっている。これらの調査区拡張により、最終的な調査面積は約253㎡となった。

調査期間は、平成16（2004）年７月６日から10月23日までで、実働日数は137日間である。出土遺物総数はコンテナ172箱である。

3．層序

本調査区の基本層序は、以下の通りである（第500図）。

第Ⅰ層：灰青色粘質土	〔水田耕土、	厚さ約0.1ｍ：標高48.00ｍ〕
第Ⅱ層：茶灰色粘質土	〔水田床土1、	厚さ0.15ｍ：標高47.90ｍ〕
第Ⅲ層：暗茶灰色粘質土	〔水田床土2、	厚さ約0.1ｍ：標高47.70ｍ〕
第Ⅳ層：暗褐色砂質土	〔中世遺物包含層1、	厚さ0.15ｍ：標高47.60ｍ〕
第Ⅴ層：灰褐色粘質土	〔中世遺物包含層2、	厚さ約0.1ｍ：標高47.50ｍ〕
第Ⅵ層：黒褐色砂質土	〔弥生・古墳時代遺物包含層、	厚さ約0.1ｍ：標高47.40ｍ〕
第Ⅶ層：黄褐色粘質土	〔弥生時代中期中葉～古墳時代初頭遺構検出面、	厚さ約0.1ｍ：標高47.30ｍ〕
第Ⅷ層：灰色粘質土	〔弥生時代前期～中期前葉遺構検出面、	厚さ約0.1ｍ：標高47.20ｍ〕
第Ⅸ層：黄灰色粘土	〔ベース、	厚さ0.2ｍ：標高47.00ｍ〕
第Ⅹ層：緑色粘土	〔ベース、	厚さ0.15ｍ：標高46.75ｍ〕
第Ⅺ層：青灰色シルト	〔ベース	：標高46.60ｍ〕
第Ⅺ－ｂ層：灰色砂	〔ベース	：標高46.60ｍ〕



第Ⅰ層：灰青色粘質土
第Ⅱ層：茶灰色粘質土
第Ⅲ層：暗茶灰色粘質土
第Ⅳ層：暗褐色砂質土
第Ⅴ層：灰褐色粘質土
第Ⅵ層：黒褐色砂質土
第Ⅶ層：黄褐色粘質土

第Ⅷ層：灰色粘質土
第Ⅸ層：黄灰色粘土
第Ⅹ層：緑色粘土
第Ⅺ層：青灰色シルト
第Ⅺ－b層：灰色砂
第Ⅺ－c層：青灰色シルト
第Ⅻ層：灰色細砂

1.灰褐色粘土と黒褐色粘質土ブロック（ＳＸ－2051堆積土）
2.灰色粘土（植物混）
3.暗褐色砂質土
4.灰色粘質土（ＳＫ－210堆積土）
5.黄灰色粘質土
6.暗褐色粘質土
7.黒褐色粘質土
8.黒灰色粘質土
9.暗灰色粘質土
10.灰黒色粘質土
11.黄灰色粘質土
12.暗灰色粘土
13.灰色粘土（炭混）
14.暗灰色粘土（炭灰混・青味）
15.暗灰色粘土（青灰色シルトブロック）
16.暗灰色粘土

第500図　第98次調査区配置図と基本土層図（トレンチ枠：Ｓ＝1/400、柱状図：Ｓ＝1/40）

本調査区では、現水田層（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層）の下で厚い中世遺物包含層（第Ⅳ・Ⅴ層）を検出した。第Ⅳ層：暗褐色砂質土の上面を検出面として近世素掘小溝を、第Ⅴ層：灰褐色粘質土と第Ⅵ層：黒褐色砂質土の上面を検出面として中世素堀小溝を検出した。第Ⅵ層：黒褐色砂質土は弥生・古墳時代の遺物包含層であるが、中世素堀小溝間での部分的な残存でしかない。

弥生時代中期中葉～古墳時代初頭の遺構検出面となるのが、第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面である。なお、ＳＤ－101から南側の第Ⅰ調査区中央部では、弥生時代中期前葉の遺構も一部検出している。これに対し、ＳＤ－101から北側は、第Ⅶ層：黄褐色粘質土を削って暗褐色砂質土が堆積しており、暗褐色砂質土の上面では弥生時代中期後葉以降の遺構を検出した。ＳＤ－101から北側における弥生時代中期中葉の遺構については、暗褐色砂質土の直下、弥生時代前期～中期前葉の遺構堆積土の上面が検出面となっていた。

弥生時代前期～中期前葉の遺構検出面となるのが、第Ⅷ層：灰色粘質土の上面である。なお、弥生時代前期の遺構検出面は、後半期はこの第Ⅷ層上面であるが、前半期は第Ⅸ層：黄灰色粘土の上面である可能性も考えられる。この点に関しては、第Ⅶ層：黄褐色粘質土以下について部分的な深掘りしかおこなっておらず、断定はできない。

本調査区におけるベースは、大きく二つに分かれる。第Ⅺ層：青灰色シルトと第Ⅺ－ｂ層：灰色砂である。青灰色シルトは、第Ⅹ層：緑色粘土へと徐々に変化し、さらに第Ⅹ層の上面で第Ⅸ層：黄灰色粘土が形成される。これに対し、第Ⅺ－ｂ層：灰色砂の上面には「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」が堆積する。この「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」は、量的に多くはないが前期弥生土器を含んでいる。こうした堆積層は他の調査区でも確認しており、これまで経験的にくぼ地に形成された弥生時代前期の遺物包含層と判断してきた。しかし、今回の調査区における第Ⅺ－ｂ層：灰色砂の上面は、標高的には第Ⅺ：青灰色シルトの上面と同じ標高46.60ｍで変わらず、砂層の検出をもって一概にくぼ地とはいえない状況といえる。また、本調査区の「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」が、遺物包含層であるのか遺構の埋土であるのかは、調査区西側の排水溝部分のみの観察であるため、断定はできない。

第Ⅰ調査区北端から北へ７ｍの位置で設定した第Ⅱ調査区では、２×２ｍの調査区ほぼ全体に及ぶ中世遺構ＳＸ－2051を検出し、弥生時代の堆積土が残る北辺部も下層は弥生時代前期の遺構であったため、基本層序となる堆積を確認することができなかった。調査区の北辺部にはＳＸ－2051が及ばず、標高47.50ｍで黒色砂質土を検出した。この黒色砂質土は、直下の標高47.25ｍで検出される灰色砂が土壌化したものと考えられる。黒色砂質土及び灰色砂は、弥生時代中期後葉に形成された洪水堆積層と考えられる。また、調査区の北辺部では、標高46.16ｍにおいて灰色微砂のベースを確認した。

第Ⅰ調査区南端から南へ18ｍの位置で設定した第Ⅲ調査区では、標高47.46ｍで第Ⅶ層：黄褐色粘質土を、標高47.30ｍで第Ⅷ層：灰色粘質土を検出した。ベースについては、弥生時代前期の遺構が掘削されているため第Ⅸ層：黄灰色粘土は確認していないが、第Ⅹ層：緑色粘土、第Ⅺ層：青灰色シルトは確認している。

第81表　土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	坑底土層	規模(m) 長軸	短軸	深さ	坑底標高(m)	時期(大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
SK-101	長楕円形	皿状	黄灰色粘質土	(1.90)	1.00	0.27	47.12	Ⅱ-3	搬入土器(播磨)	
SK-102	長楕円形	皿状	灰黄色粘質土	2.60	1.50	0.19	47.14	Ⅵ-1		
SK-103	楕円形	円筒状	灰色砂	1.75	(1.10)	0.96	46.46	Ⅳ-1	搬入土器	井戸
SK-104	不整円形	逆台形	—	※2.00	—	0.44	47.00	Ⅲ-2		東下半部が直立 灰穴炉
SK-105	長楕円形	皿状	灰黄色粘質土	2.80	1.16	0.18	47.18	Ⅱ-1		
SK-106	不整形	逆台形	明黄灰色粘質土	1.00	0.80	0.42	46.98	庄内	搬入土器(伊勢)	
SK-107	円形	半円形	—	0.92	0.86	0.22	47.07	Ⅱ-4		
SK-108	不整形	半円形	—	0.86	0.58	0.20	47.09	Ⅳ-1		SB-101灰穴炉
SK-109										Pit-106に変更 欠番
SK-110										SD-104に変更 欠番
SK-111	不整円形	皿状	—	0.74	0.66	0.12	47.28	Ⅱ-1		
SK-112	不整円形	逆台形二段	—	0.86	0.74	0.28	47.16	—		柱穴
SK-113	不整円形	逆台形	黄灰色粘質土	※0.98	0.92	0.28	47.07	Ⅳ-1		西端を近世井戸に切られる 灰穴炉
SK-114	不整円形	逆台形	—	0.80	—	0.18	47.17	Ⅱ-3		
SK-115	不整形	皿状	暗黄褐色粘質土	—	—	0.17	47.19	Ⅱ-2以前		灰穴炉
SK-116	楕円形	皿状	—	1.08	0.72	0.13	47.26	Ⅱ-2		灰穴炉
SK-117	不整円形	逆台形	—	(0.77)	(1.70)	0.54	46.86	Ⅳ-2		灰穴炉
SK-118	楕円形	皿状	—	1.40	0.90	0.11	47.25	—		SK-208の上部落ち込み
SK-119	溝状	V字状	—	—	(1.00)	(0.60)	—	Ⅱ-1		溝か
SK-120	楕円形	—	—	0.74	0.42	0.23	47.14	—		柱穴
SK-121	不整円形	皿状	—	0.86	—	0.16	47.24	Ⅳ		
SK-122	—	逆台形?	—	(1.24)	(0.84)	(0.40)	46.91	Ⅲ-2		灰穴炉?
SK-123	不整円形	逆台形	—	1.40	1.26	0.31	46.99	Ⅱ-3-b	柱状片刃石斧	灰穴炉?
SK-124	楕円形?	円筒状	—	(0.80)	(0.74)	(0.80)	46.47	Ⅳ		井戸
SK-125	不整円形?	円筒状	—	※0.80	—	※0.62	46.70	Ⅲ-1	搬入土器(伊勢)	井戸?
SK-126	円形	逆台形	—	0.60	0.50	0.24	47.03	—		柱穴
SK-127	—	—	—	—	—	—	—	—		柱穴
SK-128	隅丸方形	方形	灰色砂	1.50	(1.00)	0.78	46.54	Ⅳ-1	不明建築材	井戸
SK-129	不整円形?	皿状	黄灰色粘質土(焼土塊)	(1.00)	—	0.17	47.07	Ⅲ		
SK-130	長楕円形	半円形	—	(0.78)	(0.44)	0.18	47.18	—		柱穴
SK-131	不整形	皿状	—	※2.00	※1.60	0.18	47.22	Ⅲ		南側を炭灰土坑に切られる
SK-132	不整形	皿状	—	(2.30)	(1.40)	0.26	47.10	Ⅲ-2		灰穴炉
SK-133	不整円形	逆台形	—	※1.10	1.54	0.34	47.07	Ⅱ-3		
SK-134	不整円形	皿状	暗黄褐色粘質土	※0.60	—	0.10	47.22	Ⅲ		灰穴炉?
SK-135	不整円形	逆台形	—	1.08	(0.30)	0.28	47.02	Ⅲ-2		灰穴炉
SK-136	不整形	皿状	灰色粘質土	※1.00	0.82	0.18	47.25	—		灰穴炉?
SK-137	不整形	皿状	—	1.40	(0.56)	0.12	47.28	—	石剣	
SK-138	不整円形	皿状	—	(1.02)	—	0.20	47.22	—		SK-205の上面落ち込み
SK-139	楕円形	逆台形	—	1.34	1.10	0.52	46.78	Ⅳ-1		灰穴炉
SK-201	隅丸方形?	逆台形二段	—	(2.20)	(1.20)	(1.10)	(46.10)	Ⅱ-2	木製品多数	木器貯蔵穴
SK-202										欠番
SK-203	—	—	—	—	—	—	—	Ⅱ-2		南側をSK-201に切られる
SK-204	長楕円形	皿状	—	1.68	0.72	0.21	46.95	Ⅱ-3		
SK-205	不整方形?	皿状	—	(1.40)	(1.40)	0.25	46.89	Ⅱ-1		
SK-206										SK-139に変更 欠番
SK-207	隅丸長方形	逆台形	—	1.14	0.48	0.31	46.85	Ⅱ-4		柱穴の複合か
SK-208	不整形	皿状	灰色粘土	(1.30)	1.20	0.12	46.82	Ⅱ-3-b	石剣	
SK-209	円形	逆台形	—	0.76	—	0.13	46.95	Ⅱ-2		柱穴の複合か
SK-210	隅丸方形?	逆台形?	—	(3.00)	(2.00)	(0.80)	—	Ⅱ-3-b	搬入土器(河内)	木器貯蔵穴
SK-3101	不整楕円形	逆台形	—	1.10	0.60	0.40	—	Ⅲ		第Ⅰ調査区
SK-3102	不整円形	逆台形	—	0.80	—	0.30	—	Ⅲ		第Ⅰ調査区

※は復原値、( )は残存値

第82表　溝　一覧表

溝番号		規模(m) 幅(最小-大)	規模(m) 深度(最小-大)	溝底標高(m)(最小-大)	走行方向(高-低)	出土土器の時期(大和様式) Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	Ⅱ 4	Ⅳ 1	Ⅴ 1	Ⅵ 2	Ⅵ 3	Ⅵ 4	庄内	主要遺物	備考・重複関係
SD-101		2.20-2.30	0.30-0.44	46.94-47.08	東-西														絵画・黄入土器	
	B	3.30-3.70	0.66-0.74	46.62-46.72	東-西														搬入土器多数	
	C	4.20-4.60	1.10	46.15-46.23	東-西														卜骨	
SD-102		2.60-3.00	0.46	46.97	東-西														搬入土器(伊勢)	
SD-103		0.28-0.38	0.20	47.42	東-西															
SD-104		0.63-1.00	0.52	46.97-47.04	東-西															
SD-201		–	–	–	東北東-西南西															SD-101の底面で確認
SD-202		0.90-1.40	0.08-0.10	47.06-47.07	–															

第83表　竪穴住居跡一覧表

建物番号	平面形態	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	主柱穴	炭穴炉	検出標高(m)	時期(大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
SB-101	円形?	(3.00)	–	6?	SK-108	47.30	Ⅳ		

第84表　性格不明遺構一覧表

遺構番号	平面形態	断面形態	坑底土層	規模(m) 長軸	規模(m) 短軸	規模(m) 深さ	坑底標高(m)	時期(大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
SX-101	–	皿状	–	(9.00)	(6.00)	0.20	47.18	庄内		
SX-201	–	皿状	青灰色シルト	(2.00)	(2.00)	0.50	46.50	Ⅱ-1-b	搬入土器(伊勢) 用途不明木製品	東隣をSK-210に切られる
SX-202										SX-201に変更 欠番
SX-203	–	–	–	–	–	–	–	–		SK-102下で遺物のみ確認

※は復原値、( )は残存値

4．遺構

今回の調査では、近世1面、中世2面、弥生時代2面の遺構検出面を確認した。このうち、近世1面及び中世2面の遺構検出面では、素掘小溝を検出している。弥生時代の遺構は、区画溝や井戸、竪穴住居跡に伴うと考えられる柱穴、炭灰土坑などを検出した。

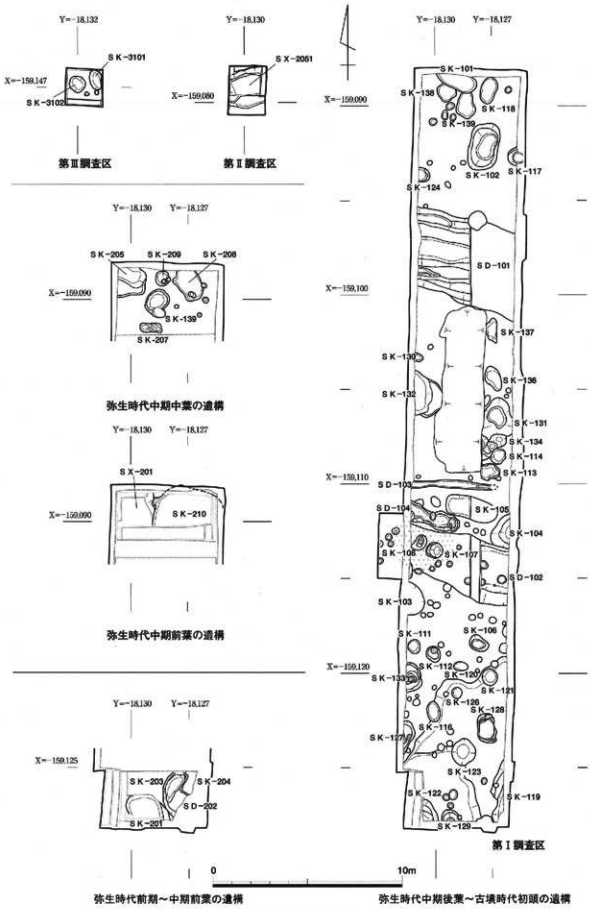
（1）弥生時代前期～中期初頭の遺構（第501図）

本調査区における弥生時代前期～中期前葉の遺構は、それ以降の弥生時代遺構とは基本的に検出面を違える。遺構検出面は、第Ⅷ層：灰色粘質土の上面である。今回、範囲（内容）確認調査という性格上から、第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面での遺構検出に止めたため、調査した弥生時代前期～中期前葉の遺構は、第Ⅰ調査区北端と南端の深掘り部分のみである。

土坑

ＳＫ－201（第502図、写真図版294）

本坑は、第Ⅰ調査区南端におけるベース確認のための深掘りで検出した。東肩と北肩を確認したが、南側と西側は調査区外へと拡がる。北肩が、先行するＳＫ－203を切る。平面及び規模は不明であるが、東肩と北肩からの推測によれば一辺2.20m以上の隅丸方形を呈すると考えられる。断面は、東肩の形状から逆台形と考えられる。深さは1.10m以上を測るが底面につい



第501図　調査区遺構配置図（S＝1/200）

ては、側壁ベースとなる第Ⅺ－b層：灰色砂からの激しい湧水により未確認である。

堆積土は大きく3層に分かれ、上層は暗灰色系の粘土と粘質土、中層は植物を含んだ黒色系粘土、下層はベースであるシルトを含んだ灰色系粘土である。上層と中層の境には、籾層が形成される。出土遺物は上層の籾層直上から、組み合わせ高杯（W4005）、杓子未成品、鋼代針状の用途不明品（W4010）などの木製品が出土した。本坑の機能については、底面まで掘りきっていないので不明であるが、土層堆積状況や遺物の出土状況から、木器貯蔵穴として掘削の後に、廃棄坑として転用されたことが推測できる。時期は、大和第Ⅱ－2様式である。

溝

ＳＤ－201

本溝は、ＳＤ－101の側面及び底面において確認したものである。このため、規模などは不明であり、土坑の可能性もある。溝とするならばその走行方向は、ＳＤ－101の東－西とはややずれた東北東－西南西である。ＳＤ－201の堆積土である植物層は、ＳＤ－101の底面で露出し、大和第Ⅰ－2－a様式の土器が出土した。

その他

ＳＸ－201（第502図、写真図版295）

本遺構は、第Ⅰ調査区北端におけるベース確認のための深掘りで検出した、浅い落ち込みである。東辺をＳＫ－210に切られる。調査区外に拡がるため平面規模等は不明である。深さは0.50mである。堆積土は2層からなり、上層は暗褐色粘土の植物層、下層は暗灰色粘土である。遺物は、上層から条痕文系甕（Ｐ5511）、底面直上から「一木又鋤」と呼ばれる用途不明木製品（W4009）が出土した。時期は、大和第Ⅱ－1－b様式である。

（2）弥生時代中期前葉の遺構（第501図）

先述したように弥生時代中期前葉の遺構は第Ⅶ層：灰色粘質土が検出面であり、それ以降のものとは検出面を違えている。そのなかにあって、ＳＫ－114は弥生時代中期前葉の遺構であるが、第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面と同じ標高で検出している。ＳＫ－114周辺が微高地の中央付近と考えられ、上面の削平により下層遺構が露出したのであろう。

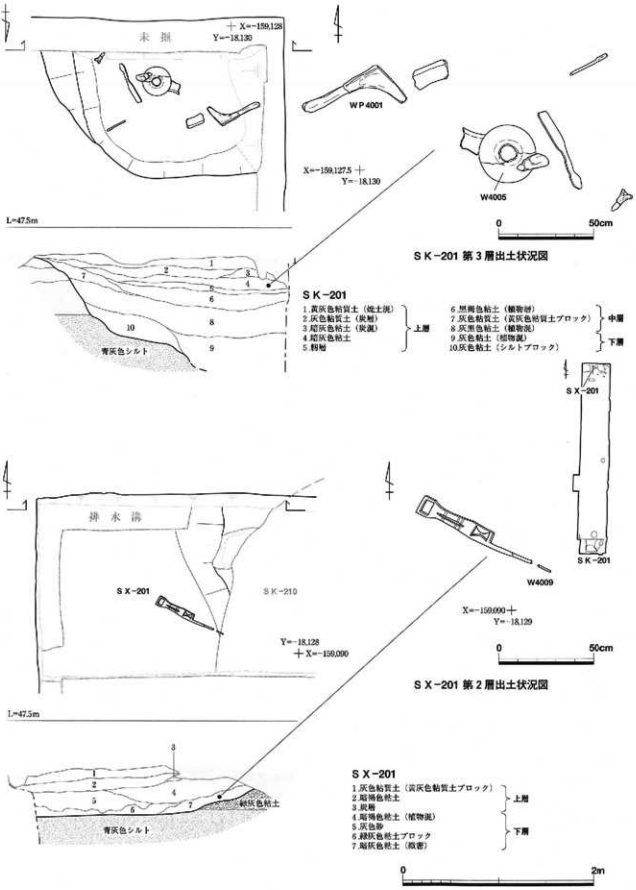
土坑

ＳＫ－114（第503図、写真図版300）

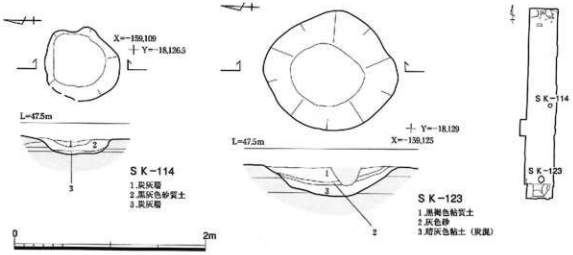
本坑は、第Ⅰ調査区中央の東側で、弥生時代中期後葉のＳＫ－113とＳＫ－134に挟まれて検出した。平面は不整円形を呈し、径0.80mである。断面は逆台形で、深さは0.18mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：灰層、第2層：黒灰色砂質土、第3層：炭灰層である。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅱ－3様式である。

ＳＫ－123（第503図）

本坑は第Ⅰ調査区南半で、古墳時代初頭のＳＸ－101の底面において検出した。平面は不整円形を呈し、長軸1.40m、短軸1.26mである。断面は逆台形で、深さは0.31mを測る。



第502図　弥生時代前期～中期初頭の遺構（平・断面図：Ｓ＝1/40、出土状況図：Ｓ＝1/20）



第503図　弥生時代中期甕棄の遺構（1）（S＝1/40）

堆積土は3層からなり、第1層：黒褐色粘質土、第2層：灰色砂、第3層：暗灰色粘土（炭混）である。遺物は、底面から抉り入りの柱状片刃石斧（S4054）が出土した。機能は不明であるが、灰穴炉の可能性もある。時期は、大和第Ⅱ－3－b様式である。

SK－208（第504図、写真図版295）

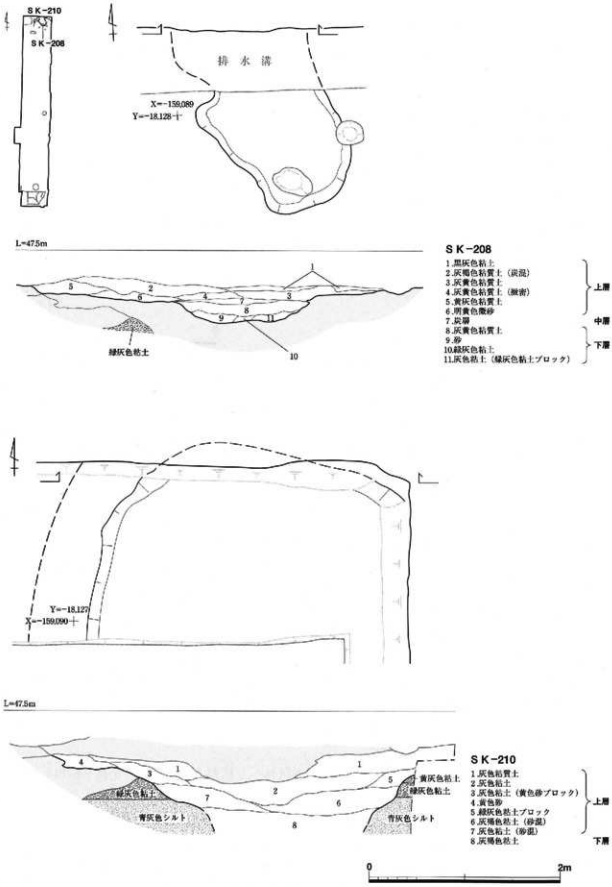
本坑は、第Ⅰ調査区北端におけるベース確認のための深掘りにより、SK－210の堆積土上面で検出した。北端部は調査区外へと拡がる。平面は不整形を呈し、長軸1.30m以上、短軸1.20mである。断面は皿状で、深さは北壁断面で0.12mを測る。

堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は粘土や微砂、炭を含んだ粘質土の互層堆積であり、中層は炭層、下層は灰黄色粘質土である。上層の堆積は、滞水状態を示すと考えられる。本坑は、下層のSK－210との間に土器型式差がなく、SK－210の埋没時に形成された落ち込みの最終堆積層という可能性もある。時期は、大和第Ⅱ－3－b様式である。

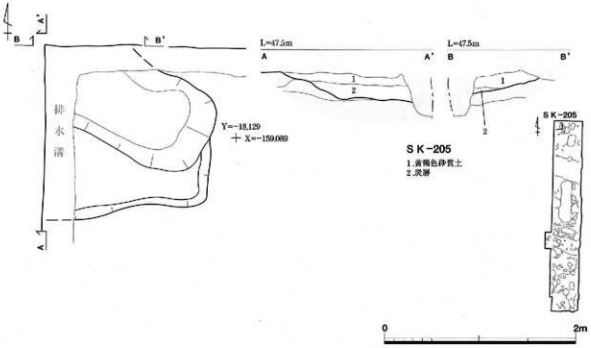
SK－210（第504図、写真図版295）

本坑は、第Ⅰ調査区北端におけるベース確認のための深掘りで検出した。西肩及び北東隅を確認したが、他は調査区外へと拡がる。西肩は、大和第Ⅱ－1－b様式のSX－201を切る。堆積土の上面には、大和第Ⅱ－3－b様式の土器を含むSK－208がある。平面及び規模は不明であるが、一辺3.00m以上の隅丸方形を呈するものと考えられる。断面は逆台形と考えられるが、底面は未掘である。深さは0.80m以上を測る。

堆積土は、底面まで掘り下げていない現状で、大きく上・下2層に分かれる。下層の灰褐色粘土は、よく締まっている。遺物は上層及び下層の上面から、容器類の残片を含む木製品が出土した。また、胴部外面を磨く甕（P5430）が3個体出土しているが、角閃石を含んだ胎土により河内からの搬入品と考えられる。本坑の機能については、底面まで掘りきっていないので不明であるが、土層堆積状況や遺物の出土状況から、木器貯蔵穴として掘削の後に、廃棄坑として転用されたものと推測できる。時期は、大和第Ⅱ－3－b様式である。



第504図　弥生時代中期前葉の遺構（２）（S＝1/40）



第505図　弥生時代中期中葉の遺構（1）（S＝1/40）

（3）弥生時代中期中葉の遺構（第501図、写真図版292・293）

本調査区における弥生時代中期中葉と後葉の遺構は、基本的に第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面で、弥生時代後期・古墳時代初頭の遺構と同一面で検出される。ただし、ＳＤ－101を境としてその北側では、弥生時代中期中葉と後葉の遺構検出面が異なる。これは、第Ⅶ層：黄褐色粘質土を削って暗褐色砂質土が堆積していることによる。第Ⅰ調査区北端部の深掘りでは、この暗褐色砂質土の下、弥生時代中期前葉の遺構堆積土上面が弥生時代中期中葉の遺構検出面であった。ＳＤ－101北側から唐古池の間には谷地形が想定され、低いためと考えられる。

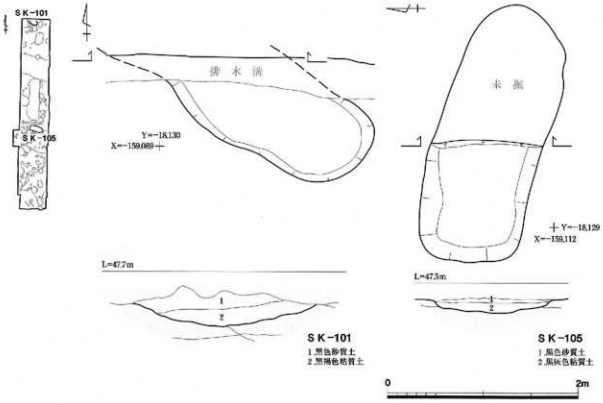
土坑

ＳＫ－205（第505図）

本坑は、第Ⅰ調査区北西隅で検出した。東肩及び南肩と北肩の一部を確認したのみで、他は調査区外へ拡がる。平面は、北東隅と南東隅を確認したことから、方形と考えられる。東側辺は1.40ｍである。断面はⅢ状で、深さ0.25ｍを測る。堆積土は２層からなり、上層の黄褐色砂質土と下層の炭層である。機能は、不明である。時期は、大和第Ⅲ－１様式である。

ＳＫ－101（第506図、写真図版296）

本坑は、第Ⅰ調査区北端で検出した。北側調査区外へと拡がる。平面は、全体を検出していないが、現状で長軸1.90ｍ以上、短軸1.00ｍの長楕円形を呈する。断面はⅢ状で、深さは0.27ｍを測る。本坑は浅く、堆積土は上層の黒色砂質土と下層の黒褐色粘質土の２層であるが、ベースの暗褐色砂質土が砂質で伏流水を多く含むため、堆積土に黄褐色の鉄分が沈着し硬化している。遺物は上層の黒色砂質土から、炭片とともに被熱し剥離した土器片がまとまって出土し



第506図　弥生時代中期中葉の遺構（２）（S＝1/40）

た。播磨地域から搬入されたと考えられる口縁部内面に凸帯をもつ広口長頸壺（P5417）も含まれている。出土した土器片や炭片の状況から、焼失住居の片づけに伴う廃棄坑の可能性も想定される。時期は、大和第Ⅲ－３様式である。

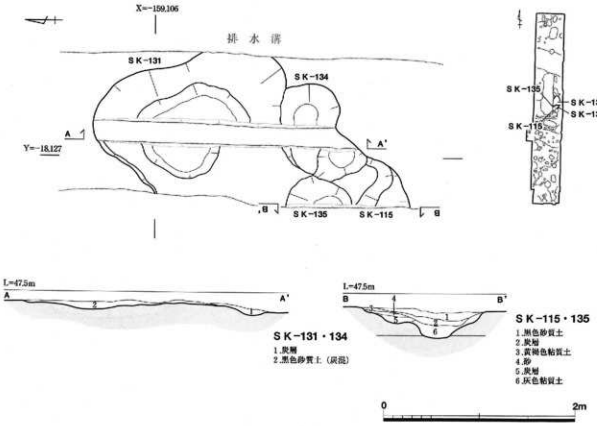
ＳＫ－104

本坑は、第Ⅰ調査区中央の東端で検出した。その東半部は調査区外であり、雨による東壁崩壊で消失した。平面は不整円形を呈し、径2.00ｍである。断面は逆台形で、深さは0.44ｍを測る。

堆積土は３層からなり、下層の暗灰色粘質土は炭灰が混じる。遺物は、調査区東壁側で直立した状況の甕下半を検出した（東壁崩壊により、原位置を示す写真・図面はない）。本坑の機能は、竪穴住居跡内の甕を据えた灰穴炉という可能性が考えられる。ただし、住居跡に伴う灰穴炉とした場合、南には同時期と考えられるＳＤ－102が隣接しており、その前後関係が問題となる。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＫ－105（第506図、写真図版299）

本坑は、第Ⅰ調査区中央、ＳＤ－103とＳＤ－104の間で検出した。平面は長楕円形を呈し、長軸2.80ｍ、短軸1.16ｍである。断面は皿状で、深さは0.18ｍを測る。堆積土は上層の黒色砂質土と下層の黒灰色粘質土の２層である。時期は、大和第Ⅲ－１様式である。



第507図　弥生時代中期中葉の遺構（3）（S＝1/40）

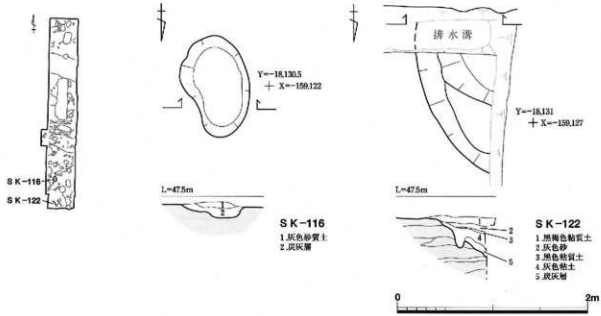
ＳＫ−115（第507図、写真図版300）

本坑は、第Ⅰ調査区中央の東側で検出した。北側をＳＫ−135に、西半を中世遺構のＳＸ−51に切られる。ＳＫ−135と同一遺構になる可能性もある。平面は不整形を呈し、一辺が0.40ｍ以上と考えられる。断面は皿状で、深さは0.17ｍを測る。遺物は、土器小片がわずかに出土したのにとどまる。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅲ−２様式のＳＫ−135に切られることから、それ以前である。

ＳＫ−131・134（第507図、写真図版297）

本坑は、第Ⅰ調査区中央の東側で、ＳＫ−115・135の北側に接して検出した。土層の違いと底面の２ヶ所のくぼみによりＳＫ−131・134に区別したが、本来は一連の遺構であった可能性が高い。ＳＫ−131の平面は不整形を呈し、長軸2.00ｍ以上、短軸が1.60ｍ以上である。ＳＫ−134の平面は不整円形を呈し、径0.60ｍ以上である。ともに断面は皿状で、深さは0.10ｍ前後を測る。堆積土は、ＳＫ−131が黒色砂質土（炭混）でＳＫ−134が炭層と、いずれも単層である。遺物は、土器片がわずかに出土した。これらは土坑というより、ＳＫ−115・135を灰穴炉とする竪穴住居跡の床面の可能性がある。時期は、弥生時代中期中葉である。

この他、周辺には黒色砂質土の浅い落ち込みＳＫ−136・137がある。その掘形は明確でなく、ＳＫ−131・134とともに住居跡床面の濁りであった可能性が高い。



第508図　弥生時代中期中葉の遺構（４）（Ｓ＝1/40）

ＳＫ－135（第507図、写真図版300）

本坑は、第Ⅰ調査区中央の東側で検出した。ＳＫ－115の北側を切って、西半を中世遺構のＳＸ－51に切られる。平面は不整円形を呈し、長軸1.08ｍ、短軸が0.30ｍ以上と考えられる。断面は逆台形で、深さは0.28ｍを測る。堆積土は３層からなり、上層の黒色砂質土と下層の灰色粘質土の間に炭層を挟む。遺物は、土器片がわずかに出土したのにとどまる。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＫ－116（第508図、写真図版297）

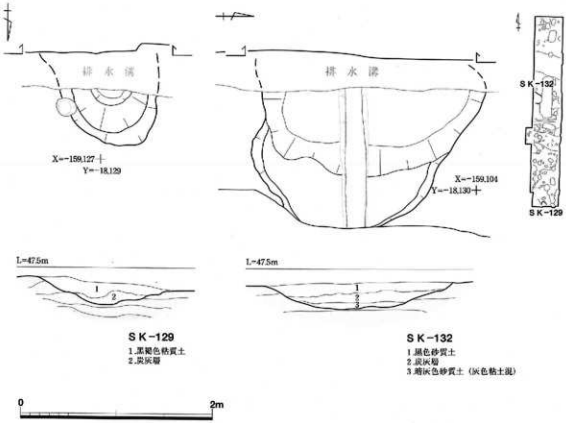
本坑は、第Ⅰ調査区南半で検出した。南半の上面を、古墳時代の落ち込みＳＸ－101に切られる。平面は楕円形を呈し、長軸1.08ｍ、短軸0.72ｍである。断面は皿状で、深さは0.13ｍを測る。堆積土は２層で、上層は灰色砂質土、下層は炭灰層である。遺物は、甕片が出土した。機能は、竪穴住居跡の炭灰炉と考えられる。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＫ－119

本坑は、第Ⅰ調査区南東隅で検出した。調査区の東排水溝と重複し、さらには東壁の崩壊により、その東肩については不明である。南端と北端は調査区外へと延び、西肩のみの確認であるが、幅1.00ｍ前後の狭い溝状の土坑であったと考えられる。断面はＶ字状で、深さは0.60ｍ以上を測る。機能は、不明である。時期は、大和第Ⅲ－１様式である。

ＳＫ－122（第508図）

本坑は、第Ⅰ調査区南西隅で検出した。平面は、全体の1/4ほどの検出であり不明、現状規模は長軸1.24ｍ以上、短軸0.84ｍ以上である。断面は、東側のみの検出であるが逆台形と考えられ、深さは0.40ｍ以上を測る。堆積土は５層からなり、下層が炭灰層である。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。



第509図　弥生時代中期中葉の遺構（5）（S＝1/40）

ＳＫ−125

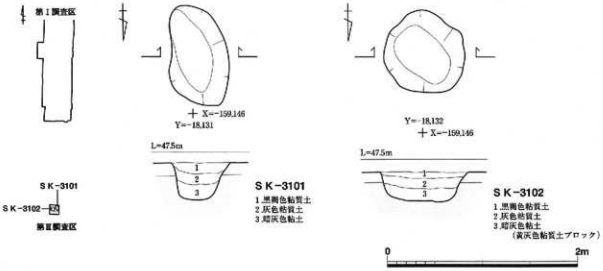
本坑は、第Ⅰ調査区南端で、北半のみを検出した。南壁崩壊により、下層は未調査である。大和第Ⅲ－１様式のＳＫ－119の西肩を切る。平面は、全体の1/2ほどの検出であるが不整円形と考えられ、現状規模は径0.80ｍ以上である。断面は円筒状で、深さは0.62ｍまで確認している。遺物は、斧柄未成品の切り落とされた先端部が出土した。機能は、井戸と考えられる。時期は、大和第Ⅲ－１様式を中心とした弥生時代中期中葉か。

ＳＫ−129（第509図）

本坑は、第Ⅰ調査区南端の中央で検出した。平面は、南半分が調査区外にあり1/2ほどの検出であるが不整円形と考えられる。現状規模は径1.00ｍである。断面は皿状で、深さは0.17ｍを測る。堆積土は２層からなり、上層は黒褐色粘質土、下層は炭灰層である。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、わずかな土器片から、弥生時代中期中葉と考えられる。

ＳＫ−132（第509図、写真図版297）

本坑は、第Ⅰ調査区中央の西側で検出した。西半部分は調査区外にある。平面は不整形を呈し、長軸2.30ｍ以上、短軸1.40ｍ以上である。断面は皿状で、深さは0.26ｍを測る。堆積土は３層からなり、第１層：黒色砂質土、第２層：炭灰層、第３層：暗灰色砂質土（灰色粘土混）である。第２層：炭灰層及びその上面から、大和型甕片や折衷甕片が出土した。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。



第510図　弥生時代中期中葉の遺構（６）（S＝1/40）

ＳＫ－3101（第510図、写真図版306）

本坑は、第Ⅲ調査区で検出した。平面は不整楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸が0.60mである。断面は逆台形で、深さは0.40mを測る。堆積土は３層からなる。遺物は、土器片がわずかに出土した。時期は、弥生時代中期中葉である。

ＳＫ－3102（第510図、写真図版306）

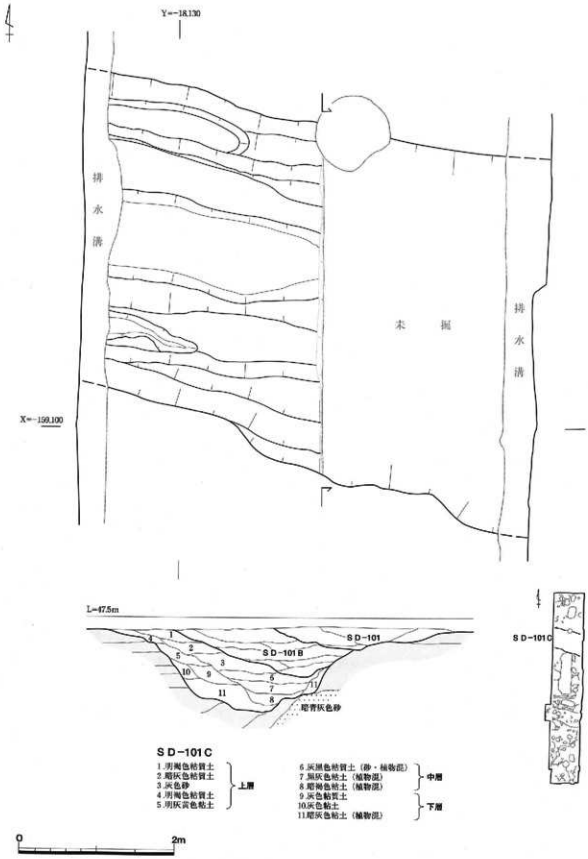
本坑は、第Ⅲ調査区で検出した。平面は不整円形を呈し、径0.80mである。断面は逆台形で、深さは0.30mを測る。堆積土は３層からなる。遺物は、土器片がわずかに出土した。時期は、弥生時代中期中葉である。

溝

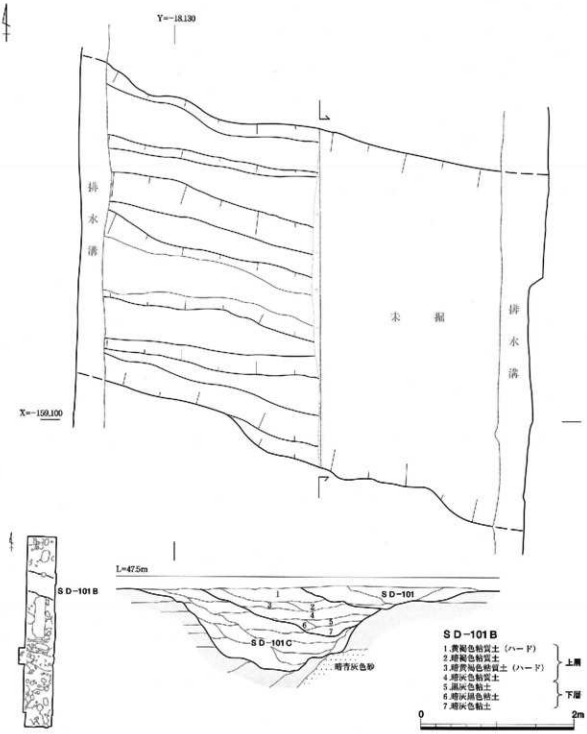
ＳＤ－101Ｃ（第511図、写真図版298）

本溝は、第Ⅰ調査区北半で検出した。２度の再掘削（ＳＤ－101Ｂ・ＳＤ－101）が認められる。また、弥生時代前期のＳＤ－201を切っている。本溝は東－西に走行し、幅4.60mである。断面形は二段の逆台形であるが、その両肩のテラス部分には小溝が走っており、再掘削によって現状断面形となった可能性もある。深さは、1.10mを測る。

堆積土は、上部の大半を再掘削溝ＳＤ－101Ｂに浚えられるが、北肩では上部まで残存していた。東西壁断面では、北側が南側の堆積に切り込まれている状況が観察できる。このことから、大きく２度の再掘削（ＳＤ－101Ｂ・ＳＤ－101）を考えているが、それ以外にも溝浚えのあったことが想定できる。こうした切り合いから、堆積土は大きく上・中・下の３層に分けることができる。上層は上位が明褐色粘質土、下位が暗灰色粘質土であり、中層との境には灰色砂を挟んでいる。中層は、黒色系粘土であり、植物を含んでいる。この中層に切られ、北側のみに堆積するのが下層の灰色系粘土である。時期は、大和第Ⅲ－１様式である。



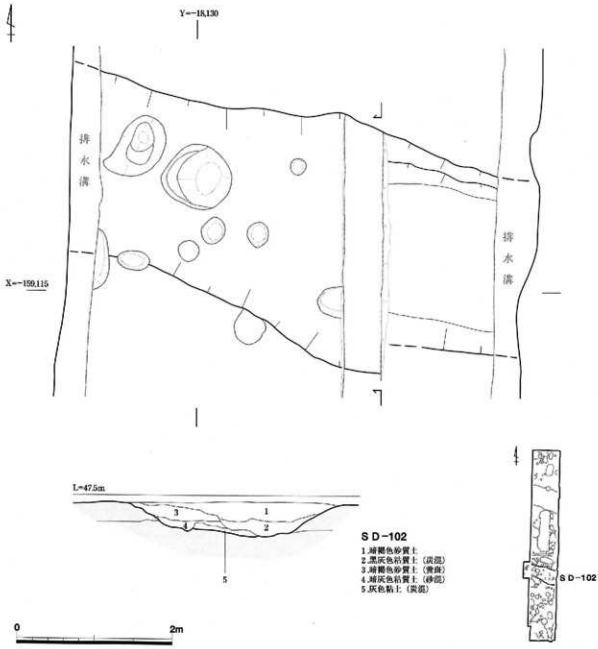
第511図　弥生時代中期中葉の溝（7）（S＝1/50）



第512図　弥生時代中期中葉の遺構（８）（S＝1/50）

ＳＤ－101Ｂ（第512図、写真図版298）

本溝は、第Ｉ調査区北半で検出したＳＤ－101Ｃの再掘削溝である。本溝は、ＳＤ－101Ｃと同じ東－西に走行し、先行溝の南肩を削って掘り込まれる。また、その南肩及び上層堆積土は、再々掘削溝のＳＤ－101に切られている。その幅は、ＳＤ－101も含めると3.30～3.70ｍである。断面は中央部がくぼんだ二段の逆台形で、深さは0.66～0.74ｍを測る。

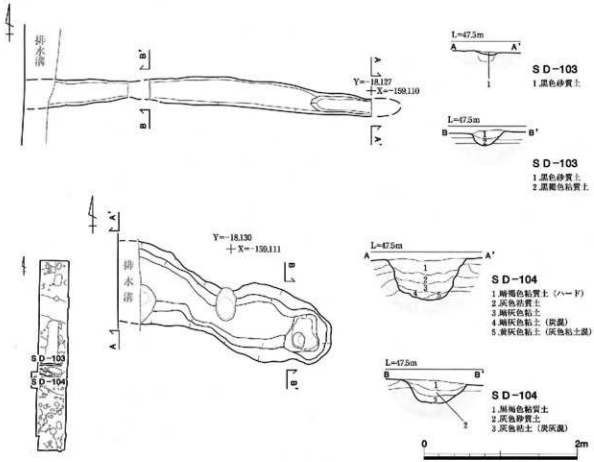


第513図　弥生時代中期中葉の遺構（9）（S＝1/50）

堆積土は、上部の大半を再掘削溝ＳＤ－101に浚えられるが北肩には残存し、上・下２層に大きく分かれる。上層は、上位の鉄分沈着による黄褐色系粘質土（ハード）と、下位の暗灰色粘質土にさらに分かれる。下層は暗灰色系粘土である。時期は、大和第Ⅲ－４様式である。

ＳＤ－102（第513図、写真図版299）

本溝は、第Ⅰ調査区中央で検出した。埋没後には、堆積土の上面から弥生時代中期後葉の炭灰土坑や柱穴（ＳＢ－101）が掘り込まれている。本溝は東－西に走行し、幅3.00mである。断面は逆台形で、深さ約0.5mを測る。



第514図　弥生時代中期中葉の遺構（10）（S＝1/50）

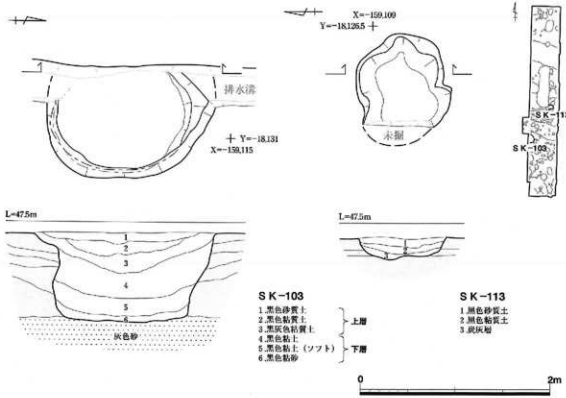
堆積土は、南側と北側で大きく２層に分かれる。北側堆積土は、再掘削の可能性もある。北側堆積土の下層では炭灰層が形成され、竪穴住居等の排水溝であった可能性が高い。底面からは、細頸壺や広口長頸壺などがまとまって出土した。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＤ－103（第514図、写真図版299）

本溝は、第Ⅰ調査区中央、ＳＤ－102・104の北側で並行して検出した。本溝は、東－西に走行するが、東側で収束し、幅0.30ｍである。断面は半円形で、深さは最も深い位置で0.20ｍを測る。堆積土は、上層の黒色砂質土と下層の黒褐色粘質土の２層である。遺物は、上層から半完形の無頸壺、水差形土器が出土した。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＤ－104（第514図、写真図版299）

本溝は、第Ⅰ調査区中央、ＳＤ－102と北接し並行する。堆積土の上面からは、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡であるＳＢ－101の柱穴が切り込む。本溝は、東－西に走行するが東側で収束し、幅1.00ｍである。断面は逆台形で、深さは約0.5ｍを測る。堆積土は３層に分かれ、最下層の灰色粘土は炭灰が混ざる。遺物は、上層から広口壺の胴部片が出土した。時期は、大和第Ⅲ－２様式である。



第515図　弥生時代中期後葉の遺構（1）（S＝1/40）

（4）弥生時代中期後葉の遺構（第501図、写真図版292・293）

弥生時代中期後葉の遺構は、基本的には第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面が検出面となる。これに対し、ＳＤ－101から北側では、第Ⅶ層：黄褐色粘質土を削った暗褐色砂質土の上面が遺構検出面となる。この暗褐色砂質土の上面では、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡に関連すると考えられる炭灰土坑や柱穴が検出でき、生活面として安定している。唐古池と第Ⅰ調査区の間に想定される谷地形が、この段階で次第に埋没していったものと考えられる。

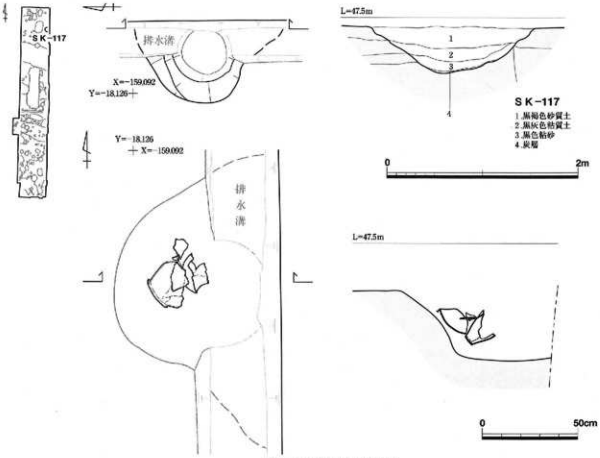
土坑

ＳＫ－103（第515図、写真図版300）

本坑は、第Ⅰ調査区中央やや南寄り、その西端で検出した。西肩は、西側調査区外となる。平面は楕円形を呈し、長軸1.75ｍ、短軸1.10ｍ以上である。断面は円筒状で、深さは0.96ｍを測る。底面は標高46.46ｍにあって灰色砂に達し、湧水がある。堆積土は６層からなるが、大きくは上層の黒色系粘質土と下層の黒色系粘土の２層に分かれる。機能は、井戸と考えられる。時期は、大和第Ⅳ－１様式である。

ＳＫ－107

本坑は、第Ⅰ調査区中央の西寄りで検出した。位置的にはＳＢ－101の内部にあたり、灰穴炉ＳＫ－108に近接する。ＳＤ－102の堆積土上面から掘り込まれる。平面は円形を呈し、径0.92ｍである。断面は半円形で、深さは0.22ｍを測る。堆積土は、黒色砂質土の単層である。



ＳＫ−117 第２層出土状況図

第516図　弥生時代中期後葉の遺構（２）（平･断面図：Ｓ＝1/40、出土状況図：Ｓ＝1/20）

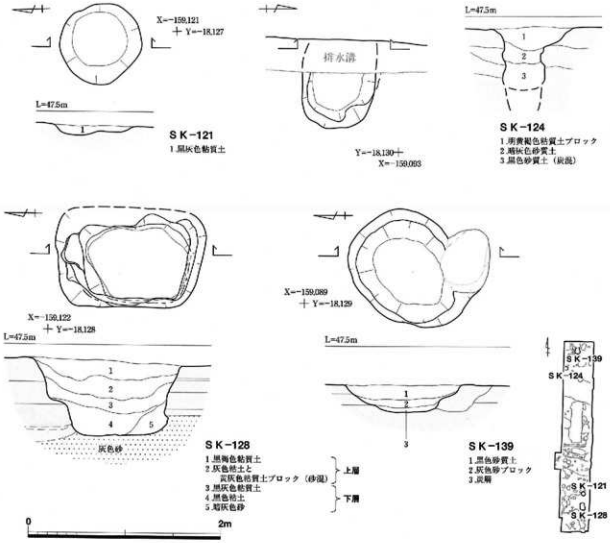
遺物は、底面直上から柱根と考えられる木材片が、横位の状態で出土した。時期は、弥生時代中期後葉か。柱穴が抜き取りによって、土坑状となった可能性も考えられる。

ＳＫ−113（第515図、写真図版300）

本坑は、第Ⅰ調査区中央の東側で検出した。西肩を中世遺構のＳＸ−51に切られる。平面は不整円形を呈し、径約1.0ｍである。断面は逆台形で、深さは0.28ｍを測る。堆積土は３層からなり、第１層：黒色砂質土、第２層：黒色粘質土、第３層：炭灰層である。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅳ−１様式である。

ＳＫ−117（第516図、写真図版301）

本坑は、第Ⅰ調査区北半の東端で検出した。東半部分は調査区外へと拡がる。平面は不整円形を呈し、長軸0.77ｍ以上、短軸1.70ｍ以上である。断面は逆台形で、深さは0.54ｍを測る。堆積土は３層からなり、第１層：黒褐色砂質土、第２層：黒灰色粘質土、第３層：黒色粘砂である。また、底面には薄い炭層を挟んでいた。本坑の西肩寄りで立った甕が押し潰された状況で出土しており、据え付けられていたと考えられる。その上面からは土器片がまとまって出土した。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅳ−２様式である。



第517図　弥生時代中期後葉の遺構（3）（S＝1/40）

ＳＫ－121（第517図、写真図版300）

本坑は、第Ⅰ調査区南半の東側で検出した。平面は不整円形を呈し、径0.86mである。断面は皿状で、深さは0.16mを測る。堆積土は、黒灰色粘質土の単層である。遺物は、わずかに土器小片が出土した。機能は、不明である。時期は、大和第Ⅳ様式である。

ＳＫ－124（第517図、写真図版302）

本坑は、第Ⅰ調査区北半の西端で検出した。西半部分は調査区外に拡がる。平面は長軸0.80m以上、短軸0.74m以上の楕円形と考えられる。断面は円筒状であるが、底面を確認していない。深さは0.80m以上を測る。堆積土は現状で3層に分かれ、下層は炭を含んだ黒色砂質土である。機能は、井戸と考えられる。時期は、大和第Ⅳ様式である。

ＳＫ－128（第517図、写真図版302）

本坑は、第Ⅰ調査区南半で検出した。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.50m、短軸1.00mであ

る。断面は方形で、深さは0.78mを測る。堆積土は、大きく上・下２層に分かれる。上層には、灰色粘土と黄灰色粘質土のブロック土層があり、人為的に埋められた可能性がある。機能は、底面の灰色砂が湧水することから井戸と考えられる。時期は、大和第Ⅳ－１様式である。

ＳＫ－139（第517図、写真図版302）

本坑は、第Ⅰ調査区の北端で検出した。当初、その濁りを下層まで追いきれず、第１層で完掘とした。この後、遺構検出面を掘り下げ、新たに検出した別遺構のＳＫ－206として調査をおこなっている。両者の位置関係、出土土器の接合関係から、ＳＫ－139とＳＫ－206は同一遺構と認識した。南肩が、Pit－135を切る。平面は楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸1.10mである。断面は逆台形で、検出面からの深さは0.52mを測る。堆積土は４層からなり、最下層は炭層である。機能は、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられる。時期は、大和第Ⅳ－１様式である。

建物

ＳＢ－101（第518・519図、写真図版303）

本構は、調査区中央やや南寄りで検出した、炭灰土坑（ＳＫ－108）とそれを囲んだ柱穴列（Pit－105・107・108・109・114）であり、竪穴住居跡と考えられる。ＳＫ－108を中心とする柱穴列の直径は約3.0mである。これらは、大和第Ⅲ－２様式に機能し第Ⅲ－４様式には埋没するＳＤ－102・104の堆積土上面を掘り込んでおり、大和第Ⅳ様式と考えられる。

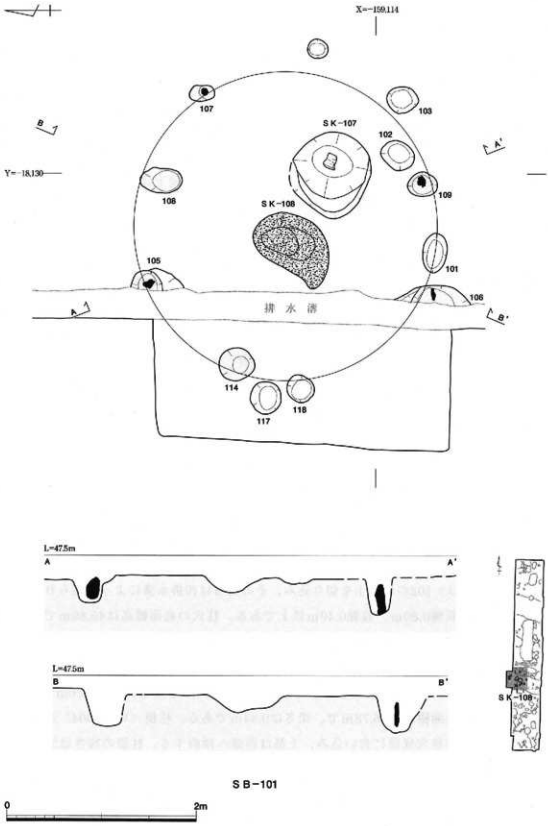
ＳＫ－108は不整形を呈し、長軸0.86m、短軸0.58mである。断面は半円形で、深さは0.20mを測る。堆積土は、炭灰を含んだ黒色砂質土の単層である。本竪穴住居跡の灰穴炉になると考えられる。

柱穴列のうち、Pit－105・106・107・109の４基には柱根が残存していた。Pit－105は、ＳＤ－104の堆積土を切り込み、その西肩は西排水溝によって切られる。平面は円形を呈し、径約0.3mである。柱穴の底面標高は46.99mで、深さは0.25mを測る。柱根（ＷＰ4003）は基部が柱穴底面から浮いた状態にあり、上部は南側へ傾斜する。柱根の高さは25cm、直径は10cmである。

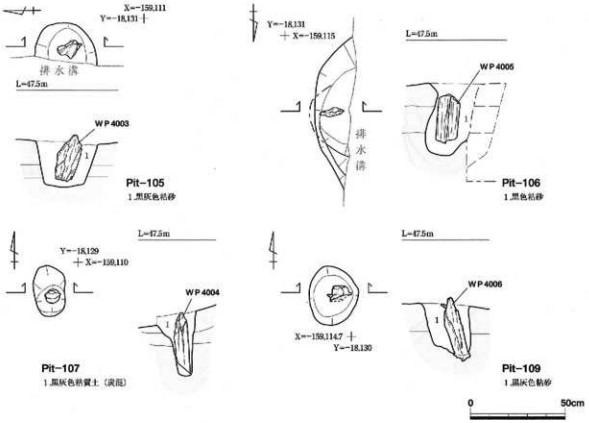
Pit－106は、ＳＤ－102の堆積土を切り込み、その西肩は西排水溝によって切られる。平面は不整形を呈し、長軸0.80m、短軸0.40m以上である。柱穴の底面標高は46.89mで、深さは0.38mを測る。柱根（ＷＰ4005）は基部が柱穴底面から浮いた状態にあり、上部は西側へ傾斜する。柱根の高さは25cm、直径は11cmである。

Pit－107は、ＳＤ－104の堆積土を切り込む。平面は楕円形を呈し、長軸0.26m、短軸0.15mである。柱穴の底面標高は46.78mで、深さは0.34mである。柱根（ＷＰ4004）は斜めに切り落とされた基部が柱穴底面に食い込み、上部は西側へ傾斜する。柱根の高さは32cm、直径は８cmである。

Pit－109は、ＳＤ－102の堆積土を切り込む。平面は不整円形を呈し、長軸0.31m、短軸0.26mである。柱穴の底面標高は46.86mで、深さは0.31mを測る。柱根（ＷＰ4006）は基部が柱穴底面に食い込み、上部は西側へ傾斜する。柱根の高さは34cm、直径は８cmである。



第518図　弥生時代中期後葉の遺構（4）（S＝1/40）



第519図　弥生時代中期後葉の遺構（５）（Ｓ＝1/20）

第85表　ＳＢ－101柱穴一覧表

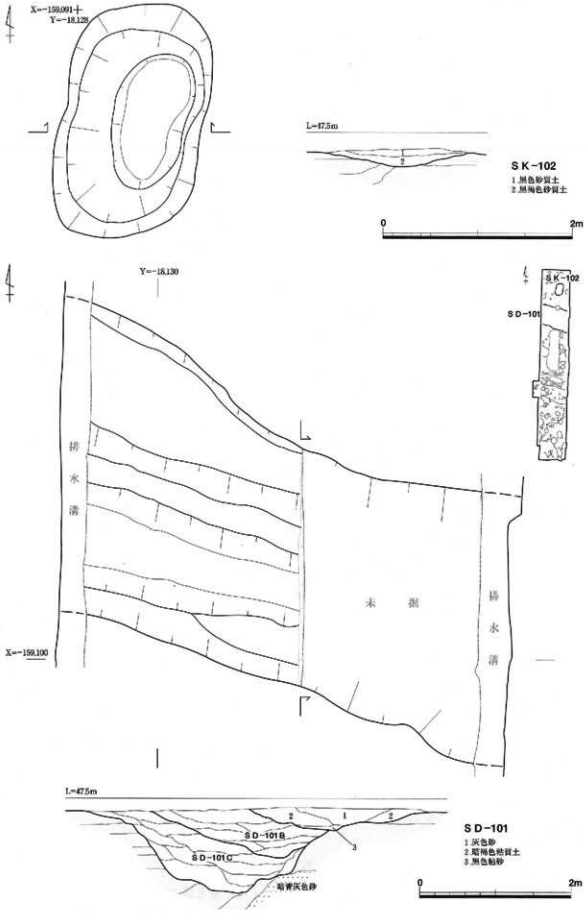
柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模（m）			坑底標高（m）	時期（大和様式）	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-101	楕円形	円筒状	黒色砂質土	0.42	0.25	0.36	46.94	Ⅳ		
Pit-102	楕円形	逆台形	炭灰層	0.36	0.28	0.19	47.05	―		
Pit-103	楕円形	逆台形	黒色砂質土	0.34	0.28	0.17	47.08	―		
Pit-105	円形?	円筒状	黒灰色粘砂	(0.23)	0.32	0.25	46.99	―	柱根	
Pit-106	不整形	円筒状	黒色粘砂	0.80	(0.40)	0.38	46.89	―	柱根	
Pit-107	楕円形	円筒状	黒灰色砂質土（攪乱）	0.26	0.15	0.34	46.78	中期	柱根	
Pit-108	楕円形	円筒状	黒灰色粘砂	0.44	0.26	0.40	46.96	中期		
Pit-109	不整円形	円筒状	黒灰色粘砂	0.31	0.26	0.31	46.86	―	柱根	
Pit-114	不整円形	円筒状	黒色砂質土	0.50	0.40	0.36	46.99	Ⅲ-4		
Pit-117	円形	逆台形	黒色砂質土	0.34	―	0.22	47.08	―		
Pit-118	円形	逆台形	黒色砂質土	0.30	―	0.26	47.03	―		

（ ）は残存値

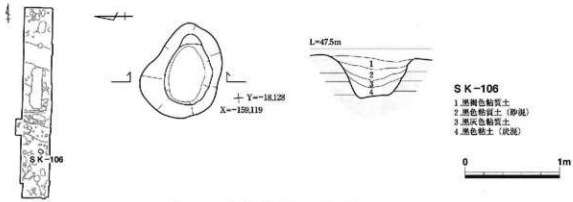
Pit－108・114には柱根が残存しない。Pit－108は、ＳＤ－104の堆積土を切り込む。平面は楕円形を呈し、長軸0.44m、短軸0.26mである。柱穴の底面標高は46.96mで、深さは0.40mを測る。Pit－114は、ＳＤ－102の堆積土を切り込む。平面は不整円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.40mである。柱穴の底面標高は46.99mで、深さは0.36mを測る。

（５）弥生時代後期の遺構（第501図、写真図版292・293）

本調査区における弥生時代後期の遺構は少ない。土坑１基と溝１条のみである。また、時期



第520図　弥生時代後期の遺構（ＳＫ－102：Ｓ＝1/40、ＳＤ－101：Ｓ＝1/50）



第521図　古墳時代初頭の遺構（S＝1/40）

も弥生時代後期初頭～後期前葉に限られる。この状況は遺物についても同じであり、第Ⅵ層：黒褐色砂質土は遺物包含層であるが弥生時代後期後葉の土器片はほとんど確認することができなかった。弥生時代後期後葉の居住は希薄なものであったと考えられる。

土坑

ＳＫ−102（第520図）

本坑は、第Ⅰ調査区の北端で検出した。平面は長楕円形を呈し、長軸2.60m、短軸1.50mである。断面は皿状で、深さは0.19mを測る。本坑は浅く、堆積土は上層の黒色砂質土と下層の黒褐色砂質土の２層からなるが、黄褐色の鉄分が沈着し硬化している。遺物は上層の黒色砂質土から、完形の短頸壺１点とともに比較的大きな土器片がまとまって出土した。時期は、大和第Ⅵ－１様式である。

溝

ＳＤ−101（第520図、写真図版304）

本溝は、第Ⅰ調査区北半で検出したＳＤ－101Ｃの再々掘削溝である。本溝は、先行溝であるＳＤ－101Ｂと同じ東－西に走行するが、その南肩を削って掘り込まれる。その幅は2.20～2.30mである。断面は逆台形で、深さは0.30～0.44mを測る。堆積土は上・中・下の３層からなるが、両肩は鉄分の沈着によって暗褐色粘質土が硬化している。中層の灰色砂は、洪水層の可能性がある。上層の黒褐色粘質土（第520図の土層断面は上層を欠く）には、半完形を含む土器片が散在していた。時期は、大和第Ⅴ－１様式である。

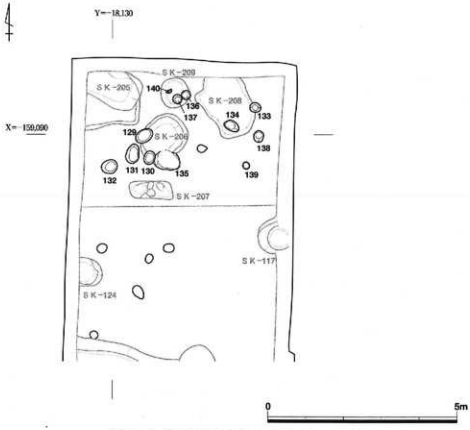
（６）古墳時代初頭の遺構（第501図、写真図版292・293）

第Ⅵ層：黒褐色砂質土は、弥生・古墳時代の遺物包含層であり、庄内式・布留式土器を散見する。また、第Ⅰ調査区南半においては、庄内期の土坑１基と落ち込みを検出している。

土坑

ＳＫ−106（第521図、写真図版305）

本坑は、第Ⅰ調査区中央やや南寄りで検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.00m、短軸0.80mである。断面は逆台形で、深さは0.42mを測る。堆積土は４層からなり、第１層：黒褐



第522図　第Ⅶ層上面の柱穴（1）（S＝1/100）

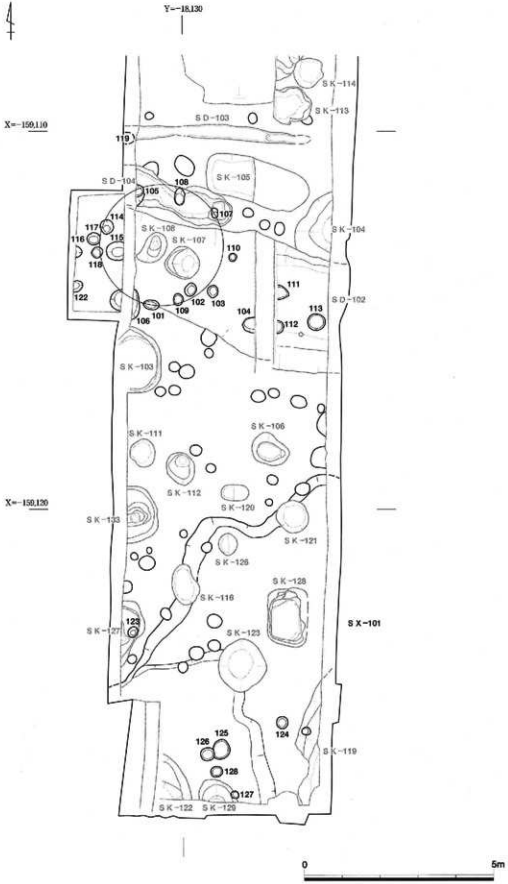
色粘質土、第2層：黒色粘質土（砂混）、第3層：黒灰色粘質土、第4層：黒色粘土（炭混）である。出土遺物は、庄内式の壷・甕とともに、東海地方のS字口縁甕が出土した。

ＳＸ－101（第523図、写真図版305）

第Ⅰ調査区南半で検出した落ち込みである。調査区南端から北側約8.0mで浅く落ち込み始め、調査区南西隅が最も深い。落ち込み全体は調査区南半の周囲に拡がるものと考えられ、平面規模は不明である。深さは、最も深い南隅において0.20mを測る。堆積土は、上層の黒色砂質土と下層の茶灰色粘土（粘性強い）の2層からなる。上層の黒色砂質土には、細かい土器片が多量に含まれていた。下層の茶灰色粘土からは、庄内式土器が出土している。時期は、古墳時代初頭である。

（7）第Ⅶ層上面の柱穴

第Ⅶ層：黄褐色粘質土の上面において、柱穴を多数検出している。多くの柱穴については、保存のため平面検出に止めている。ベース確認のために遺構面を掘り下げる調査区南北両端と、住居跡に関連すると考えられる必要最低限のものについて掘り下げ、遺物が出土したもののみ番号を付けた。第Ⅶ層上面の柱穴については、その上面を弥生・古墳時代遺物包含層である第Ⅵ層：黒褐色砂質土が覆うことから、弥生時代中期中葉～古墳時代初頭と考えられる。



第523図　第Ⅶ層上面の柱穴（２）（S＝1/100）

第86表　第Ⅶ層上面柱穴一覧表

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模（m）			底	時期	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ	標高（m）	（大和様式）		
Pit-104	楕円形?	円筒状	黒色砂質土	(0.31)	0.40	0.24	47.05	Ⅳ		
Pit-110	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.22	—	0.17	47.00	—		
Pit-111	楕円形	皿状	黒色砂質土	(0.34)	0.40	0.08	47.13	中期		
Pit-112	円形?	皿状	黒色砂質土	(0.20)	0.34	0.07	47.15	中期		
Pit-113	円形	皿状	黒色砂質土	0.44	—	0.04	47.15	中期		
Pit-115	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	(0.46)	0.50	0.09	47.24	—		
Pit-116	円形?	逆台形	黒色砂質土	(0.24)	0.48	0.28	47.05	—		
Pit-119	—	円筒状（上部開く）	黒色砂質土	0.64	—	(0.48)	—	—	柱根	
Pit-120	—	—	—	—	—	—	47.05	—	柱根	柱根のみ確認
Pit-121	—	—	—	—	—	—	—	—		図面なし
Pit-122	楕円形	皿状	黒色砂質土	(0.26)	0.28	0.12	47.08	中期		
Pit-123	楕円形	皿状	黒色粘質土	0.30	0.24	0.13	47.00	—		
Pit-124	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.32	—	0.08	47.21	—		
Pit-125	楕円形	皿状	灰色粘質土	0.54	0.46	0.06	47.15	—		
Pit-126	円形	皿状	黒色粘質土	0.34	—	0.10	47.11	—		
Pit-127	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.22	0.19	0.17	47.07	—		
Pit-128	楕円形	皿状	黒色粘質土	0.32	0.28	0.09	47.14	—		
Pit-129	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.50	0.34	0.18	47.21	中期		
Pit-130	楕円形	皿状	黒褐色砂質土	0.36	0.30	0.13	47.19	中期		
Pit-131	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.53	0.36	0.19	47.22	中期		
Pit-132	楕円形	皿状	黒褐色砂質土	0.42	0.37	0.15	47.24	Ⅳ		
Pit-133	楕円形	皿状	黒褐色砂質土	0.35	0.32	0.52	46.79	—		
Pit-134	楕円形	逆台形	黒色粘砂	0.44	0.27	0.19	46.81	—	柱根	
Pit-135	楕円形	円筒状	黒色粘砂	0.70	(0.60)	0.28	46.79	—		
Pit-136	円形	逆台形	黒色粘砂	0.24	—	0.16	46.77	—		
Pit-137	円形	皿状	黒色粘砂	0.24	—	0.14	46.81	—		
Pit-138	楕円形	逆台形	黒色粘砂	0.30	0.26	0.19	46.85	—		
Pit-139	円形	皿状	黒色粘砂	0.20	—	0.12	46.89	—		
Pit-140	—	—	黒色粘砂	—	—	—	—	—	柱根	柱根のみ確認

（）は残存値

Pit－101～140（第522・523図、写真図版303、第86表）

ＳＢ－101の柱穴以外にも、Pit－119・120・134・140が柱根をのこしていた。このうち、Pit－134・140は、第Ⅰ調査区北端にあって炭灰土坑ＳＫ－139を中心に分布するようにも見える。Pit－140についてはPit－136・137が切り合い、上面が土坑状を呈していたためＳＫ－209の土坑番号を使用している。これと同様に、ＳＫ－139の南側で検出したＳＫ－207についても、土坑番号を使用しているものの、複数の柱穴による切り合いと考えられる。ＳＫ－139を中心とした、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡が想定される。

（8）中世

今回の調査区では、厚さ約0.3mに及ぶ中世遺物包含層（第Ⅳ層：暗褐色砂質土、第Ⅴ層：灰褐色粘質土）を検出している。これらは、中世の耕作に伴うものと考えられ、第Ⅴ層：灰褐色粘質土の上面と直下（第Ⅵ層：黒褐色砂質土）において南－北方向の素掘小溝を検出した。

また、この中世遺物包含層を除去後に、第Ⅰ調査区の中央においてＳＸ－51、第Ⅱ調査区のほぼ全面においてＳＸ－2051を検出した。いずれも、大型の土坑で灰褐色粘土と黒褐色粘質土のブロック土で埋没する。農業関連の井戸であろうか。

５．まとめ

今回の調査によって、これまで不明であった唐古・鍵遺跡中央部の一端を明らかにすることができた。

地形

唐古・鍵遺跡の微高地の特徴である第XI層：青灰色シルトとその上部に堆積する第IX層：黄灰色粘土を確認したことによって、遺跡中央部全てがくぼ地である可能性はなくなった。一方、本調査区内には第XI層：青灰色シルトが欠如し、第XI－ｂ層：灰色砂となる部分がある。灰色砂の上部には、「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」が堆積する。

このような土層堆積は、唐古池の東堤でおこなった第26次調査区でも確認されている。第26次調査概報では、青灰色シルト（本稿における第XI層：青灰色シルト）が欠如するところは黄褐色粘土（本稿における第IX層：黄灰色粘土）が形成されないとする。また、青灰色シルトの欠如する場所には暗灰青色粗砂（本稿における第XI－ｂ層：灰色砂か？）があり、その上面には弥生時代前期に形成された灰黒色粘土（本稿における「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」か？）が堆積するとしている。第26次調査概報では、この堆積状況を「微凹地」と捉える。

しかし、今回検出した「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」は、西排水溝の深掘りによる壁断面の観察によるものであり、遺構埋土の可能性も否定できない。広範囲にわたってその拡がりが認められることから、木器貯蔵穴などの大型土坑の切り合いも想定されよう。北側に隣接する唐古池では、第１次調査の際に木器貯蔵穴と考えられる大型土坑が多数検出されており、その分布が本調査区にまで延びている可能性もある。第１次調査の大型土坑群は、中央砂層や南方砂層といった弥生時代前期（？）まで続く旧河道上の低地部に掘削されている。

つまり、「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」が、弥生時代前期の遺物包含層であれ大型土坑の堆積土であれ、低地部の状況を示す堆積であることに変わりはない。よって第98次調査区では、第Ｉ調査区中央付近のIX層：黄灰色粘土に象徴される微高地と、第Ｉ調査区北側から唐古池と第Ｉ調査区南半の「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」に象徴される低地部が入り組んだ状況を読み取れる。

特に、第Ｉ調査区北側から唐古池の間には、弥生時代前期から弥生時代中期後葉まで続く谷地形が想定される。第Ｉ調査区のＳＤ－101から北側は、弥生時代中期の中葉と後葉では遺構検出面が異なるが、この中期後葉の遺構検出面を形成する暗褐色砂質土は、その谷地形の上層堆積土と考えられる。第II調査区では、中世遺構のＳＸ－2051がほぼ全面に及ぶため決して土層観察に良好な状況ではなかったが、北壁で灰色砂層を確認した。この灰色砂層は、第37次調査区の第２トレンチ南端及び第53次調査区の北端で検出した弥生時代中期の砂層堆積と同一のものであり、谷地形に流れ込んだ弥生時代中期後葉の洪水堆積層と考えられる。

一方、第Ｉ調査区の南半も、第XI－ｂ層：灰色砂と「暗灰色粘土（炭灰混・青味）」の土層から、谷地形が想定される。古墳時代初頭の落ち込みであるＳＸ－101が拡がり弥生時代中期

中葉～古墳時代初頭遺構検出面となる第Ⅶ層：黄褐色粘質土を確認できなかったことからも、低い土地であったことがうかがえる。しかし、南へ18m離れた第Ⅲ調査区では、第Ⅶ層：黄褐色粘質土とともに、上坑などの遺構を検出した。ベースにおいても、第Ⅸ層：黄灰色粘土こそ確認しなかったが、第Ⅹ層：緑色粘土、第Ⅺ層：青灰色シルトを検出している。このことから、第Ⅰ調査区南半の谷は、それほど規模の大きいものとは考えられない。

以上のことから第1次調査区と同様に、網目状に流れる大小の河が形成した谷地形と、それに浸食された微高地部からなる地形が想定される。

遺構

弥生時代前期～中期前葉　地形のまとめで先述しているが、本調査区の下層遺構は大型のものが多い。第Ⅰ調査区南端のＳＫ－201と北端のＳＫ－210はいずれも一辺が2.0mを超える土坑である。周囲には同様な土坑が分布する。これらの性格として、木器貯蔵穴が想定される。微高地部分となる第Ⅰ調査区中央での深掘りをおこなってその分布を確認したわけではないが、おそらくは湧水点との関係により微高地から低地部へのその落ち際に沿って掘削されたものであろう。弥生時代前期～中期前葉の本調査区周辺では、微高地縁辺に木器貯蔵穴群の拡がりが予想される。

弥生時代中期中葉～中期後葉　弥生時代の上層遺構で注目されるのは、弥生時代中期中葉に掘削され弥生時代後期初頭まで再掘削により継続したＳＤ－101である。本溝は、微高地北側末端に掘削されており、これを境として地形は北側の谷へと落ち込む。その最初の掘削は大和第Ⅲ－１様式であり、これまでに唐古・鍵遺跡の居住域で検出された他区画溝と同様な掘削時期である。また、この大和第Ⅲ－１様式は、大環濠がめぐらされた時期でもある。本溝は、居住域の整備に伴い、区画と排水の目的をもって掘削されたと考えられる。

このＳＤ－101から南の第Ⅰ調査区中央は、弥生時代中期の居住域となる。炭灰層をもつ土坑を多く検出した。これは灰穴炉として、周辺の柱穴とともに竪穴住居跡を想定することができる。これら上坑からは、大和第Ⅱ～Ⅳ様式の土器が出土し、本調査区が安定した居住域となっていたことがうかがえる。その他、周辺では弥生時代中期後葉の井戸も２基検出した。なお、ＳＤ－101から北側では、弥生時代中期後葉の炭灰層をもつ土坑や井戸が検出される。それ以前は、堆積土に砂を含み居住域として安定していない。ＳＤ－101から北の第Ⅰ調査区内は、弥生時代中期後葉以降に居住域が拡がったと考えられる。それと対応するかのようにＳＤ－101は、弥生時代後期初頭には埋没し、再掘削されることはない。

弥生時代後期～古墳時代初頭　弥生時代後期後葉の遺構が確認できなかったことも、本調査区の一つの特徴といえよう。これは偶然、弥生時代後期後葉の遺構を避けて調査区が設定された可能性もある。しかし、遺物包含層中に弥生時代後期後葉の土器片は少なく、この時期の遺構が分布していたとしてもその密度は低いものであったと考えられる。これに対し、古墳時代初頭の遺構は、ＳＫ－106とＳＸ－101を検出している。ＳＸ－101の堆積状況は、周溝墓や古墳の周溝堆積に類似しており、注意が必要である。

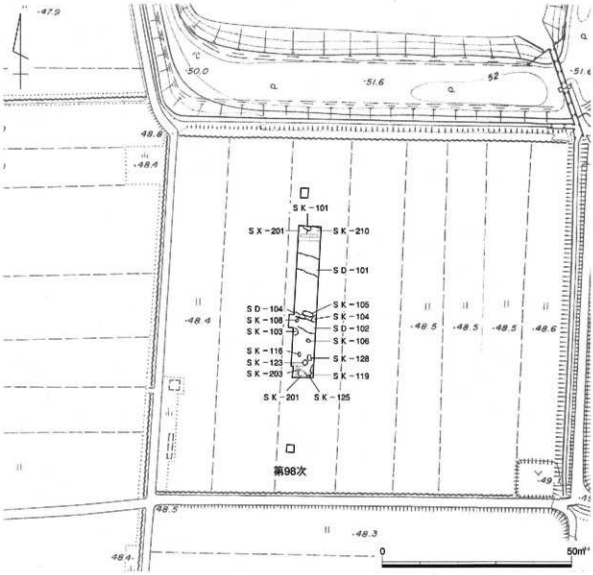
第３節　中央区の出土遺物

１．土器

（１）第98次調査

中央区における範囲（内容）確認調査は、第98次調査の１件である。今回、諸事情により本報告に掲載し得た第98次調査出土土器は、絵画土器・土器文様・異形土器・搬入土器といった特殊なものに限られる。多くの一般的な土器については、公表の機会を待ちたいと思うが、本報告では文章でのみその傾向を示しておく。

調査終了時において、遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は172箱を数えたが、



第524図　中央区の主要遺構（S＝1/1,000）

洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は118箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、3割減である。また、調査面積約253㎡であるから、1㎡あたり0.46箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ118箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝55箱（46.6%）、弥生時代溝37箱（31.4%）、弥生時代・古墳時代初頭土坑21箱（17.8%）、柱穴群1箱（0.8%）、古墳時代初頭落ち込み4箱（3.4%）となった。

遺構のうちまとまって土器が出土しているのは、調査区中央の北寄りで検出したＳＤ－101（Ｂ・Ｃ）からで、全体の2割を占めている。このうち、ＳＤ－101からは、大和第Ⅳ様式とともに大和第Ⅴ様式の土器が11箱（9.3%）出土している。この中には、絵画土器が含まれている。ＳＤ－101Ｂは、大和第Ⅲ－4様式を主体とし、9箱（7.6%）が出土した。ＳＤ－101Ｃは、大和第Ⅲ－1様式を主体として前後の時期を含み、8箱（6.8%）が出土した。

土坑からは、まとまった量の土器出土はなく、多いものでも2箱（1.7%）に収まる。搬入土器との関連で注目されるのが、ＳＫ－101・106・210、ＳＸ－201である。ＳＫ－101からは、播磨・摂津地域からの搬入と考えられる広口長頸壺（Ｐ5417）が出土しているが、これに伴う土器群は大和第Ⅲ－3様式の特徴をもつ。ＳＫ－106からは、小型のＳ字口縁甕（Ｐ5565）が出土しているが、これにともなう土器群は外面にタタキをもつ内面ケズリのいわゆる庄内甕等である。ＳＫ－210からは、外面に縦位ミガキを施した河内地域からの搬入品と考えられる甕（Ｐ5430）が出土している。他にも縦位ミガキを施した甕が2個体ほど確認でき、これらはまとめて本坑に廃棄された可能性がある。これに伴う土器群は、大和第Ⅱ－3－ｂ様式である。ＳＸ－201からは、伊勢湾沿岸から搬入されたと考えられる条痕文系甕（Ｐ5511）が出土している。唐古・鍵遺跡からは、これまでにも条痕文系甕は出土しているが全形のわかるものは、本資料が初めてとなる。これに伴う土器群は、少量の櫛描き文土器片を含むが、ヘラ描き直線文の壺と甕である。壺の口縁部端面は加飾されておらず、大和第Ⅱ－1－ａ様式と考えられる。この他、木製品がまとまって出土したＳＫ－201は、ヘラ描き直線文と櫛描き直線文が混在する大和第Ⅱ－2様式の良好な資料である。また、被熱した坏部に小孔を多数持つ結合形土器（Ｐ5211）が出土したＳＫ－128は、大和第Ⅳ－1様式の土器群を伴っている。結合形土器のなかでも、比較的古い時期のものとなろう。

なお、大和第Ⅰ様式の土器については、下層遺構が未調査のため少ないが、ＳＤ－101Ｃなどには大和第Ⅰ－2様式が含まれている。西に隣接する第53次調査区では、大和第Ⅰ－1様式に遡る落ち込みが検出されており、その時期の土器が多数出土している。おそらく、本調査区まで拡がりをもつことは、間違いないと思われる。一方、本調査区では大和第Ⅵ様式の遺構を、ほとんど検出することはできなかった。これは、遺物包含層においても同様であり、大和第Ⅵ様式と考えられる土器片は少ない。ただし、その前後となる大和第Ⅴ様式、布留0式の遺構・土器は確認しており、調査区が偶然に大和第Ⅵ様式の密度が低い地点に設定された可能性もある。

２．木製品

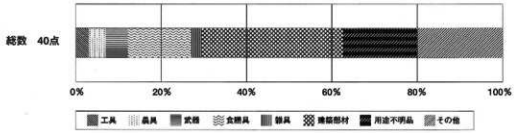
唐古・鍵遺跡の中央区は、唐古池の南側で集落の中央部分であり、本報告次数では第98次調査のみがあたる。中央区は、これまで遺跡の範囲確認が調査の主目的であったため調査があまり及んでいない地区である。

本報告分の出土点数は40点で、その内訳は第87表のとおりである。

第98次調査では、ＳＫ－201やＳＫ－210など、弥生時代中期前半の遺構から容器類や盾などの木製品が出土している。また、弥生時代中期中頃の竪穴住居に関連する遺構を検出しており、柱などの建築部材が多く出土している。第98次調査での木製品の出土数は、他の地区と比較しても決して少量でなく、木製品からみても居住区として人々が生活していたことがうかがえる。

第87表　中央区出土木製品の器種組成

総数	工具	農具	武器	食膳具	雑具	建築部材	用途不明品	その他
40	1	2	2	6	1	13	7	8



（1）工具

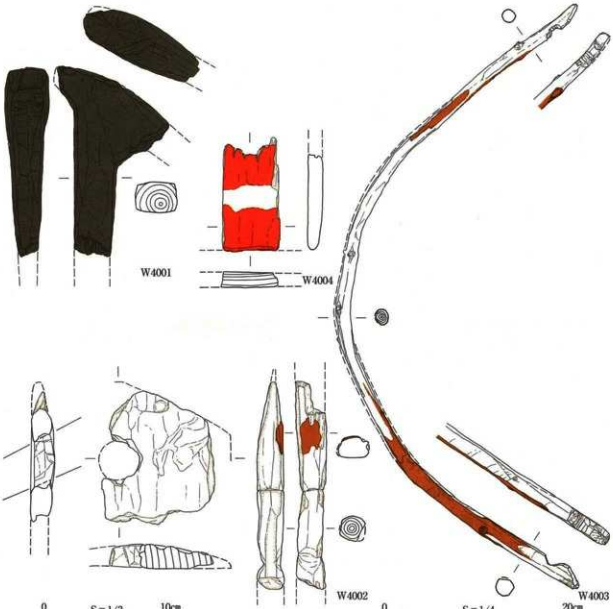
膝柄斧柄（W4001）　W4001は膝柄斧柄である。方柱状の柄部と少し膨らんだ形状の台部からなる。加工痕が柄部側面に残存しており、柄部も少し太い感があるので未成品の可能性がある。全面炭化している。

（2）農具

平鍬（W4002）　W4002は平鍬である。保存状態は悪く、土中で一度乾燥しているようである。頭部の一部分しか残存していないため身の平面形は不明である。隆起部は柄孔周囲から頭部・刃部にかけて緩やかに厚みを減じるものと思われる。柄は同一地点から出土したもので、劣化のためか非常に細く、身部の柄孔とは太さが異なる。柄には身部柄孔にあたったとも考えられる圧痕が残る。しかし、一部樹皮が残存していることから、農具柄なのかは少し疑問が残る。

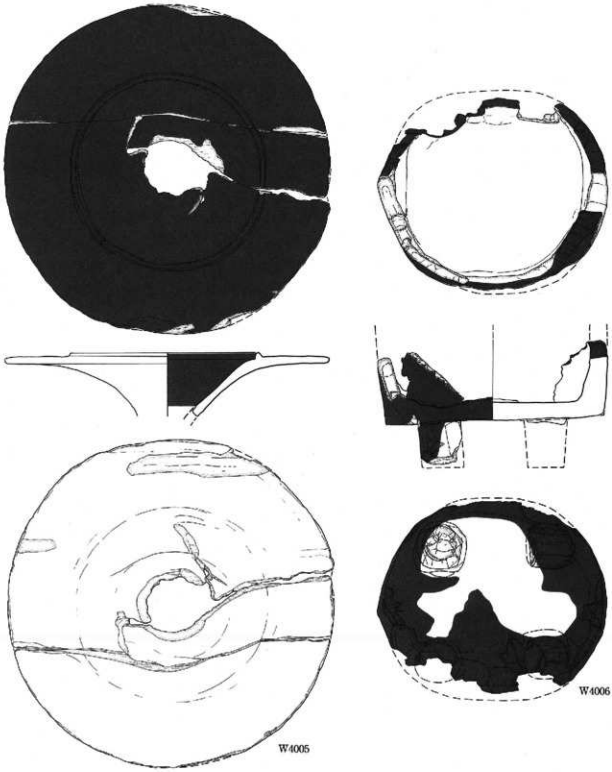
（3）武器

弓（W4003）　W4003は弓である。保存状態は良好で、上下端の弭付近に加工痕が残存する。樹皮が残存していることから未成品の可能性がある。



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W4001	膝柄斧柄	98次	SK-201	第2層	長（15.0）、幅（8.8） 柄幅 3.3、柄厚 2.4 台部幅 3.5、台部長（9.9）	全面炭化。 細斧柄か。 未成品の可能性あり	木	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ-2
W4002	平鍬	98次		暗灰色粘土（砂混）	身長（10.5）、身幅（8.8） 身厚（1.7）、柄長（16.3） 柄幅 2.4、柄厚 2.1	土中で一度乾燥している。 柄に樹皮残存	木	身:コナラ属アカガシ亜属 柄:コウヤ属 アカガシ亜属	Ⅲ-1
W4003	弓	98次	SD-201	暗灰色粘土（シルト混）	長 61.5、径 1.3～1.8	樹皮残存	ラ	ヒノキ	Ⅰ-2-a
W4004	盾	98次	SK-201	第2層	長（8.9）、幅（4.6）、厚1.1	片面彩彩。 中央横方向に無彩部分あり	木	スギ	Ⅱ-2

第525図　中央区出土木製品（1）



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W4005	高杯	98次	SK-201	第3層	径 34.2、高 (6.7)、器壁厚 1.2	土中で一度乾燥している。内面炭素吸着による黒色化	水	ヤマグワ	Ⅱ-2
W4006	合子	98次	SK-119-125		長軸 17.2、短径 (16.0)高 (5.9)、器壁厚 0.6~1.4	四脚。破損後被熱。外面炭化	水	ヤマグワ	Ⅱ-1

第526図　中央区出土木製品（2）

盾（W4004）　W4004は片面赤彩の盾の破片である。盾の下端部分と思われ、平坦に作られている。赤彩面の下端から約3.5cm上の部分に、幅約２cmの横方向に走る無彩部分がみられる。この無彩部分に横桟材をあてていた可能性が考えられる。盾に特徴的な小孔列はみられない。

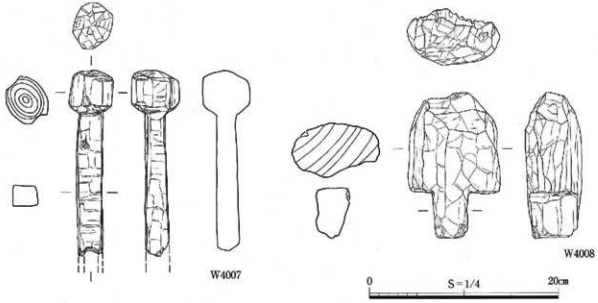
（4）食膳具

高杯（W4005）　W4005は水平縁を有する高杯の杯部である。彩色した痕跡は見受けられないが、内面が全体的にむらなく黒色化しており、廃棄時前後に火を受けたものではなく、意図的な彩色あるいは耐久性の強化のために黒色化させたものと思われ、炭素吸着による加工の可能性がある。口縁部には、炭素吸着時に焼け焦げた部分が数ヶ所みられるが、器形を大きく変形させるものではない。水平縁幅は約７cmで、内面の杯部と口縁部の境には、杯部から約0.7cmの凸帯がめぐっている。加工痕は確認できず、仕上げのミガキによって消されたと思われる。（出土状況：写真図版編 図版294－２）

合子（W4006）　W4006は四脚の合子身である。平面形は不整円形で、脚断面形も正円でない。器壁は0.6～1.4cmと各箇所で異なり、製作途中の可能性がある。広範囲にわたって炭化がみられる。

（5）雑具

栓（W4007）　W4007は栓である。円柱状の頭部と方柱状の軸部からなる。現存する軸部下端には貫通する孔の一部が残っている。おそらく方形孔が穿たれており、ここに別材を差し込む組合せ品と考えられる。保存状態は良好で加工痕が全面にみられ、加工具幅は約１cmである。



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W4007	栓	96次	SK-203	第3層	長（19.6） 頭部長軸 4.9、頭部短軸 4.2 軸部幅 2.8、軸部高 2.4	軸部下端に方孔	水	サカキ	Ⅱ-2
W4008	不明建築材	96次	SK-128	第4層	長 15.4、幅 9.8、厚 5.9	未成品の可能性あり	水	ヤマハゼ類	Ⅳ-1

第527図　中央区出土木製品（３）

（6）建築部材

柱（WP4002～4006）　すべて芯持ち材である。（出土状況：写真図版編 図版303－2～5）

WP4002～4005の小口面は伐採時の加工のまま使用しており、斜面で構成されている。

WP4006は小口面が平坦で伐採（切断）後、平坦に加工したものと思われる。

不明建築材（W4008・WP4001）　W4008は頭部を一段幅広に作った方柱状の木製品である。図反対面には加工痕がみられず、丸太材を割り取ったままの状態と思われる。頭部は四方からの斜め方向の加工痕が残存し、その中央には折り取り痕が残る。未成品の可能性がある。

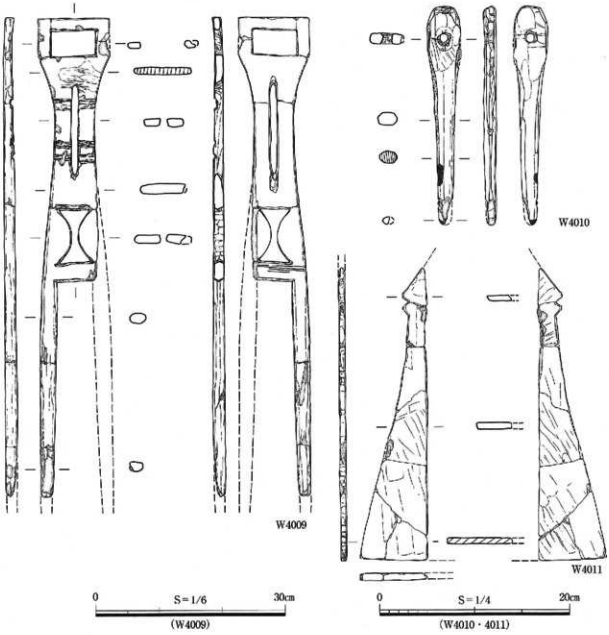
WP4001は木の幹から枝部分を利用した製品であり、製作途中の可能性がある。（出土状況：写真図版編 図版294－2）

（7）用途不明品

用途不明品（W4009～4011）　W4009は第69次調査のW1066と同形の用途不明品である。体部中央に横方向の溝がある面を前面として記述する。把手部は方形を呈し、体部は中央が最も幅狭になる曲線となり、体部下位から刃部にかけて緩やかに幅を増す。把手部と刃部の幅はほぼ同幅と考えられる。側面観は、把手部に少し湾曲がみられる程度で、ほぼ平坦である。把手部の孔は、横長の長方形を呈し、前後面からの削り込みによって穿孔されている。体部の最も幅狭になる部分に穿たれた孔は、長さ14.1cm、幅1cmと細長い形である。その下に穿たれた鼓形の孔は、把手部の孔と同様、前後面から削り込んで作られている。この孔の前面上位には一段薄く削られている部分があり、後面の下位、刃部の付け根にも水平方向の線刻（キズ）が4条みられる。これらは、加工が粗雑であり、装飾としての意味合いはないと思われ、鼓形を穿つ時の目印が残存したものと考えられる。体部に穿たれた縦長の孔の両脇には、幅1cm前後、深さ約0.4cmの非常に粗雑な溝が水平方向に3条みられる。この溝は、左右別々に加工されており、中央孔をあけた後に削られたものと考えられる。刃部断面は楕円形で、先端に向かって徐々に丸みを帯び、細くなる。中央孔の下端には斜め下方向に擦った痕跡が認められ、使用痕と思われる。その穿孔はその他の上下孔よりも粗雑であり、周囲の3条の溝とともに、この木製品の最も機能的な役割を果たしていた部分と想定している。おそらく、下孔に別材あるいは紐状のものを差し込んで使用した組合せ品であろう。（出土状況：写真図版編 図版295－2）

W4010は割材利用の木針状の木製品である。頭部は板状で幅広となり、その中央に径0.8cmの円孔を両面から穿つ。下位に向かって徐々に細くなるが、先端は丸みを帯び尖っていない。円孔の周囲には何かに圧迫されたようなくぼみがみられ、斜め方向に力が加わっていたようである。頭部には筋状の加工痕が残存する。先端部分一部炭化。

W4011は板目材を用いた板状の用途不明品である。側面上位に突起をもち、下端に向かって徐々に幅を増し、底面は平坦に作られる。厚みは均一である。表面に加工痕がみられ、加工具幅は約1.0cmである。



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W4009	用途不明品	98次	SX−201	第2層	長 (75.4)、幅 11.2、厚 1.0〜1.7	W1066と同形	ラ	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ−1−b
W4010	用途不明品	98次	SK−201	第4層	長 23.2、幅 3.6、厚 1.4 芯孔径 1.3	一部炭化	ラ	ヒノキ	Ⅱ−2
W4011	用途不明品	98次	SX−201	第1層	長 (30.7)、幅 (7.0)、厚 0.5	加工具痕:約1.0cm	ラ	ヤマハゼ類	Ⅱ−1−b
WP4001	不明建築材	98次	SK−201	第3層	長 (45.1)、幅 (42.5) 厚 6.4、3.0	柱分かれ部分 反柄来或品か	水	コナラ属アカガシ亜属	Ⅱ−2
WP4002	柱	98次	Pit−134		長 (29.8)、幅 (10.9)、厚 (7.4)		水	ヒノキ科	Ⅳ?
WP4003	柱	98次	Pit−105	第1層	長 (34.1)、幅 8.8、厚 (7.3)		水	スギ−ヒノキ科	Ⅳ?
WP4004	柱	98次	Pit−107	第1層	長 (36.3)、幅 12.8、厚 (8.2)		水	ブナ科	Ⅳ?
WP4005	柱	98次	Pit−106	第1層	長 (28.3)、幅 12.0、厚 (6.1)		水	ヒノキ科	Ⅳ?
WP4006	柱	98次	Pit−109	第1層	長 (44.7)、幅 (13.3)、厚 (8.5)		水	ヒノキ	Ⅳ?

第528図　中央区出土木製品（4）

３．石器

中央区の打製石器は、緑色チャート製の火打石１点（第98次調査　暗褐色砂質土出土）を除いて、すべてサヌカイト製である。剥片・石核を含めたサヌカイト製遺物の総重量は37.0511kg、１㎡あたりの出土量は約151ｇとなり、他の地区を圧倒している。石器出土点数／調査面積を試算すると、南地区では約0.41点、東環濠では約0.02点、西地区では約0.37点となるのに対し、中央区では約0.69点と試算でき、石器の多さが明確である。中央区において打製石器としたもののなかには、作りの粗雑なものも多く、これらを未完成品・製作失敗品と考えるなら、中央区の石器群の背景には、かなり集中的な石器生産が想定できよう。また石核がかなりまとまった点数出土していることを踏まえると、中央区が本遺跡の打製石器製作において、重要な役割を担った地区であることが推定される。

第88表　中央区の石器

種類	器種	98次
打製石器	石剣	25
	中形尖頭器	15
	石鏃	52
	石錐	39
	石小刀	7
	石鋸	0
	スクレイパー	29
	楔形石器	2
	火打石	2(1)
	石敲	0
	石核	32
	合計	203(1)
磨製石器	石庖丁	49
	石庖丁未成品	5
	太型蛤刃石斧	2
	柱状片刃石斧	3
	扁平片刃石斧	2
	磨製石鏃	0
	磨製石剣	1
	磨製石戈	0
	縄状石斧	0
	合計	62
石製品	石製紡錘車	4
	石製紡錘車未成品	0
	石製円板	1
	垂飾品	0
	ミニチュア石製品	0
	用途不明石製品	10
	石剣	6
	石製茶臼	12
	砥石	50
	合計	83
礫石器	敲石	6
	石槌	0
	磨石	20
	台石	3
	石皿	0
	投弾	0
	合計	29

注）打製石器の数値はサヌカイト製の点数
（ ）内の数値はサヌカイト製以外のものの点数を示す

磨製石器は62点出土している。その内訳は第88表のとおりである。磨製石器の約８割を石庖丁が占めており、南地区や西地区よりも相対的に石庖丁が多いといえる。数量的には少ないが、未成品も出土していることから、他地区と比較して規模は小さいながら、石器製作はおこなわれていたと考えられる。また南地区、西地区でみられた磨製石鏃、磨製石戈などの武器形石製品、流紋岩製の石庖丁が、中央区では出土しておらず、両地区とは異なる様相が指摘できる。

石製品は83点出土している。そのうち砥石は、写真掲載・図化した９点のみにとどまり、南地区や西地区に比べて著しく少ない。中央区の砥石は、いずれも小形のものに限られる。また他の地区ではみられなかった円孔状のくぼみを有する砥石が２点出土しており、この地区でのみ研磨された器物が存在する可能性が想定できる点は注目される。

礫石器は29点出土している。磨石の占める割合が高く、盛んな植物質食料加工が想定できるかもしれないが、石皿が出土しておらず、そうした想定を困難にしている。中央区の石器には、磨痕が単独で認められるものはなく、敲打痕のみをとどめる（敲石）か、磨石として利用された後に敲石に転用されたものが多い。それにもかかわらず敲石の出土量は多くなく、打製石器や磨製石器の様相と符合しない点は注目されよう。

（1）打製石器

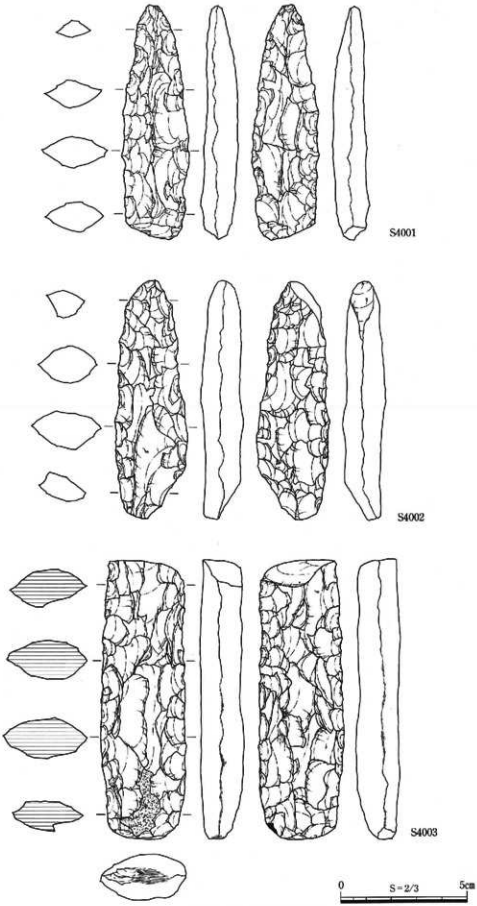
石剣（S4001～4003・SP4001～4022）　25点確認しているが、全体の形状をとどめるものはなく、ほとんどが破片か、それにわずかに再加工を加えたものである。先端部片が8点、中央部片が9点、基部片が8点ある。

S4001はすべての剥離面が顕著な光沢をみせる。基部に折損面が認められるが、折損の後、わずかに調整されている。両側縁はおおむね並行しているが、中央部付近でわずかに外湾する。外湾する部分のb面側には階段状剥離による段がみられ、こうした形態は意図された結果というよりも、製作作業上の問題であろう。

S4002もすべての剥離面に顕著な光沢が観察される。a面基部には基部方向からの大きな剥離痕が認められ、本資料はこの面から剥がれ落ちた先端部片であったと推測できる。先端部片となった後、再利用が目指されたようである。両側縁は敲打痕が発達しており、縁辺には階段状剥離もみられることから、調整作業が難航したことがうかがえる。その際に加わった無理な力が、破損につながった可能性が考えられる。a面基部の折損面、先端部の折損面とも、不純物が観察される。

S4003はa面基部に自然面が認められ、原石か背面に自然面をもつ剥片を素材としていると思われる。自然面の観察からは石理走向が判読できる。先端部を折損しているが、全体的に入念に整形が施されており、基端部にも両面加工による調整が施されている。両面加工の後に

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
S4001	石剣	98次	SD-101C	第13層	9.3	2.7	1.3	4.8		Ⅲ-1
S4002	石剣	98次	SD-101	第1層	9.4	2.9	1.6	46.2		Ⅴ
S4003	石剣	98次	SX-101	第2層	(11.1)	3.3	1.6	(86.1)	中央部付近に研磨痕。両側縁・基端面に磨耗痕	庄内
SP4001	石剣	98次		黒色砂質土	(2.4)	(2.1)	(0.6)	(3.2)		弥生中・後期
SP4002	石剣	98次		暗褐色粘質土	(3.1)	(2.1)	(0.4)	(2.6)	風化がやや進む	弥生～中世
SP4003	石剣	98次	SK-137	第1層	(3.5)	(2.6)	(0.9)	(7.3)		Ⅳ-1?
SP4004	石剣	98次		暗褐色砂質土	(3.6)	(2.2)	(0.8)	(5.4)		弥生～中世
SP4005	石剣	98次		暗褐色砂質土	(4.8)	(2.6)	(1.3)	(15.3)		弥生～中世
SP4006	石剣	98次	SD-101C	第9(下)層	(7.1)	(2.6)	(1.1)	(18.2)		Ⅱ-2
SP4007	石剣	98次	SD-101C	第11層	(7.2)	(3.4)	(1.1)	(33.3)		Ⅲ-1・2
SP4008	石剣	98次	SD-102	第2層	(5.8)	(2.7)	1.1	(26.8)		Ⅱ-2
SP4009	石剣	98次		灰色粘質土	(4.9)	3.2	1.7	(24.5)	両側縁に磨耗痕	弥生～中世
SP4010	石剣	98次		暗褐色砂質土	(6.0)	3.2	1.5	(40.3)	両側縁に磨耗痕	弥生～中世
SP4011	石剣	98次	SD-59	第1層	(5.5)	3.4	1.2	(30.9)	両側縁に磨耗痕	中世
SP4012	石剣	98次	SK-208	第1層	(6.3)	3.7	1.4	(41.0)		Ⅱ-3
SP4013	石剣	98次		暗褐色砂質土	(4.1)	(2.4)	(1.1)	(13.2)		弥生～中世
SP4014	石剣	98次	SD-66	第1層	(3.1)	2.8	(1.3)	(12.1)	両側縁・基端部に磨耗痕。ポット・リッド状の剥離痕をもつ	中世
SP4015	石剣	98次		暗褐色砂質土	(3.6)	3.1	(1.2)	(15.3)		弥生～中世
SP4016	石剣	98次		暗褐色砂質土	(4.0)	3.8	(1.0)	(16.3)		弥生～中世
SP4017	石剣	98次		暗黄灰色粘質土	(6.5)	3.3	1.7	(50.3)	基端部に磨耗痕	Ⅱ-1?
SP4018	石剣	98次	SD-104	第3層	(6.5)	2.8	1.4	(34.9)	折損後に研磨されている	Ⅲ-2
SP4019	石剣	98次	SD-101B	第4層	(6.0)	(4.2)	(1.3)	(35.1)		Ⅲ-4・Ⅳ
SP4020	石剣	98次		黒色砂質土	(7.9)	4.3	1.4	(70.1)	両側縁に磨耗痕	弥生中・後期
SP4021	石剣	98次	SK-201	第3層	(7.6)	4.6	1.9	(80.1)	片側縁に磨耗痕	Ⅱ-2
SP4022	石剣	98次	SK-210	第2層	(6.2)	(5.2)	(1.1)	(31.5)	両側縁・基端部に磨耗痕	Ⅱ-3-b



第529図　中央区出土打製石器（１）

研磨が施されたようで、基端部には横方向の擦痕が発達している。またｂ面中央部の剥離痕の一部にも、明確な研磨痕を認めることができるが、この研磨痕は周囲の剥離痕と一定の前後関係を示さず、「中間研磨」[1]として評価されよう。階段状剥離によって生じた段の除去を目指したものと思われる。中央部から基部にかけては、両側縁がわずかに丸みを帯びるほどに磨耗しており、基軸にほぼ並行する方向に擦痕が観察される。またｂ面基部には器面の中央から生じる特異な剥離痕が認められ、ｂ面左側縁から施された剥離痕の、階段状の末端部を取っ掛かりにして、加撃がおこなわれている。剥離痕には打点も明瞭に観察され、いわゆる「パンチ使用による剥離面」[1]に相当すると思われる。先端部の折損面には不純物が観察される。

中形尖頭器（Ｓ4004～4008）　15点確認している。他の地区に比して、木葉形のⅡ類の占める割合が高い（47%）。

Ｓ4004は細長であり、Ⅰ類に属する。調整は概して粗雑であり、先端部の縁部に敲打痕が観察されるほどである。また中央部から先端部にかけては、調整剥離痕が鱗番状や階段状の末端部を呈することもあり、厚みが十分に除去されていない。

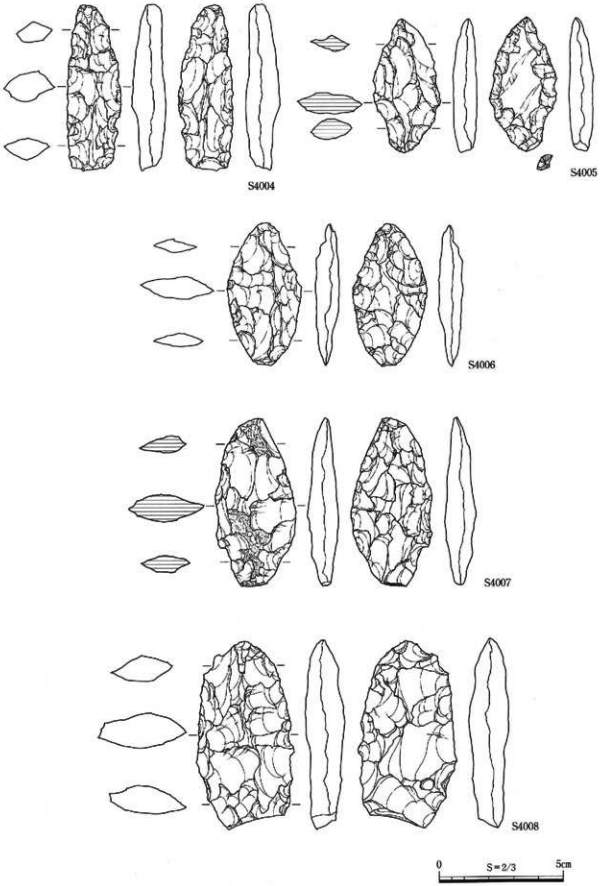
Ｓ4005にはわずかに茎部が確認でき、Ⅳ類に分類できる。黒色の縞の入るサヌカイトが用いられており、他の資料よりわずかに風化が進んでいるようにみえる[2]。基端部には素材剥片の打面が、ｂ面には素材剥片の腹面が認められるほか、ａ面先端部右側にはポジティブな剥離面が観察される。したがって剥片素材の石核から、自然面を打面として素材剥片を得たものと考えられよう。右理走向も判読でき、素材剥片が右理に沿って剥離されたことがわかる。

Ｓ4006は木葉形であり、Ⅱ類に分類される。ｂ面に素材面が認められ、横長剥片を素材としていることが推測できる。ａ面右側の剥離痕は階段状を呈するものの、全体的に薄い調整剥片を剥ぎ取りつつ、丁寧に整形されているような印象を受ける。

Ｓ4007は不整形ながら木葉形を呈し、Ⅱ類に分類できる。ａ面に自然面が、ｂ面上半にポジティブな剥離面が観察される。ａ面の剥離痕をみる限り、素材剥片の背面はすべて自然面に覆われていた可能性が高く、基端部に自然面が残っていることと合わせて、礫端片が素材となっていることが推察される。素材剥片の剥離は石理に沿っておこなわれたようである。右側縁からの調整は、薄手の調整剥片を連続的に剥がしつつ丁寧におこなわれているが、左側縁からの調整は、自然面の影響もあってか難航したようで、随所に階段状の末端部が観察できる。

Ｓ4008は全体が強い光沢を放っている。ｂ面基部付近にポット・リッド状の剥離面が認められることから、被熱した石材が用いられたことが確実視される。末端を欠損しており形状も

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
S4004	中形尖頭器	98次		暗褐色砂質土	(6.6)	2.1	1.3	(18.5)		弥生～中世
S4005	中形尖頭器	98次		暗褐色砂質土	5.3	2.7	0.9	12.8	やや風化が進む	弥生～中世
S4006	中形尖頭器	98次		黒色砂質土	5.7	3.0	0.9	14.7		弥生中・後期
S4007	中形尖頭器	98次	SD-102	第2層	6.8	3.2	1.3	24.5		Ⅱ-2
S4008	中形尖頭器	98次	SK-139	第3層	(7.5)	3.9	1.5	(47.2)	ポット・リッド状の剥離痕をもつ	Ⅳ-1



第530図　中央区出土打製石器（２）

粗雑ではあるが、おおむね木葉形で、Ⅱ類に分類される。a面左側には階段状の剥離痕が段を作っている。

石鏃（S4009～4023・SP4023～4040）　52点確認している。各類型の割合は、Ⅰ類が29%、Ⅱ類が40%、Ⅲ類が13%、Ⅳ類が18%である。S4019・4020はすべての剥離面がわずかに光沢をもっている。S4009～4011・4022・4023がⅠ類、S4016・4017がⅡ類、S4012～4015・4021がⅢ類、S4018～4020がⅣ類にあたる。S4022・4023は鋸縁が緩やかなS字状を描くように仕上げられ、逆刺が突起のように仕上げられている。

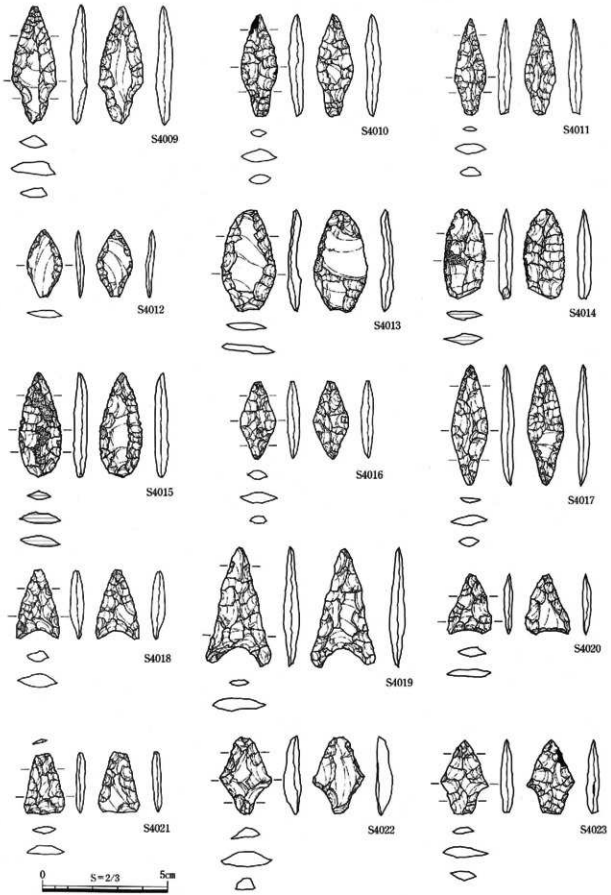
石錐（S4024～4027・SP4041～4055）　39点確認している。各類型の割合は、Ⅰa類が31%、Ⅰb類が3%、Ⅱa類が14%、Ⅱb類が14%、Ⅲ類が34%、Ⅴ類が4%である。図示したものはすべてⅠa類にあたる。Ⅳ類、Ⅵ類は出土していない。

S4026は剥離面打面の剥片を素材とし、剥片の側縁～末端に長い錐部を作り出している。

石小刀（S4028～4031）　7点確認している。

S4028はすべての剥離面が光沢をもっている。b面にポジティブな剥離面が認められ、剥片を素材としていることがわかる。素材剥片が横方向に利用されており、素材剥片の反りをとどめている。基端部にはb面側からの折損面が認められる。S4029は内刃側に突起が認めら

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S4009	石鏃	98次	SK-104	第3層	4.6	1.8	0.6	4.1		Ⅱ-2
S4010	石鏃	98次		黒色砂質土	4.1	1.4	0.5	2.6		弥生中・後期
S4011	石鏃	98次	SD-102	第2層	(3.8)	1.2	0.5	(1.7)		Ⅱ-2
S4012	石鏃	98次	掘土	黒色砂質土	2.7	1.4	0.3	1.1		弥生中・後期
S4013	石鏃	98次		黒色砂質土	4.0	2.1	0.5	3.6		弥生中・後期
S4014	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(3.6)	1.6	0.5	(3.1)		弥生～中世
S4015	石鏃	98次	SD-61	第1層	4.2	1.7	0.5	3.5		中世
S4016	石鏃	98次	SD-53	第1層	(3.1)	1.4	0.5	(1.6)		中世
S4017	石鏃	98次	SD-102	第2層	4.8	1.4	0.4	2.4		Ⅱ-2
S4018	石鏃	98次	掘土	黒色砂質土	2.7	1.7	0.6	2.1		弥生中・後期
S4019	石鏃	98次		暗黄褐色砂質土Ⅱ	4.7	2.5	0.6	5.8		Ⅱ-1～Ⅱ-1
S4020	石鏃	98次	SX-2051	第3層	(2.4)	2.4	0.3	(1.2)		中世
S4021	石鏃	98次	掘土	黒色砂質土	(2.4)	1.6	0.3	(1.3)		弥生?
S4022	石鏃	98次	SD-54	第1層	3.3	2.0	0.6	3.3		中世
S4023	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(2.9)	1.8	0.5	(1.8)		弥生～中世
SP4023	石鏃	98次	SD-102	第2層	5.2	2.1	0.5	4.0		Ⅱ-2
SP4024	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(5.4)	1.9	0.9	(7.6)		弥生～中世
SP4025	石鏃	98次		黒色砂質土	5.7	1.4	0.7	5.2		弥生中・後期
SP4026	石鏃	98次	SK-123	第2層	(4.4)	2.0	0.4	(2.9)		Ⅱ-3-b
SP4027	石鏃	98次	SD-65B	第1層	5.0	(2.1)	0.6	(4.3)		中世
SP4028	石鏃	98次	SD-102	第1層	(4.6)	1.3	0.5	(2.4)		Ⅱ-4
SP4029	石鏃	98次		暗褐色砂質土	2.9	2.0	0.6	2.3		弥生～中世
SP4030	石鏃	98次	SD-101	第1層	3.4	1.7	0.4	2.2		Ⅴ
SP4031	石鏃	98次	SD-58	第1層	(4.0)	2.2	0.6	(3.6)		中世
SP4032	石鏃	98次	SX-101	第1層	4.9	1.0	0.5	2.4		庄内
SP4033	石鏃	98次	SD-102	第2層	(3.2)	1.3	0.3	(1.2)		Ⅱ-2
SP4034	石鏃	98次	SX-51	第1層	(4.1)	1.5	0.6	(3.3)		中世
SP4035	石鏃	98次		黒色砂質土	2.6	(1.6)	0.4	(0.9)		弥生中～後期
SP4036	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(3.2)	(1.3)	0.5	(1.8)		弥生～中世
SP4037	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(2.7)	2.8	0.5	(3.6)		弥生～中世
SP4038	石鏃	98次	掘土	暗褐色砂質土	2.4	1.3	0.4	0.9		弥生～中世
SP4039	石鏃	98次	SX-51	第1層	3.6	1.8	0.7	3.2	縞状の石質のサヌカイト製	中世
SP4040	石鏃	98次	掘土	黒色砂質土	(2.5)	2.2	0.5	(2.9)		弥生中・後期



第531図　中央区出土打製石器（３）

れる。基端部はｂ面方向からの折損面からなる。

Ｓ4030は先端部に不純物が取り込まれている。基端部にはａ面方向からの折損面が認められる。Ｓ4031はａ面側にポジティブな剥離面が、ｂ面側にも素材面と思われる大きな剥離面が観察でき、剥片を素材としていることがわかる。先端側・基端側ともに折損しており、それぞれｂ面方向から生じた折損面、ａ面方向から生じた折損面が認められる。

スクレイパー（Ｓ4032～4041）　29点確認している。

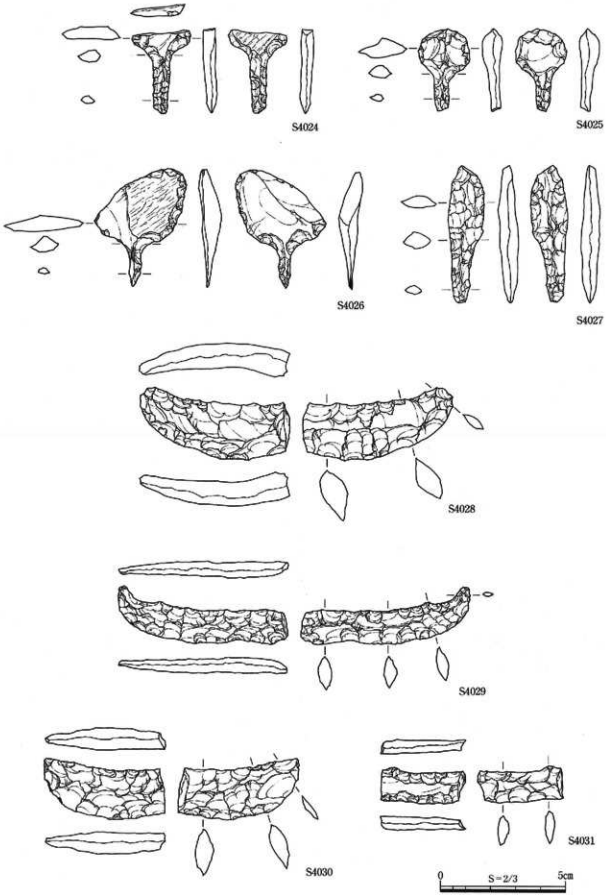
Ｓ4032は自然面を打面とし、石理に沿って剥離された縦長の剥片を素材としている。自然面を側面に取り込むことで剥片が縦長化したと思われ、そうして得られた長大な縁辺が刃部として利用されている。刃部は両面加工で作出されており、刃部角は55度前後である。

Ｓ4033は石理に沿って剥離された、自然面打面の剥片を素材としている。コーンの発達が著しく、腹面もいびつな形状をしている。刃部は素材剥片の左側縁～末端に作出されており、丁寧な並列剥離が連続的に施されている。刃部角は55度前後である。また素材剥片の右側縁にも腹面側から二次加工が施されているが、角度は90度前後で縁辺も鋭利さを欠いており、刃部として機能するのは困難と思われる。

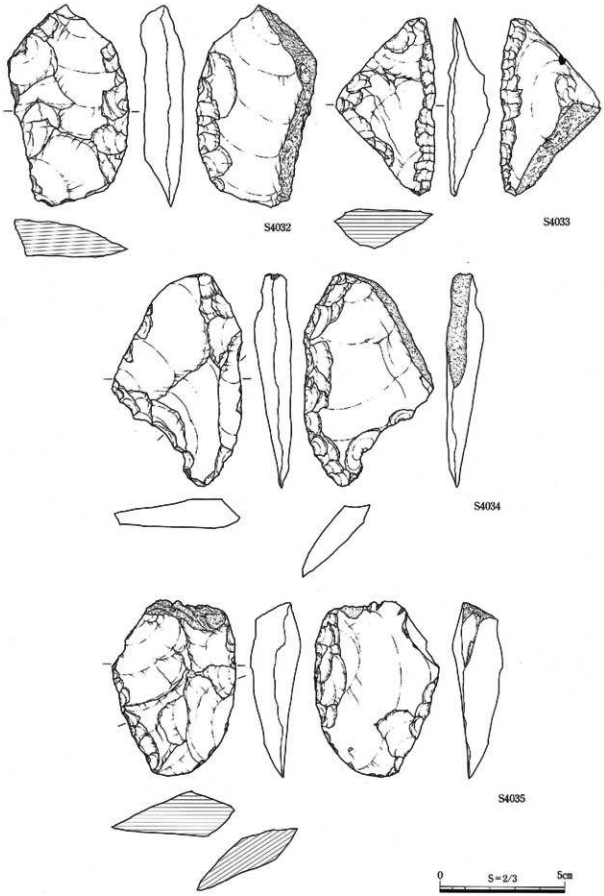
Ｓ4034は自然面を打面として、石理に沿って剥離された縦長剥片を素材としている。剥離痕の境界に生じた稜が導線となり、剥離を誘導することで剥片が縦長化しているようである。打点と目される付近は0.48×0.23cmの範囲にわたって、自然面上に白色の打撃痕が観察できる。刃部は素材剥片の右側縁と末端に作出されている。刃部角はそれぞれ55度前後、60度前後であり、両者とも両面加工である。素材剥片の左側縁にも二次加工を施した部分がある。

Ｓ4035は石理に沿って剥離された剥片を素材としている。打面形態は不明であるが、側面

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
S4024	石鏃	98次	SD-101	第1層	3.3	2.3	0.5	2.4		V
S4025	石鏃	98次		黒色砂質土	(3.2)	2.0	0.7	(3.3)		弥生中・後期
S4026	石鏃	98次		暗褐色砂質土	4.7	3.7	0.7	7.4		弥生～中世
S4027	石鏃	98次	排土	黒色砂質土	5.5	1.4	0.7	4.6		弥生中・後期
SP4041	石鏃	98次	SK-103	第1層	(4.5)	3.3	0.4	(4.0)		Ⅱ/-1
SP4042	石鏃	98次	SD-54	第1層	(2.7)	2.3	0.6	(2.2)		中世
SP4043	石鏃	98次	SD-52	第1層	(2.9)	2.0	0.6	(2.4)		中世
SP4044	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(3.7)	3.3	0.6	(5.6)		弥生～中世
SP4045	石鏃	98次	SD-53	第1層	(5.1)	4.1	1.1	(20.5)		中世
SP4046	石鏃	98次		灰色粘質土	4.0	2.4	1.2	14.4		弥生～中世
SP4047	石鏃	98次		暗褐色砂質土	4.0	2.6	0.7	5.8		弥生～中世
SP4048	石鏃	98次	SD-101C	第10(下)-b層	(4.6)	2.2	0.8	(7.0)		Ⅱ-2
SP4049	石鏃	98次		灰色粘質土	5.6	1.7	0.9	9.3		弥生～中世
SP4050	石鏃	98次	SX-51	第1層	(4.0)	2.1	0.8	(5.4)		中世
SP4051	石鏃	98次		暗褐色砂質土	(4.7)	2.2	1.0	(6.9)		弥生～中世
SP4052	石鏃	98次	SD-102	第1層	(4.2)	2.1	0.8	(6.5)		Ⅱ-4
SP4053	石鏃	98次		黒色砂質土	4.8	1.5	0.5	3.8		弥生中・後期
SP4054	石鏃	98次		暗黄褐色砂質土	5.4	1.6	1.0	9.4		弥生中期
SP4055	石鏃	98次	SD-102	第3層	(4.6)	1.5	0.8	(4.6)		Ⅱ-2
S4028	石小刀	98次	SD-101	第1層	(6.1)	2.2	1.1	(17.1)		V
S4029	石小刀	98次	SD-65B	第1層	(6.7)	0.6	0.6	(6.1)		中世
S4030	石小刀	98次	SD-58	第1層	(5.0)	2.1	0.8	(8.9)		中世
S4031	石小刀	98次	排土	黒色砂質土	(3.2)	(1.3)	0.5	(2.8)		弥生中・後期



第532図　中央区出土打製石器（４）



第533図　中央区出土打製石器（5）

に自然面を取り込んでいることがうかがえる。素材剥片の末端側に両面加工で作出された刃部は、刃部角55度前後である。素材剥片の打面部にも両面加工が連続的に施されているが、角度は90度前後であり、縁辺はやや潰れて鈍くなっている。

S4036はすべての剥離面がわずかに光沢をもっている。b面右側の二次加工部に素材剥片の打面が残存し、剥離面を打面とする剥片が素材となっているのがわかる。刃部は素材剥片の末端側、打面側にみられ、両者とも両面加工で、刃部角は70度前後である。

S4037はすべての剥離面がわずかに光沢をもっている。b面側にポット・リッド状の剥離痕が観察でき、本資料が被熱したサヌカイトを素材としていることは確実である。素材剥片は自然面を打面とし、石理に沿って剥離されている。打点は0.45×0.32cmにわたって潰れをともなう白色の打撃痕が観察され、打点直下がわずかに崩れている。コーンの発達も著しい。刃部は素材剥片の左側縁に作出されており、両面加工が施されている。刃部角は60度前後をはかる箇所もあるが、階段状剥離が著しく、鋭利さを欠いている。また素材剥片の末端に生じた折損面にも連続的な二次加工が加えられているが、その意図は不明である。

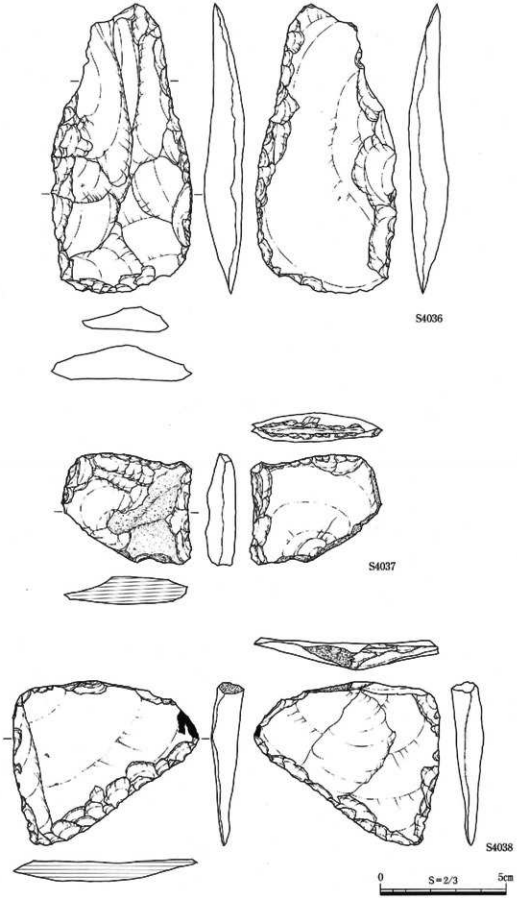
S4038の素材剥片の打面は自然面と剥離面からなる。石理に沿って剥離された剥片の右側縁～末端、左側縁に刃部が作出されている。両者は両面加工であり、刃部角50度前後である。

S4039は不純物の影響もあってか、素材剥片の打面を欠失している。自然面の観察からは、素材剥片は石理に沿って剥離されたことがわかる。素材剥片の左側縁には刃部が作出されており、並列剥離が観察される。刃部角は60度前後である。また素材剥片の右側縁の折損面からも連続的な二次加工が認められ、70度前後の縁辺が作り出されている。

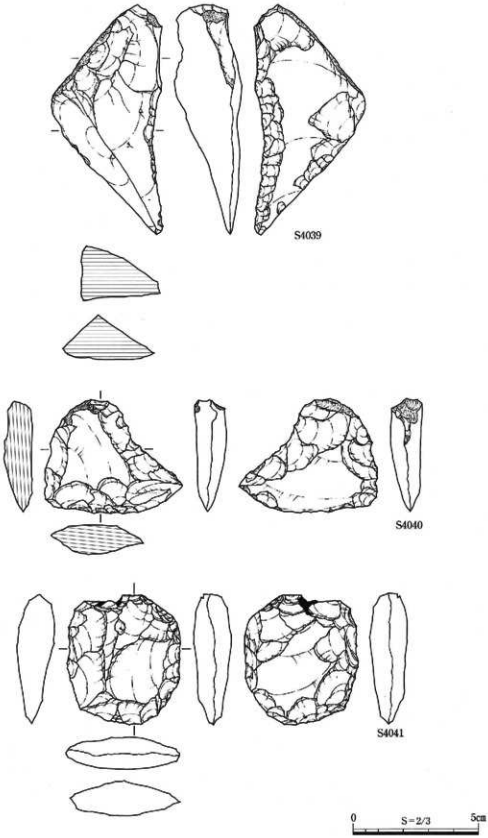
S4040は自然面打面の剥片を素材としている。石理に対して半順目で剥離されている。打点付近は0.42×0.25cmの範囲に、微細な剥離痕をともなう敲打痕が観察でき、素材剥片の剥離にともなう打撃痕と思われる。刃部は素材剥片の右側縁、末端、左側縁にみられ、すべて両面加工である。刃部角はそれぞれ、70度前後、55度前後、70度前後である。

S4041はすべての剥離面が強い光沢をはなっている。b面にはポット・リッド状の剥離痕がみられ、本資料が熱を受けたサヌカイトを利用していることが確実視される。またポット・リッド状の剥離痕の付近は被熱によって亀裂が生じており、ひときわ強い光沢をみせる新欠部の付近は剥落している。二次加工は素材剥片の全周に認められるが、石質の問題もあってか、

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和編式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S4032	スクレイパー	98次	SK-105	第1層	6.5	6.5	1.4	57.4		Ⅱ-1
S4033	スクレイパー	98次		暗黄灰色粘質土	5.9	5.1	1.6	(29.3)		弥生中期
S4034	スクレイパー	98次	SD-104	第1層	8.3	5.8	1.3	52.6		Ⅱ-2
S4035	スクレイパー	98次		黒色砂質土	5.4	7.1	1.9	55.8		弥生中・後期
S4036	スクレイパー	98次	SX-201	第1層	11.6	3.2	1.4	88.7		Ⅱ-1-b
S4037	スクレイパー	98次		黒色砂質土	4.3	5.6	1.2	31.2	ポット・リッド状の剥離痕をもつ	弥生中・後期
S4038	スクレイパー	98次		黒色砂質土	6.5	7.4	1.0	(47.6)		弥生中・後期
S4039	スクレイパー	98次	SK-113	第1層	9.1	4.5	2.4	63.1		Ⅳ-1
S4040	スクレイパー	98次		黒色砂質土	4.4	5.5	1.2	27.5		弥生中・後期
S4041	スクレイパー	98次	SK-201	第5層	5.1	5.1	1.4	(36.3)	ポット・リッド状の剥離痕をもつ	Ⅱ-2



第534図　中央区出土打製石器（6）



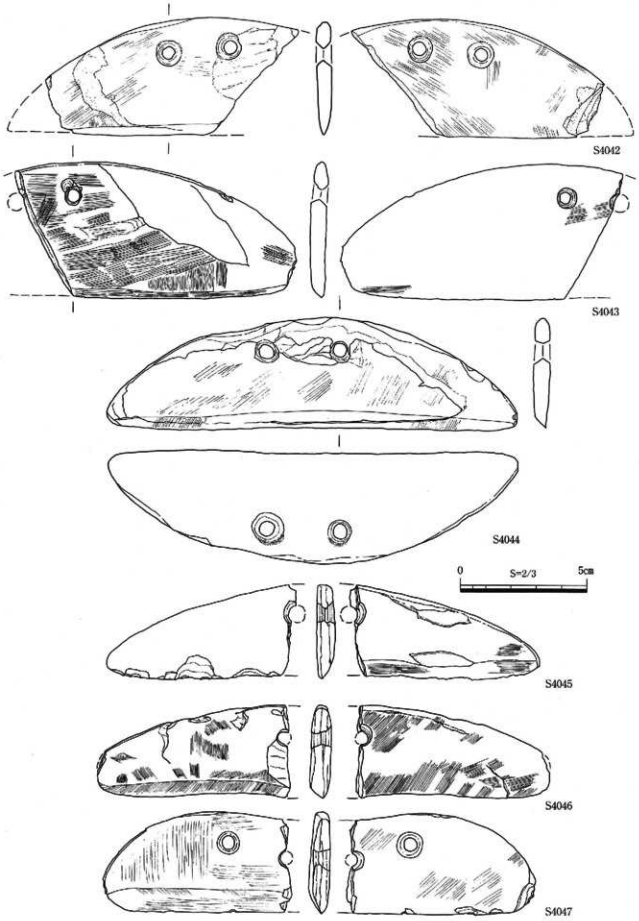
第535図　中央区出土打製石器（７）

90度前後をはかる箇所が多く、鋭利な部分は素材剥片右側縁側の一部に限られる。

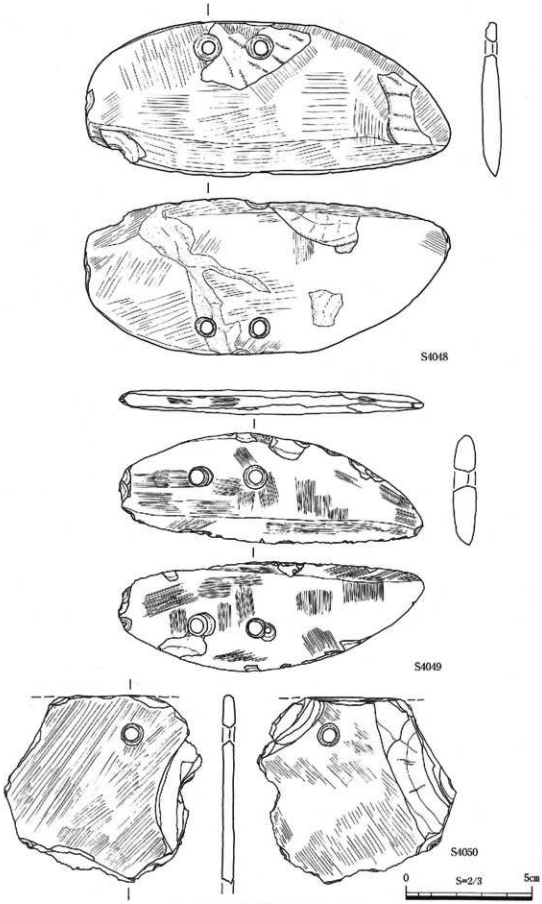
（2）磨製石器

結晶片岩製石庖丁（S4042～4051・SP4056～4059）　結晶片岩製の石庖丁は10点図化した。そのうち2点は大形石庖丁である。全体的に完形のものは少なく、図化したものの中ではS4044・4048・4049の3点にとどまる。S4042～4045は直線刃半月形、S4046は内湾刃半月形、S4047は長方形、S4048・4049は杏仁形を呈している。穿孔はすべて両面から回転穿孔されている。また結晶片岩の節理の方向は統一されており、節理に沿って剥離された素材が用いられている。S4042は中央で折損しており、端部も欠損がみられる。また穿孔部付近に両面とも紐ずれの痕跡が残っている。S4043は中央で折損しており、端部に欠損がみられる。a面に未貫通の穿孔失敗痕が2ヶ所みられる。S4044はb面の穿孔部付近に紐ずれの痕跡がみられる。また、表面は著しく磨耗しており、一部光沢を伴っている。S4045・4046はともに中央で折損しており、細身の形態を呈している。S4045のb面刃縁には剥離が連続しており、これは使用時に伴ったものと考えられる。S4046の刃部はわずかながら内湾しているが、使用に伴う研ぎ減りの可能性が考えられる。S4047は中央で折損している。また、刃部に一部剥離痕跡がみられる。S4048・4049は完形である。S4048のa面の刃部先端はさらに角度を変化させて研磨しており、刃縁から約0.2cmの位置に稜を有している。S4049の刃縁は微細な剥離が連続しており、使用の痕跡がうかがえる。またb面には穿孔失敗痕が1ヶ所みられる。S4050・4051は大形石庖丁である。S4050は刃部など大部分が欠損しているが、その厚みは均一であり、研磨痕からも非常に丁寧に製作されていることがうかがえる。S4051は中央で折損

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
S4042	石庖丁	98次	SX-101	第1層	(10.0)	4.7	0.6	(44.2)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		庄内
S4043	石庖丁	98次		暗黄褐色砂質土Ⅱ	(11.2)	5.4	0.7	(69.9)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅱ-1～Ⅲ-1
S4044	石庖丁	98次		灰色粘土	16.3	4.3	0.8	56.8	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩E		弥生中期
S4045	石庖丁	98次		暗褐色砂質土	(7.5)	3.8	0.8	(30.2)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩D		弥生～中世
S4046	石庖丁	98次	SD-101B	第6(下)層	(7.7)	3.7	0.8	(34.5)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩B		Ⅲ-4・Ⅳ
S4047	石庖丁	98次	SK-125	第3層	(7.5)	3.9	0.8	40.3	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅲ-1
S4048	石庖丁	98次		暗褐色粘質土(灰粘混)	14.5	6.2	0.7	108.3	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生
S4049	石庖丁	98次		暗黄褐色砂質土Ⅱ	12.1	4.2	0.8	63.8	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C		Ⅱ-3～Ⅲ-1
SP4056	石庖丁	98次	SK-103	第3層	(6.6)	5.6	0.5	(26.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ-1
SP4057	石庖丁	98次	SD-65A	第1層	(8.3)	4.0	0.7	(39.5)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C		中世
S4050	大形石庖丁	98次		暗褐色砂質土	(7.9)	(7.4)	0.5	(46.2)	泥質ホルンフェルスB		弥生～中世
SP4058	大形石庖丁	98次	SD-101	第1層	(6.7)	8.6	1.0	(75.7)	砂質片岩		Ⅴ
S4051	大形石庖丁	98次	SK-103	第1層	(10.5)	9.7	1.4	(168.9)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		Ⅳ-1
SP4059	大形石庖丁	98次	SK-119	黒灰色粘土	(7.0)	(8.0)	0.9	(51.0)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		Ⅱ-1
S4052	石庖丁未成品	98次		暗黄褐色砂質土Ⅱ	(8.5)	6.6	2.0	(114.9)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		Ⅱ-1～Ⅱ-3
S4053	石庖丁未成品	98次	SX-101	第1層	12.1	6.3	1.2	102.2	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		庄内



第536図　中央区出土磨製石器（１）



第537図　中央区出土磨製石器（2）

している。背部は剥離痕がそのまま残されており、製作の粗雑さがうかがえる。残存部分においては穿孔の痕跡がなく、孔が未来なかったか、単孔であった可能性が高い。

結晶片岩製石庖丁未成品（S4052・4053）　S4052は縁辺から中央に向かって剥離を施しており、中央部で折損している。その厚みから粗割段階での製作途中失敗品と考えられる。S4053は器形調整段階での失敗品であると考えられる。剥離性の強い石材を利用しており、器形を整える際に予定外の剥離が生じ、失敗品として廃棄されたものと考えられる。

柱状片刃石斧（S4054・4055・SP4060）　S4054は抉入柱状片刃石斧である。刃部端は欠損している。基部は敲いた痕跡が残っており、それにともなって一部剥離している。基部以外の面は細かな研磨が施されており、丁寧に製作されている。S4055は柱状片刃石斧である。断面形状は隅円の台形を呈しており形態から抉りを有する可能性が高いが、欠損により確認できない。基端部や後主面は剥離が著しく、後主面には細かな敲打痕を残している。

扁平片刃石斧（SP4061）　太型蛤刃石斧の欠損した剥片を利用したと思われる小型の扁平片刃石斧で、表面は凹凸があり、研磨できていない部分が多い。刃部のみ鋭い。

磨製石剣（S4056）　S4056は中央に鎬を有し、磨製石剣と考えられるが、先端部と基部を欠損している。両側面の端部は平坦に研磨されており、基部にちかい部分であると推測される。中央部に細かな円形のくぼみを有する。

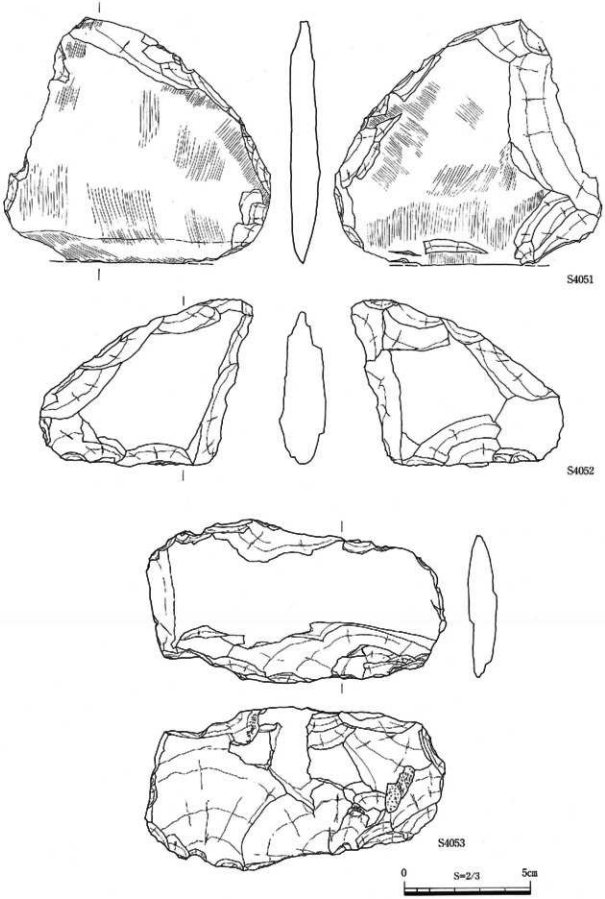
（3）石製品

石製紡錘車（S4057～4060）　S4057～4060は石製紡錘車である。S4059・4060は完形である。これらは石庖丁からの転用品の可能性があるが、特にS4057・4058は厚みや表面の状態、研磨痕からその可能性が高い。いずれも孔は両面穿孔である。また、S4057・4060は片面に未穿孔痕がある。周縁部は研磨され、平坦面を有する。S4060の上縁には直線の細い擦切溝状の痕跡がみられ、分割のための溝の可能性がある。

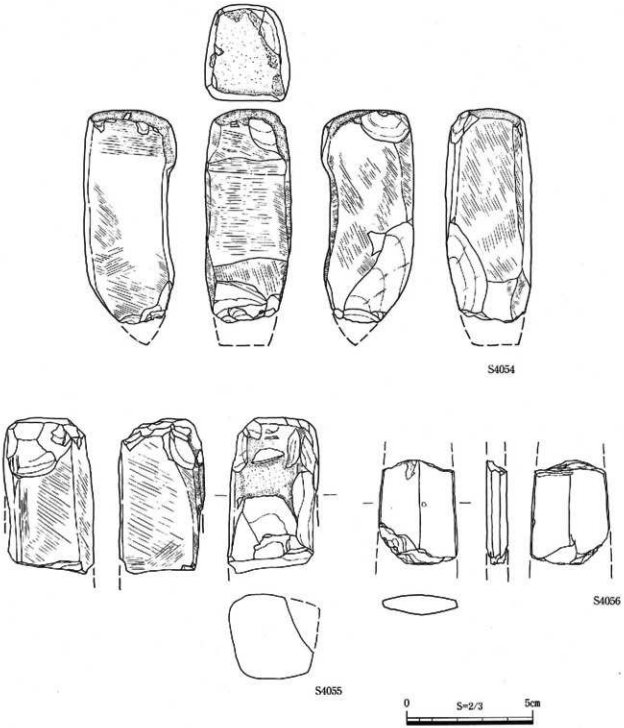
石製円板（S4061）　S4061は円板状に加工されたもので、石製紡錘車の未成品と思われる。周縁の一部には刃部を有している部分があり、また、剥落部分があることから欠損した石庖丁の転用品と考えられる。石質は良くない。

用途不明石製品（S4062～4066・SP4062～4065）　S4062は棒状の石製品で、縦方向に半分に割れたものを使用している。このため割れ面の部分は平坦面を有している。この面の中央部には、横方向の刻目風の擦痕がつけられている。また、他の面にも使用によるやや太めのU字状の溝が残っている。全体的に横位方向の細かい擦痕がみられるが、その用途は不明である。両端は敲打によって潰れているが、側面部中央の一部にも敲打痕がみられる。

S4063・4064は片面が剥離しており、本来の形態の推定は困難である。S4063の表面はほぼ平坦な面になっている。端部がL字状に研磨されていることから、形状的には磨製石剣の茎部の可能性も考えられる。しかし、鎬もなく平坦であることからその他の製品も視野にいれる必要がある。S4064はやや偏った位置に円孔をもつもので、孔はほぼ垂直にあけられている。



第538図　中央区出土磨製石器（3）



第539図　中央区出土磨製石器（４）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
S4054	抉入柱状片刃石斧	98次	SK−123	第3層	8.6	3.6	3.5	186.1	泥質ホルンフェルス D		Ⅱ−3−b
S4055	柱状片刃石斧	98次	SD−101C	第9(下)層	(6.1)	3.6	3.3	(118.9)	砂質ホルンフェルス	受圧面に敲打痕	Ⅲ−2
SP4060	小形方柱状片刃石斧	98次	掘土	暗褐色砂質土	(3.1)	1.2	1.5	(9.6)	安山岩 C		弥生〜中世
SP4061	扁平片刃石斧	98次		暗褐色砂質土	2.5	1.7	0.7	5.5	玄武岩質片岩 A		弥生〜中世
S4056	磨製石剣	98次	SD−58	第1層	(4.1)	3.2	0.8	(15.8)	泥質ホルンフェルス B	鞍剣形 未穿孔痕有	中世

Ｓ4065は円板状の石製品で、復元すれば中心よりややずれた位置に孔の一部が残っている。本製品は薄く仕上げられており、周縁は両面から研磨され鋭利な刃部状を呈す。石製紡錘車の可能性もあるが、刃部状を呈することや厚み、孔の位置から他の用途を推定するほうが良い。

Ｓ4066は流紋岩製で刃部の形状から石庖丁あるいは未成品の再加工品の可能性が高い。石庖丁の右側端部が折損後、三角形状に再加工したものと思われる。片面のみであるが未貫通の孔がある。刃部は剥離と擦痕による潰れがみられるが、どの段階によるものか判断できない。

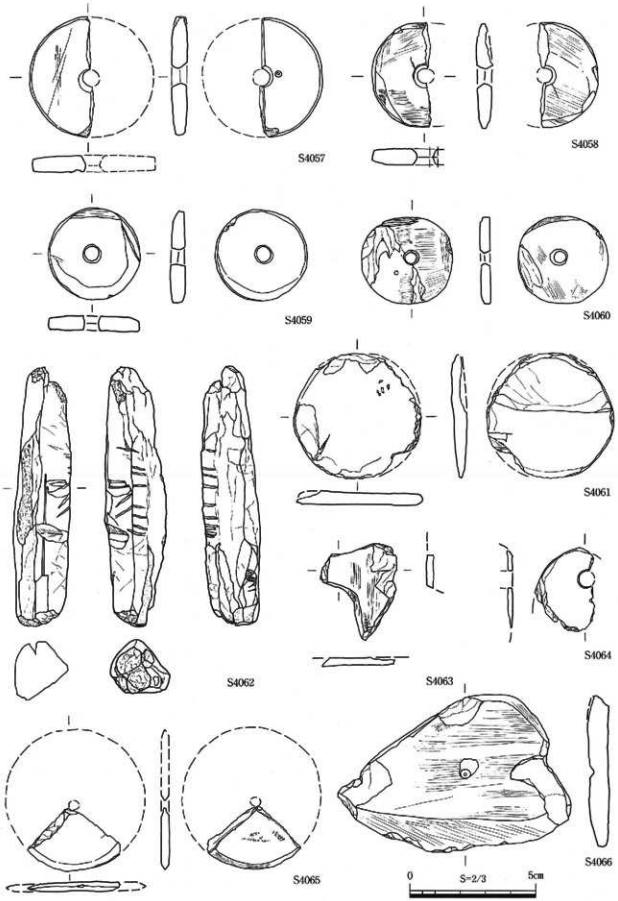
石鋸（ＳＰ4066～4071・4075）　いずれも横長に薄く割れた紅簾片岩等の剥片をそのまま利用したもので、形態を整えるための調整はおこなっていない。このため、欠損したものかどうかの判断ができるものは少ない。これらは横長の一辺を刃部に使用しており、この部分のみ磨耗している。ＳＰ4069の石鋸は、端部・刃部の一部を欠いているが、長方形を呈するもので使用により刃部中央部が磨り減っている。ＳＰ4068・4071は、刃部の厚みが0.5cmほどでやや厚みがあり丸くなっているのに対し、それ以外は0.3cmほどの薄手で刃部もやや鋭い。

石鋸素材（ＳＰ4072～4074・4076～4080）　いずれも横長に薄く割れた紅簾片岩等の剥片である。石鋸として使用は認められないもので、素材あるいは石鋸として利用できない剥片の可能性がある。

砥石（Ｓ4067～4075）　Ｓ4067～4069・4071・4072はⅠ類、Ｓ4070・4073～4075はⅡ類に分類される。Ⅲ類に属する資料はない。またⅠ・Ⅱ類のうち、Ｓ4068はAa、Ｓ4069はAb、Ｓ4067・4070はAcに、Ｓ4071・4072・4075はBa、Ｓ4073はBcに分類される。Ｓ4074はいびつな形状をしているが、礫の旧形もとどめていないので、定形砥石の中でも特殊なものととらえておきたい。以下、資料を個別に検討していく。

Ｓ4067は各面に使用痕Ｇがあるほか、ｃ面には使用痕A2もある。Ｓ4068は、ａ・ｂ面は中央部の使用により、ａ面は上下部に、ｂ面は中央部に段状に境界が形成される。各面に使用痕

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種		備考	共伴時期(大和編式)
S4057	石製紡錘車	98次	SD-53	第1層	径4.8	孔径0.6	0.8	(12.4)	玄武岩質凝灰岩質片岩B	未穿孔痕有		中世
S4058	石製紡錘車	98次	SD-102	第1層	径4.2	孔径0.6	0.8	(9.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	使用による磨耗著しい		Ⅱ-4
S4059	石製紡錘車	98次	排土	黒色砂質土	径3.7	孔径0.6	0.8	14.0	滑石	石庖丁転用		弥生中・後期
S4060	石製紡錘車	98次	SD-102	第2層	径3.6	孔径0.6	0.5	9.3	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A			Ⅱ-2
S4061	石製円板	98次	SD-3005	第1層	5.0	5.0	0.6	(17.9)	板榧石片岩B			近世
SP4062	用途不明石製品	98次	SK-116	第1層	15.5	(3.6)	(1.8)	(147.0)	玄武岩質片岩C			Ⅱ-2
S4062	用途不明石製品	98次	SD-658	暗褐色砂質土 第1層	10.3	2.2	2.1	(43.0)	泥質点紋片岩B			弥生～中世 中世
SP4063	用途不明石製品	98次	SD-101B	第4層	(5.4)	(2.1)	(0.4)	(6.5)	玄武岩質凝灰岩質片岩A			Ⅱ-4・Ⅳ
S4063	用途不明石製品	98次	排土	黒色砂質土	(3.0)	(3.9)	(0.4)	(4.5)	玄武岩質凝灰岩質片岩A			弥生中・後期
SP4064	用途不明石製品	98次	SK-103	第1層	2.6	2.1	0.3	2.2	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A	石庖丁転用		Ⅳ-1
SP4065	用途不明石製品	98次	排土	暗褐色砂質土	(1.8)	(1.7)	0.5	(2.0)	泥質ホルンフェルスA	石庖丁？		弥生～中世
S4064	用途不明石製品	98次	SX-201	第1層	(3.3)	(2.4)	0.2	(2.3)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C			Ⅱ-1-b
S4065	用途不明石製品	98次	SD-101C	第13層	径※5.0	—	0.3	(3.8)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A			Ⅱ-1
S4066	用途不明石製品	98次		暗灰色粘土(炭混)	9.3	6.3	0.8	(55.9)	流紋岩F	石庖丁転用 未穿孔痕		弥生中期



第540図　中央区出土石製品（１）

Gがあるほか、c面には使用痕E2Lもある。S4069は各面に使用痕G、f面には使用痕A2もある。

S4070はa・c面に使用痕E2Lがある。全体的に黒化しており、被熱の可能性がある。

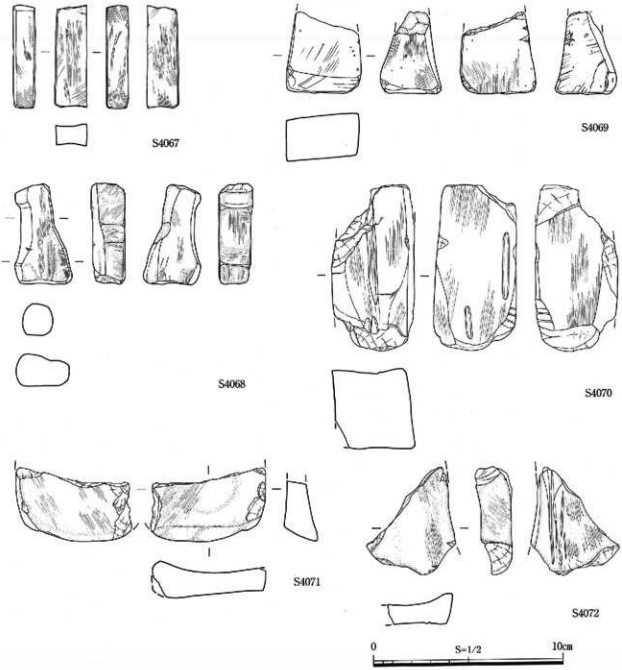
S4071はa・b面の使用痕Gのみである。S4072のa面には使用痕C2vが数条並ぶ。b・c面は使用痕Gのみであるが、b面は研ぎ減りが顕著である。

S4073のa面は使用痕Gのみであるが、部分的に敲打痕がある。b面は使用痕E2u（4条）とA1もある。c・f面には中央部に段違いとなるような使用痕Fがある。特にf面の段は手の反復運動による形成が想定される。さらにこれに接するように径0.8cmと0.7cmの円孔状のくぼみが2ヶ所ある。前者は孔底部の縁が中央部よりもわずかに深く、底部の縁に沿って溝がめぐるような状態となっている。深さは0.3cm程度である。後者は前者の後に使用された、あるいは前者よりも低い頻度で使用されたとみられ、前者よりも浅く、底部縁部の溝も不明瞭である。いずれも孔壁面に回転擦痕がみられる。e面は部分的に破損しているが、中央に使用痕E2Lが連続的に形成され、わずかながら階段状の凹凸をなしている。d面のうち半分は破面であるが、残りは一定方向の使用痕Gがみられる。S4074はa面に使用痕E2uがある。b・f面の境界付近には、円孔状のくぼみがある。孔の底部は中央が盛り上がるような形状となり、底部の縁に沿って溝がめぐるようになっている点ではS4073と共通する。孔壁面には回転擦痕がみられ、同心円状にわずかな擦痕が残る。また、これを中心に、円錐状に周囲が落ち込むような形状となっている。c面はやや突出した曲面となり、不定方向の使用痕Gによって一つの面が形成される。S4075はa面に使用痕E2Lと、これに直交するE1vがある。d面は使用痕E2uがある。b・c面は使用痕G、Hのみである。

（4）礫石器

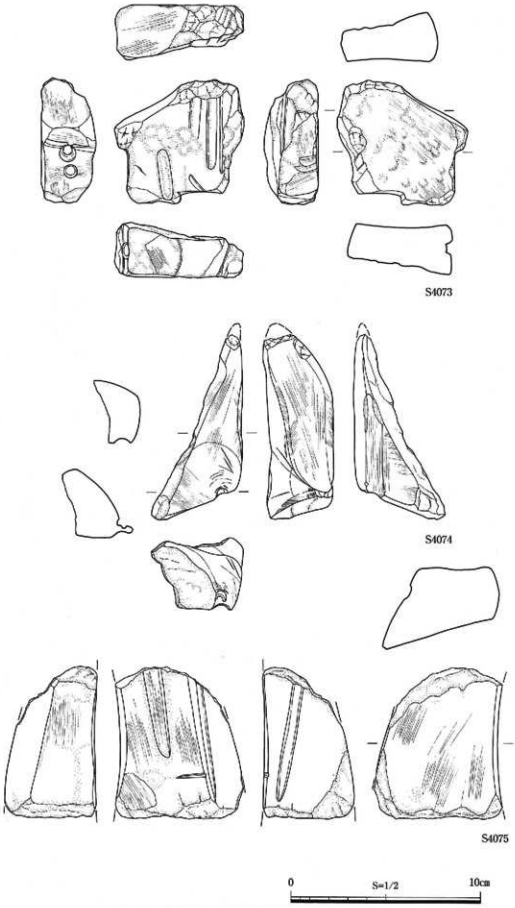
敲石（S4076～4079）　S4076には肌理の細かい硬質の石材が用いられている。棒状を呈する敲石で、c～f面に使用痕がある。e面はⅢ類の発達が著しい。c面の中央部には使用痕Ⅱ

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
SP4066	石錘	98次	SD-57	第1層	(4.5)	(3.6)	0.4	(5.9)	紅簾石片岩A		中世
SP4067	石錘	98次	SK-101	第1層	(4.8)	(3.1)	0.4	(7.0)	雲母片岩		庄内
SP4068	石錘	98次	SK-104	第1層	5.8	(2.7)	0.8	(17.8)	紅簾石片岩D		Ⅱ-2
SP4069	石錘	98次		暗褐色砂質土	(11.3)	(3.9)	0.5	(31.9)	紅簾石片岩D		弥生～中世
SP4070	石錘	98次	SX-51	第2層	(8.0)	(5.0)	0.6	(25.5)	紅簾石片岩A		中世
SP4071	石錘	98次		暗褐色砂質土	6.2	(2.6)	0.6	(16.1)	紅簾石片岩A		弥生～中世
SP4072	石錘素材	98次	SK-119	黒灰色粘土	7.3	3.8	0.4	18.0	石英質片岩		Ⅱ-1
SP4073	石錘素材	98次	SD-102	第1層	7.9	3.9	0.5	17.5	石英質片岩		Ⅱ-4
SP4074	石錘素材	98次		暗黄褐色粘質土	(6.1)	(2.9)	0.2	(5.0)	紅簾石片岩B		Ⅴ
SP4075	石錘	98次	SD-54	第1層	(2.8)	(3.7)	0.4	(7.8)	紅簾石片岩A		中世
SP4076	石錘素材	98次	SX-51	第1層	(3.4)	(3.0)	0.6	(8.1)	紅簾石片岩A		中世
SP4077	石錘素材	98次	SD-2001	第1層	(8.8)	(4.9)	0.8	(42.7)	紅簾石片岩A		中世
SP4078	石錘素材	98次	SD-101B	第4層	11.5	6.2	0.4	37.4	紅簾石片岩D		Ⅲ-4・Ⅴ
SP4079	石錘素材	98次	SD-101	第1層	8.0	3.9	0.7	25.0	紅簾石片岩A		Ⅴ
SP4080	石錘素材	98次		黒色砂質土	(4.5)	(3.6)	0.8	(16.8)	紅簾石片岩A		弥生中・後期

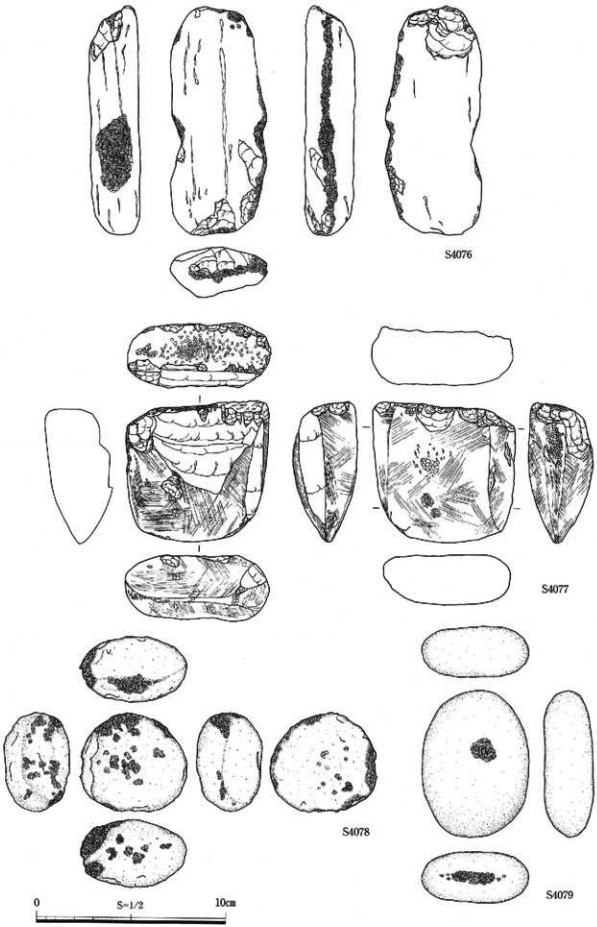


第541図　中央区出土石製品（2）

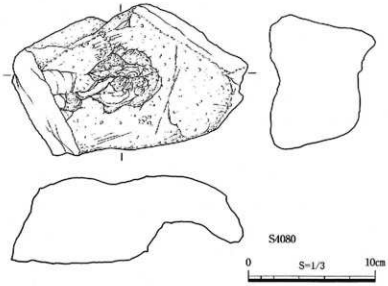
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	砥石目	備考	共伴時期(大和様式)
S4067	砥石	98次		灰色粘土	5.5	1.7	1.2	20.3	泥質ホルンフェルス A	2000+		弥生中期
S4068	砥石	98次	SD−63A	第1層	4.3	3.1	1.8	30.0	細粒砂岩 C	600		中世
S4069	砥石	98次		暗褐色砂質土	(4.4)	4.0	3.2	(68.6)	安山岩 C	800	顔料付着か	弥生〜中世
S4070	砥石	98次	SD−101	第1層	8.8	4.4	4.4	214.9	中粒砂岩 B	400	一部被熱か	V
S4071	砥石	98次	SD−101	第1層	(3.9)	(6.1)	1.9	(49.0)	細粒砂岩 D	800		V
S4072	砥石	98次	SD−101	第1層	(5.7)	(4.7)	2.0	(32.5)	細粒砂岩 D	1000		V
S4073	砥石	98次	SK−201	第6層	6.9	7.0	2.9	107.6	流紋岩質凝灰岩 D	360		Ⅱ−2
S4074	砥石	98次		暗黄褐色砂質土	(9.9)	4.8	4.3	(103.5)	安山岩 C	2000		弥生〜中世
S4075	砥石	98次	SD−101C	第13−b層	(9.0)	(6.8)	4.9	(313.7)	細粒花崗岩 A	60−		Ⅲ−1



第542図　中央区出土石製品（3）



第543図　中央区出土礫石器（１）



第544図　中央区出土礫石器（2）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
S4076	敲石	98次	SX-2051	第2層	12.1	4.9	2.6	296.7	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		中世
S4077	敲石	98次	SK-119	第6層	7.1	7.5	3.5	309.7	安山岩 B	太型蛤刃石斧転用	Ⅲ-1
S4078	敲石	98次		暗褐色砂質土	5.0	5.5	3.3	130.0	流紋岩質溶結凝灰岩 A		弥生～中世
S4079	敲石	98次	SD-101C	第9(下)層	7.6	5.6	2.5	181.9	流紋岩質凝灰岩 E		Ⅱ-2
S4080	台石	98次	SK-201	第3層	(28.6)	11.4	7.5	(1,915.2)	泥質ホルンフェルス E		Ⅱ-2

類を主体にⅠa類やⅠb類が伴っており、顕著な使用が認められる。S4077は太型蛤刃石斧の転用品である。e面の敲打痕や剥離痕には、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類があり、著しい。Ⅲ類とした剥離痕はすべてe面から生じている。f面の石斧の刃部部分にも使用痕と思われる痕跡が残されているが、いずれの段階の痕跡かは判然としない。S4078には肌理の粗い石材が利用されており、もろい。使用痕はすべてⅠa類にあたり、e面の中央部とc面の先端部に多く、わずかにa・e面の中央部にも残されている。剥落によって明瞭な使用痕は残りにくい。S4079には肌理の細かい硬質の石材が利用されている。使用痕はa・f面の中央部にⅠa類がみられる。使用痕の発達はそれほど強くないが、a面の中央部では密集部を形成しており、f面の中央部は使用痕によってやや面を形成しているようである。

台石（S4080）　S4080は、今回報告するなかで最も大形の台石である。肌理の粗い、やや軟質の石材が用いられている。使用痕はa面の中央部のみに限られ、明確なVb類が確認できる。使用痕Vb類は2つの溝状の痕跡が交差し、最も深い箇所では5cmにまで達する。

註

(1)　栗田薫「打製石剣の製作技術」『弥生文化博物館研究報告』第4集　pp.31－54、1995年。

(2)　同様の特徴をみせる石材を利用した中形尖頭器が、S4005と同じ地点・層位から1点出土している。木葉形を呈し、Ⅱ類に分類されるものである。

第4節　まとめ

1．地形

中央区では調査数も少なく、設定された調査区も狭小であることから、地形に関して多くのことを語るのは難しい。第50・53次調査が、遺跡の中央部に総延長200mの南北トレンチを開けた結果となり、その成果が中央区は弥生時代前期にはくぼ地であるという印象を与えてきた。確かに、第98次調査でも調査区の両端で弥生時代中期以前の落ち込みを確認し、周囲の地形は安定しないことが予想された。しかし、同調査区中央やや北寄りでは、唐古・鍵遺跡において微高地の特徴とされる黄灰色粘土を検出している。同様に第53次調査区で、弥生時代前期の落ち込みに挟まれた幅20mほどの狭い微高地を検出している。このことは、遺跡の中央部全体がくぼむというわけではないことを示していよう。一方、第72・76次調査では、調査区の中央やや北寄りで溝の集中する幅10mほどの落ち込みを確認している。おそらく、遺跡の中央部は、いくつかの谷地形と微高地が入り込むものと考えられる。微高地周辺では、弥生時代遺構を検出し、居住の痕跡を確認することができる。谷地形は、弥生時代前期以降に埋没を始め、洪水等の影響により弥生時代中期後葉にはほぼ埋没する。

2．遺構変遷

（1）弥生時代前期～中期前葉（第545図）

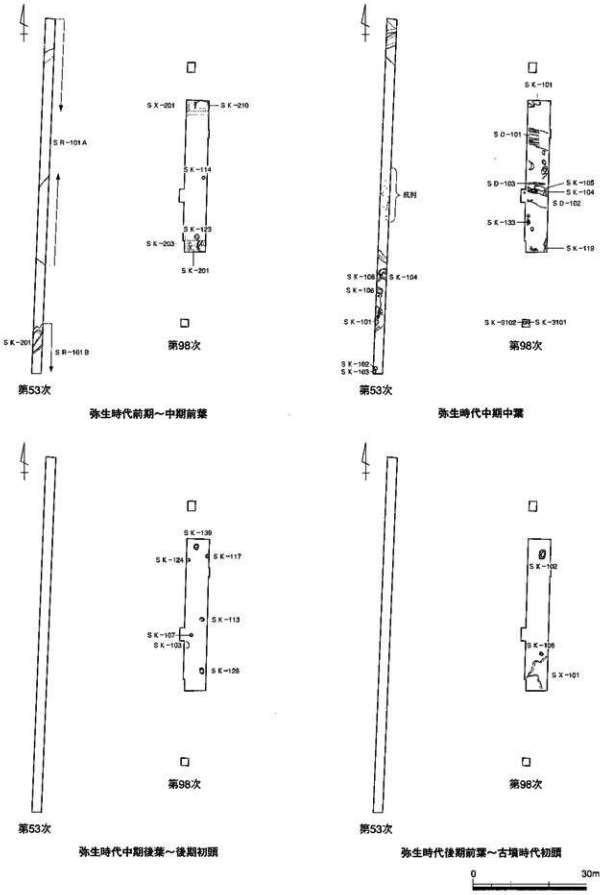
第98次調査区で確認した弥生時代前期の遺構は、ＳＤ－101の底面において検出した大和第Ⅰ－２様式の土器が出土するＳＤ－201のみに過ぎない。他にも遺構の分布することは排水溝からうかがえるが、下層遺構は調査しておらず不明である。しかし、第50・53次調査区では、幅50mを超える落ち込みを２条検出しており、あまり安定した土地とはいえなかったようである。第53次調査区では、弥生時代前期の木器貯蔵穴１基と小土坑１基とともに、北側落ち込みにおいて倒置された完形の前期弥生壺と周囲に大型壺片と焼土、その付近から小型壺が出土している。なお、落ち込みや他時期の遺構から、浮線文土器が出土しており注目される。

弥生時代中期前葉には、第98次調査区で大型土坑が多数掘り込まれており、これらは木器貯蔵穴と考えられる。このうち、調査区南西隅で検出したＳＫ－201では、上層から多数の大和第Ⅱ－２様式の土器とともに木製品が出土したが、その下層からは玉製作に使用されたと考えられる砥石（Ｓ4073）が出土しており特筆される。この点に関連して、第98次調査区からは、他にも玉製作に使用されたと考えられる砥石が２点（Ｓ4074・4075）出土している。このうち、Ｓ4075はＳＤ－101Ｃからの出土であり、弥生時代中期中葉前半に遡る。また、紅簾片岩の石鋸及びその素材は、第98次調査区からは18点出土しており、１㎡あたり0.07点の出土数となる。

第89表　中央区　範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表

時期	土器様式	調査次数	遺構	番号	本製品	石器	特殊遺物
前期	Ⅰ	98次	SK	－			
			SD	201	201〔弓（W4003）〕		
中期初頭	Ⅱ－1	98次	SK	－			
			SD	－			
			SX	201	201〔用途不明品（W4009・4011）〕	201〔スクレイパー（S4036）、用途不明石製品（S4064）〕	201〔搬入土器（P5511（伊勢湾岸））〕
中期前葉	Ⅱ－2・3	98次	SK	114・123・201・203・204・208・210	201〔藤柄矛柄（W4001）、盾（W4004）、盾杯（W4005）、用途不明品（W4010）、不明建築材（WP4001）〕 203〔楫（W4007）〕	123〔石鏃（SP4026）、往状片刃石斧（S4064）〕／201〔石斧（SP4021）、スクレイパー（S4041）、砥石（S4073）、台石（S4080）〕／208〔石剣（SP4012）〕 210〔石剣（SP4022）〕	201〔加工痕のある角（BP5018）〕 210〔物入土器（不明）（P5303）、搬入土器（P5430（河内））、用途不明品（BP5014）〕
			SD	202			202〔土製紡錘車（D5083）〕
中期中葉	Ⅲ	98次	SK	101・104・105・111・115・116・119・122・125・129・131・132・133・134・135・136・137・205・3101・3102	119・125〔合子（W4006）〕	104〔石鏃（S4009）、石鍬（SP4068）〕／105〔スクレイパー（S4032）〕／116〔用途不明石製品（SP4062）〕／119〔大形石庖丁（SP4059）、石錘素材（SP4072）、敲石（S4077）〕 125〔石庖丁（S4047）〕 137〔石剣（SP4003）〕	101〔絵画土器（P5033）、搬入土器（P5417（揖斐？））、土製投弾（D5026・5028）、用途不明土製品（D5068）〕 125〔搬入土器（P5503（伊勢湾岸））〕
			SD	101B・101C・102・103・104		101B〔石剣（SP4019）、用途不明石製品（SP4063）、石庖丁（S4046）、石錘素材（SP4078）〕／101C〔石剣（S4001・SP4006・4007）、石錘（SP4048）、用途不明石製品（S4065）、砥石（S4076）、敲石（S4079）〕／102〔石剣（SP4008）、石鏃（S4011・4017・SP4023・4026・4033）、石錘（SP4052・4055）、往状片刃石斧（S4055）、石製紡錘車（S4058・4060）、石錘素材（SP4073）〕 104〔石剣（SP4018）、中形尖頭器（S4007）、スクレイパー（S4034）〕	101C〔土器文様（P5108（木宮文））、歩孔土器（鉢）（P5210）、搬入土器（P5577（？））、有孔土玉（D5033）、卜骨（B5024）〕 101B〔搬入土器（P5420（揖斐？）・5447（近江）・5450（近江）・5462（近江）・5567（伊勢湾岸））〕 102〔搬入土器（P5501（伊勢湾岸））〕
			SB	101			
中期後葉	Ⅳ	98次	SK	103・107・108・113・117・124・128・139	128〔不明建築材（W4008）〕	103〔石鏃（SP4041）、用途不明石製品（SP4064）、石庖丁（SP4056）、大形石庖丁（S4051）〕 113〔スクレイパー（S4039）〕 139〔中形尖頭器（S4008）〕	103〔搬入土器（P5437（紀伊））〕 108〔土器片紡錘車（D5088）〕 128〔鉢合形土器（P5211）〕
			SD	－			
後期初頭	Ⅴ	98次	SK	－			
			SD	101		101〔石剣（S4002）、石鏃（SP4030）、石錐（S4024）、石小刀（S4028）、大形石庖丁（SP4058）、石錘素材（SP4079）、砥石（S4070・4071・4072）〕	101〔絵画土器（P5005・5012・5015・5050）、搬入土器（P5405（岩宮？）・5413（岩宮）・5438（紀伊）・5468（近江）・5474（近江）・5475（近江））、土器片紡錘車未成品（D5130）〕
後期	Ⅵ	98次	SK	102			
			SD	－			
古墳初頭	庄内・布留	98次	SK	106			106〔搬入土器（P5565（伊勢湾岸））〕
			SD	－			
			SX	101		101〔石剣（S4003）、石鏃（SP4032）、石庖丁（S4042）、石庖丁未成品（S4053）、石錘（SP4067）〕	101〔有孔土玉（D5035）、土器片円板（D5149）〕

これは、南地区の1㎡あたり0.02点、西地区の1㎡あたり0.03点を凌駕する紅簾片岩の石鋸及びその素材の出土数といえる。さらに、西地区でも紅簾片岩の石鋸及びその素材の出土は、中央区にちかい第80・93次調査区に偏っている。中央区周辺において、弥生時代中期前葉～中期中葉前半の玉生産を想定する必要がある。



第545図　中央区　範囲（内容）確認調査の遺構分布図（S＝1/1,000）

（2）弥生時代中期中葉（第545図）

第98次調査区では北側への地形の落ち込み際で、弥生時代中期中葉にＳＤ－101Ｃが掘削される。ＳＤ－101Ｃから南側では、弥生時代中期中葉～古墳時代初頭の遺構検出面で、弥生時代中期中葉と考えられる多くの炭灰土坑を検出している。一方、ＳＤ－101Ｃから北側は、弥生時代中期中葉前半の木器貯蔵穴と考えられる大型遺構の堆積土上に暗褐色砂質土が堆積し、その上面が弥生時代中期中葉後半の遺構検出面となる。おそらく、ＳＤ－101Ｃから北側への居住域の拡がりは、弥生時代中期中葉後半以降であろう。

なお、第53次調査区では、その中央部において径0.1mほどの杭が北北東－南南西へ列状に打ち込まれている。調査担当者は、完形石庖丁の出土量の多さと合わせて、水田の可能性を想定している。一方、同調査区の南端では、落ち込みに挟まれた狭小な微高地があり、弥生時代中期の遺構分布から居住域であったと考えられる。唐古・鍵遺跡の中央区において生産域と居住域が混在しうるのか、その整合性を検討する必要がある。

（3）弥生時代中期後葉～後期初頭（第545図）

第98次調査区のＳＤ－101Ｃは、弥生時代中期中葉後半の再掘削（ＳＤ－101Ｂ）を経て弥生時代中期後葉まで継続し、弥生時代後期初頭には再び再掘削（ＳＤ－101）を受ける。注目すべきは、ＳＤ－101（Ｂ）における搬入土器の多さである。弥生時代中期後葉のＳＤ－101Ｂには近江系が多く、弥生時代後期初頭のＳＤ－101には吉備系を含むという傾向がある。第98次調査区では弥生時代中期後葉以前にも搬入土器が目立ち、弥生時代中期前葉のＳＫ－210からは胴部に縦位ミガキを施した河内型甕（Ｐ5430）、弥生時代中期中葉前半のＳＫ－125からは伊勢湾沿岸と考えられる太頸壺（Ｐ5503）、弥生時代中期中葉後半のＳＫ－101からは凹縁部内面に凸帯をめぐらせた播磨系の壺（Ｐ5417）が出土した。このような搬入土器が多い地点は、南地区の第44次調査区を指摘しうるが、これを特殊性として強調できるのかは検討を要する。

なお、第53次調査区では、調査区南端の弥生時代中期居住域の遺物包含層から半載された碧玉製管玉が、中央の落ち込みから弥生時代後期の土器とともに翡翠製大型勾玉が出土した。同様な翡翠製大型勾玉としては、近接する第80次調査区ＳＤ－101Ｂから出土した鳴石容器に収められた2点がある。これら特殊な遺物については、周辺遺構との関連を検討する必要があろう。その他、第50次調査区では、弥生時代中期後葉の土器棺墓3基を検出した。

（4）弥生時代後期前葉～古墳時代初頭（第545図）

中央区における弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構としては、第50次調査区で井戸と考えられる土坑、土器を多量に含んだ小溝を検出している。しかし、これら以外の遺構はあまり顕著ではない。なお、第53次調査区で谷地形の痕跡とされ、多量の土器と翡翠製大型勾玉が出土した落ち込みは溝となる可能性もあるが、確定はできない。

古墳時代初頭の遺構は、第98次調査区で井戸と考えられる庄内期のＳＫ－106を検出した。また、ＳＸ－101は庄内式の土器を含んだ浅い落ち込みであるが、その堆積土が周溝墓や古墳の周溝の堆積土に類似しており検討が必要である。

報告書抄録

ふりがな	からこ　かぎいせき　Ⅰ　　はんいかくにんちょうさ
書名	唐古・鍵遺跡　Ⅰ　―範囲確認調査―
副書名	
巻次	
シリーズ名	田原本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	石川ゆずは・上峯篤史・奥田尚・奥谷知日開・奥山誠義・櫻井拓馬・戸根比呂子・難波洋三・西岡成晃・西野摩耶・藤田三郎・豆谷和之・宮城　木・宮本長二郎・村上隆・渡邊貴代・薬科哲男
編集機関	田原本町教育委員会
所在地	〒636－0325　奈良県磯城郡田原本町926－1
発行年月日	西暦2009年３月23日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東径	調査期間	調査面積	調査原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
唐古・鍵遺跡	奈良県磯城郡田原本町大字唐古および鍵	293636	11－A 066	34度34分2秒	135度48分23秒	1996.11.20～2004.10.23	4350㎡（重複部を含まない面積：4027㎡）	範囲確認

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
唐古・鍵遺跡	環濠集落	弥生	南地区：土坑・溝（環濠・区画溝）・井戸・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・炉跡・方形周溝墓・土器棺墓 東環濠：土坑・環濠 西地区：土坑・溝（環濠・区画溝）・井戸・竪穴住居跡・掘立柱建物跡 中央区：土坑・溝（区画溝）・竪穴住居跡	弥生土器・木製品・石器・土製品・石製玉・ガラス製玉・金属器・骨製品・卜骨・絵画土器・青銅器鋳造関連遺物など	南・東・西地区において環濠を確認。 南地区：青銅器鋳造関連遺物及び炉跡を検出。居住区内で方形周溝墓・土器棺墓を検出。 西地区：大型建物跡・竪穴住居跡群を検出。区画溝から翡翠製勾玉２点を収めた鳴石容器出土。 中央区：居住区内部の状況を確認。

田原本町文化財調査報告書　第5集
唐古・鍵遺跡Ⅰ
― 範囲確認調査 ―
遺構・主要遺物編

平成21年3月23日

編集・発行／田原本町教育委員会
奈良県磯城郡田原本町926-1
印刷・製本／株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3-464